

増補 2 0 1 4

はじめに

09年の校正版以後も、一見多くの魅力的商品が発売され、どんどん右肩上がりに進化しているようだ。何度も何度も失望と憤りを繰り返してなお、新製品には惹かれてしまう。

本書の『はじめに』にも書いたように、パラグラフを変えるような新しいものは一切ない筈が、それでもメーカーのキャッチコピー、雑誌のPap記事にワクワクする。いつもの事だが、新商品の機能や性能は、科学的ではなく情緒的、感情的な思いがもっともらしいデータから論理的に説かれ、よほど眉に唾して考えないとメーカーの術中に填り、魔法が解けた時自虐的に笑う他なくなる。山岳雑誌も、もちろん記者クラブ的ジャーナリズムの系譜に連なるものだから、内輪のそこそこ大きな市場に安住して、国際競争力のある登山用品は殆ど生まれぬ。

『増補』では、それらの点を解きほぐすと同時に、新たなファッションの流れや製品について書く事にする。本質的な革新かのような宣伝と言説に惑わされないようにしたい。殆ど何一つ本質的な革新はないといえば夢がないようだが、それが現実だ。

この本は長期縦走登山における基本的な問題を、体系的、科学的に解明しようとしたエッセイ "essai" 試みのつもりだ。書かなければならぬ問題は、著者の能力を遙かに超えて大きく、複雑で、大改訂を繰り返す度、時間に追われ満足にはほど遠い状態で上呈している。毎回、時間に区切りをつけることによってのみ、かろうじて形にすることが出来るへろへろ状態だった。

2009年最終版プリント後の山行でも、毎回、改善する点や新たな発見がいくつも出てくる。この分野は、理論ではすっきり割り切れない部分や好みの問題も多い。シビアに生命の危険のある活動ではないから、嗜好が大きなウェイトを占めて当然かもしれない。だから、登山の装備や食糧は実用性はさて置き、業界の作り出した流行に流され勝ちで、いつまでも本質的に機能的なものにならない。命の危険があるクライミングギア類だけは、確かに以前より確実に良くなっているようだ。

幅広く、相互作用している複雑な内容だから、『増補』するにも本書以上にすっきりまとめられず、エッセイ "essay" へば随筆のようになってしまった。本書自身の、誤字脱字、明らかな間違いを訂正する作業も残っている。まだ資料が散逸せず、記憶も残っている内にといい、意を決して書いてみた。(2013.6.27.記)

山の生活技術や装備等を書いた本のレベルは、経済学もびっくりだろう。ノーベル経済学賞は、ある理論が受賞した翌年、全く相矛盾する理論が受賞したり、受賞者が顧問をしていたファンドがその翌年破綻するような、現実感リアルティの甚だ乏しいものだ。山の本では、不適切な根拠をエビデンス "evidence" つまり証拠として提示し、**脳内登山者を煙に巻いたり**、もっともらしく自分の小さな経験を一般化したりと、その非科学性は手が付けられない。

2007年最終版の『はじめに』の最後の部分で、デカルトの言葉を引用した。

ご承知のように、その言葉は現在の世界がヨーロッパ文明に席卷されている理由を端的に表している。それまでの人類の飛躍は世界各地で同時多発的に生じたというのが科学史の常識的知見であるのに対して、科学革命だけは **17c のヨーロッパにだけ**生まれた。

引用した部分『自然(生まれつき)の理性だけを全く純粹に働かせる人たちのほうが、古い書物だけしか信じられない人たちより、いっそう正しくわたくしの意見を判断してくれると期待する』の直前の部分は『自分のことばであるフランス語で書いて、わたしの先生たちのことばであるラテン語で書かないのも、』(前掲書、101頁)だ。

つまり、『古い書物』の考えに合っているか、対応するかどうかとか、本当の現実に適用出来るかどうか分からないエビデンスの検索より、まず第一に自分の頭で考えよということだ。正しいことは、普通の人がかちんと考えれば分かることである。多くの経験科学は、誰も想像出来ないことを発見したのではなく、誰もがうすうす知っていることを言語化、つまり明確に表現しただけのものにすぎない。もし、正しいことが特別の人にしか分からないなら、正しいことは普通の人には分からないこと、極論すれば分からないことが正しいことになってしまう。しかし、全ての人が真つ当な判断能力を持っているという前提で民主主義は成り立ち、それが現代では世界共通の価値観になっている。そのような概念を表すことばは、日本語では殆ど全て欧米語からの、日常語感からちょっと離れた漢字での翻訳であるから、今でも直感的に腑に落ちない。日常語から学問的用語が時間をかけて作り上げられた欧米語は、直感的にその意味を把握しやすいが、日本語では、まず元となる欧米語を考えないと本当の意味が理解出来ない。一手間かかる。しかし、高等教育まで自国語で出来る非欧米国はほぼ日本だけだから、日本語でも丁寧なことばを使えばきちんとしたことが言える、書けると信じている。

山の生活に関する全てのことを扱っている内容だから、とても体系的にすっきり書くことは出来そうもないが、せめて一つ一つのことばの意味をきちんと把握しつつ話を組み立てたい。

去年書いた『増補』の誤字脱字を直すと共に思いつまま加筆(青色)修正することにするので、多少の重複や混乱は切に許して欲しい。(2014.5.27.記)

不十分な点に多少の加筆と修正をした。なお事実関係の変化には、一切手を加えていない。今回部分はパープルで行った。(2014.9.30.記)

いつもながらのやっつけ仕事を反省しつつ、誤字脱字を直すと共に多少加筆した。もちろん、事実関係は去年の春時点で留まっている。印刷可のグリーンにした。「淡クリームせんだい」でプリントして頂けば、本書紙版とお揃いになる。(2015.6.30.記)

誤字脱字を正すと共に多少加筆したが、14年5月以降の新たな情報は加えず赤字修正した。これ以上は全面改稿しかなさそうだ。(2016.5.20.記)

長期縦走

南アルプスで言えば、夏はもちろん、冬期の長期縦走者は激減したままだ。交通の便のいい山小屋や天場だけに人が集中しているのは、この国の休暇事情の貧弱さからだ。山が一番混雑するお盆時期、8月11日が2016年から『山の日』として祝日になったが、これ以上混雑を増やしてどうするつもりなのだろう。山を嫌いになりそうだ。これで本当に登山が出来るのだろうか。ヨーロッパ・アルプスの山小屋では、1人分のマット幅は最低でも80cm(最高140cm)確保されそれ以上は詰め込まず、2ラウンドの食事でさえ希だ。しかも、食事は必ずフルコースだという。その程度でなければ、1年に一度のお祭りならともかく、登山にならないのではないか。

山小屋の公称収容人数は、せめて軍用ベッド幅80cm、あるいは食堂で一度に食事が出る人数にすべきだ。現状の公称定員は留置場や拘置所以下、数百年前の奴隷船の人口密度に近い。公営にもかかわらず素泊まり料金でさえビジネスホテル(今や朝食付きが常識)を上回る。おまけに、寝具付き宿泊でマットを敷いている小屋が南アルプスのどこにあるか。せいぜい、テントマットか銀マットを敷くだけとは、その料金と全く不釣り合いだ。仙水小屋は民営だが、一人に対し幅90cmのマットが敷かれ、それ以上は予約を受けないし詰め込まない。これでやっとグローバルスタンダードの21c的的山小屋だ。中途半端な個室化ではなく、まともな睡眠スペースの確保と定員数に相応しい食堂こそ山小屋には必要だと思う。

夏期には、テントは持ってきても食事は小屋でという登山者や、昼食に小屋の食事を利用する人さえ見るようになったが、小屋頼りの山行では殆ど何ら伝えるべきノウハウも技術も体力も必要ないから、限りなく町のツアーに近い。せっかくのフィールドで同じ時間をかけても、得られる

充実感が天地の差、もったいないと言う他ない。そんな気持ちもあって、増補を加える事にした。

真っ当な情報がない事により、以前より長期縦走のノウハウが得られなくなっているとも感じる。上位互換だから、短期山行の人にとっても非常に有用な筈の情報が失われたと言う事だ。山岳会や山岳部もめっきり少なくなり、長期縦走のノウハウの伝承もされない。昔は、冬期でさえ登山者が多く、その人たちから教えてもらった事や、学んだ事も多かった。今は、いつもラッセル、ラッセル、山慣れない登山者なら不安が勝ってしまいそうだ。山慣れた者には人が少なくてもいい時代になったが、やはりもう少し多くの人たちにこの面白さを共有してもらいたいと思う。

その昔の山岳部、WVの夏合宿は、高校で5日～1週間、大学では10日～2週間が普通だった。全山縦走者もめっきり少なくなり、この軽量化された時代にもかかわらず、例えば、広河原から北岳、塩見と南下し光までという最小全山でさえ、途中の山小屋で、小屋番にあればテントサイトの人からすごいすごいとおだてられ、過分な接待を受けているのを見るほどレアなものになっている。

現在の多くの小屋泊まり宿泊者は、殆ど山そのものテント(生活者)にも興味がなく、唯、食事と小屋番の蘊蓄話を有り難がり、これまで登った山とこれから登りたい山のリストアップ、高山植物にだけ興味があるかのようだ。昔の小屋宿泊者は、テントリタイヤ組かテント山行へのステップアップの為の人が多かった。同じ小屋泊まりといっても、ヨーロッパでは基本的に宿泊者はクライマーだ。日本では、登山者というより日本語のハイカーが相応しい。尾瀬の散策路を歩く人も登山者と呼ばれる。日本の登山が、ハイキングからクライミングまで多義的に使われるからこのようなことが起こる。日本の山は雪線以下だから当然かもしれないが。

小屋の混雑を嫌い、天気の良い時は1人用テントで泊まる単独あるいはパーティーも、登山者ではなくハイカーだろう。ハイキングは何の危険も、技術も必要ない点で登山と異なる。場所によってはあまりに単独テントが多いので、サイトが不足する事態になっている。

それでも、南アでは天場利用者の激減したところが多くなったので、行動の自由が大きく広がった。

昔々の夏山は、2時起床、遅くても4時出発して昼頃到着が基本だった。日が落ちる前、今の小屋泊りの夕食時には明るくて寝られないといいつつ横になっていた。午後は雷などが多いので、最初の1ピッチは薄暗い時間に出発して、ゆとりを持って到着するのが当たり前だった。知らないルートでは、必ず前日に翌日のルートを偵察した。ヨーロッパの登山と類似だ。テントが多かったので、足の遅いパーティーは天場確保の為、足の速い者を先に行かせるのも常識だったのに、今では、大抵の場所では、必要とあれば夕方まで長時間行動しても天場に

困ることもなく、行動の自由度が大きく広がった。復路だったが、光から荒川まで 14 時間かけて歩いたことがあった。台風が来るとのことで、風当たりが弱い荒川まで死にものぐるいで頑張った。台風は大したことはなく、翌日の出発を遅らせただけで夜叉神まで順調に進み下山出来た。その時には珍しく、思わぬ証人がいた。光のスタッフに荒川小屋で会い、往路の聖平小屋で会った人たちを小河内岳直前で追い越し、それぞれ会話を交わしたのだ。昔なら、体力がどんなにあっても、天場の混雑を考えるとそんな行動は絶対する気にならない。ちなみに、復路の最後は仙水から夜叉神まで一気に歩くことが多いが、早くて 9 時間 20 分、ちょっとのんびりすると 11 時間かかってしまう。その程度時間をかけ展望を楽しみつつ歩くのが好きだ。

実は、全山往復を始めてから、小屋のテント受付で正確に(最終)目的地を言うことは殆ど無い。説明するのが面倒なもの一因だが、それでトラブルになったり、不快になったことを幾度も経験したからだ。農鳥小屋では、そんなことが出来る筈はない本当のことを言えときつく責められたり、山を相当やっているという評判の小屋番のところでは、気を許して聞かれたままに話をするとそれまでのにこやかな態度が一変、重ーい無視したような雰囲気は漂い始めた。熊ノ平からは、しばしばそこから白根三山ピストンしていた。ピストンだから休養日を兼ね 8 時間程度だ。99 ~ 05 年までの、自称、植村直己のエベレスト登頂パーティーの一員、長谷川恒男の遭難した時の遠征に参加予定だったという小屋番は、我々が嘘を言っているに違いないとあからさまに不快な態度を取るようになり、以後何年もの間、熊ノ平に泊まらない山行をするようになった。こんなことでもなければ、地の利のある快適な熊ノ平に必ず泊まっていたらうから、それも良いきっかけだった。

往復縦走をきちんと理解してくれたのは、早川尾根小屋、仙水小屋と光小屋だけだったかもしれない。

仙水小屋では、始めの頃、行く度、あそこはどうだった、あそこは何時だったと聞かれ、興味を持ってしてくれるんだなと思って喜んで答えていた。それを何回か繰り返した後、小屋スタッフが、実は、登山者にはとんでもないほら吹きが多いので細かく尋ねるっていう意味もあるんだよと種明かししてくれた。事実上ヒマラヤ登頂記録認定の権威であるエリザベス・ホーリーの、登頂の真贋を確かめる為の聞き取りも、引っかけもありなかなか厳しいらしいことを様々な本や雑誌で読んだことがある。日本の夏山縦走レベルでも、自己申告の世界だから思わず大風呂敷を広げてしまう登山者が多いようだ。

静岡県の職員が特権的に一般人入山禁止の林道を利用した登山をしていて遭難騒ぎを起

こしたのと同じ時、大門沢小屋の小屋番も、近くを3人の客を案内していて遭難している。普通の一般ルートだ。07年7月21日のことだが、小屋番もこのようなレベルの人が殆どだということを理解すべきだ。

最小全山縦走は、小屋番の想像レベルで分かりやすいから評価され、往復など想像も出来ないとは、時代が進んで、これほど装備も食料も良くなったのに、逆に肝心の長期休暇が取りにくくなったことの表れかもしれない。山行が縮んでしまったのと同時に、日本の小さな山にとっても異形の食事付き高額木賃宿泊まりのハイカー観光客が、日本独自の登山の楽しみをスポイルする感じだ。

ところで、05年に開設された登山記録共有サイト『ヤマレコ』には、今では多くの登山者が集い、その情報が拡散して、一部アプローチの簡単なルートかつ天候と積雪状況がいい時だけ入山者が途切れなくなった。今や厳しいルート、珍しいルートの記録も数多い。様々なレベルの、あまりの情報量と質の玉石混交さに疲れる程。雑誌が情報をそれなりに選別し、登山者の基準となっていたハングリーな時代が懐かしいくらいだ。一部地域の情報はふんだんにあり、どこに行っても目新しさを感じる事も出来ず、追体験するだけかのようになった。情報過多が感動を失わせる。例えば、冬の夜叉神峠からの鳳凰三山は、最近、ほぼ毎回誰かに会うようになっている。条件さえ選べば、その程度の山行は誰にも可能と、登山の敷居が下がったのはいい事だ。しかし、風雪時にラッセルして道を切り開くといった、本来の冬山登山の楽しみとは違う感がある。夏山の1泊2日小屋泊まり山行とテント長期縦走が違うジャンルであるのと同様だ。本書で指摘したように、3000m 峰でさえ1泊2食付き登山は学校の遠足だ。雪線以下の日本の山は、状況さえ選べば相当のルートへ入る事は出来、その地域だけに人が集中する。ハイキングの領域は広がり、登山の領域はより狭くそしてさらに秘境化した感じだ。ヤマレコには自由な記録と感想が書かれていて役立つ事も多いが、主観的思いの強いものが殆どだ。個人の自由な書き込みこそ持ち味だから、客観性や論理性を余りに求める事は間違っている。しかし、そこに穿孔があると思う。口さがない言い方をすれば、デマや噂や思い込みがもっともらしくネット空間に増殖し、それを現実と思い、実際活動する人が多く見られる。ネットは、今でもワイルドな世界の一面を持っているが、同時に、以前なら歯牙にもかかれなかった一市井の人の声に暖かく応える、優しく善意ある人の輪がいくらでもある。その心地よさに埋没して、日本あるいは世界レベルがいかなるものか興味もなく、どんどん怠惰になっていく。自分レベルでお互いを慰め合うばかりでは、せつかく一度の人生、つまらない。上には上があり、自分のレベルを認識して這い上がる、人との軋轢の中で、世間との齟齬感でギシギシしながら、何とか自分の

立場をでっち上げるのが、自分が自分として生きる事だ。匿名による罵詈雑言の世界と同時に、心地よい仲間が集う世界が同居するのがネット、どちらにせよ自分の頭でしっかり考える前に吠えるか慰め合うか、常に繋がらざるを得ない忙しさと不自由さから抜け出す事によってのみ、本当の登山の楽しみが始まる。

教えてもらうのではなく、0 から自己流でやるのも楽しいだろうが、特に夏のような営業山小屋だらけの山では、買い食いが当然という異形の登山が主流になっている事にも気づかない人が多い。どこの国に、観光地の食堂や土産物屋のようなサービスを提供する山小屋があるうか。山小屋と名乗るなら、本来の(登山者用)山小屋のサービス内容に戻すか、それとも山岳ホテルとして、一般ホテル並のサービスをするかだ。現状の日本の観光山小屋では、狭い日本の山岳を一層狭く萎縮させてしまい、日本オリジナル登山が台無しだ。無雪期の日本の山岳地帯は、岩場も少ないので宿泊施設さえあれば、何の技術も持っていないハイカーや観光客が山に押し寄せる。彼らの為の宿を山小屋と呼ぶから、誤解が生まれる。

『ヤマレコ』のような巨大情報サイトが出てくれば、素人ライターのリート案内や評論ばかりの山岳誌は、もはや太刀打ち出来ない。

国体の山岳競技は、『登攀』、『踏査』(荷を背負ったチームオリエンテーリング)そして『縦走』(山岳登山道で荷物を背負ったチームトレラン)の3種目だった。02年の高知大会では、登山には当たらないとして『踏査』が廃止になり、08年の大分大会からは『縦走』が廃止され、『クライミング』(旧、登攀)と、新たに『ボルダリング』が加わり2種目になっている。(夏山の)『縦走』が国体の山岳競技から消えたのだから、無雪期の山小屋泊まりのピークハントや縦走は、天候がよい時に限れば完全にハイキングであるのは明白だ。無雪期では、テント泊まり、小屋での買い食いなしの全天候的な縦走でやっとな登山だ。そんな事にも気づかない人たちが、山をどんどん世俗化、観光地化させ、山小屋やテントサイトで集い、ネット上で盛り上がり、狭い日本の山岳をよりゴミゴミ狭くし、同時にアクセスの悪い所は秘境化させる。過去と基本を無視したところから新たなものが生まれる事もあるうが、これまでの先人の経験に学び、理想を高く持って活動して欲しいものだ。三人寄っても、千人寄っても簡単には新たな知見と行動は生まれえない。過去を受け止め克服した勇氣ある個人の小さな一歩 "one small step" が、多くの人たちによる 大いなる飛躍 "one giant leap" をもたらし定着していくのが歴史だ。金魚の糞だけではつまらない。自分が自分として生きた証しが欲しいのではなからうか。

南アルプス南部の光岳登山口にある、遠山郷の和田駅にあった「下伊那山岳遭難防止対策

協会」名による「一、食料は必ず自分で持ちましょう…」という古びた看板は、07年6月、改築された時に撤去された。ここまで山にも観光地化の波が押し寄せ、山岳ルートは時期的にも一極集中化している。

近年は、表面的休暇日数は増えている筈なのに、融通が利かなくなったためだろうか、世の中が世知辛くなったためか、長期縦走者はめっきり少なくなっている。欧米先進国と比べ、ますます実質的休暇日数が減っているみたいだ。本書でも書いたが、ノンデポノンサポートの実働10日以上の特長山行になると、感じ方が、世の中の見え方が相当変わる気がする。軽量グッズ収集、倭式ウルトラライトハイキングと異なり、必要が発明の母的、本質的軽量化もせざるを得ないし、短期山行、ハイキングでさえ、もっと気楽に楽しく安全に自由に楽しめる。それ以下の長さの山行では、町気分が殆ど抜けない。携帯で繋がっていたらなおさらだ。スポーツ的に楽しむか、町のツアーか旅行のように楽しむ以外無く、残念ながら、山岳地帯で時間を過ごす本来の楽しみを味わっているとはいえないと思う。

"Finally, I hope this book will inspire you to spend more time in the wilds; doing so is bound to enrich your life, as it has ours."(Ray Jardain, "Trail Life", AdventureLore Press, 09, p.394)、下手な訳を付けると、『最後に、この本があなたを自然の中でより時間を過ごしたいという気持ちにさせる事を希望する、そうする事によって、あなたの生活、人生は、我々がそうだったように、より豊かになると確信している』、全く同感だ。

登山は、あまりに気象状況や積雪等に影響される為、すっかりスポーツとして認知される事はないだろう。そのような条件を排除したフリークライミングはスポーツだ。速さ、強さ、難しさを競うのがスポーツだが、採点競技でさえ、その評価に異論が噴出する。まして、登山では純粋に速さを競う事はないから、難易度が評価の基準になる。しかし、様々ある難易度分野一つ一つの難度を点数化し、それら全てを如何にまとめて一つの序列にするかは難問だ。

実は、11年には本書の誤字脱字を修正し、増補も加えようとしていたが、3.11同時多発原発事故が起こり頓挫してしまった。その後の山行は、いつも心の奥に澁が絡みつき、下山時には、以前のような充実感も満足感も安堵感も殆ど感じなくなっている。不思議な事に、冬は特に、無事下山しても全く無味乾燥、無色だ。その日の後から感覚が変わってしまった。

世の中は右肩上がりに進歩しているのではなさそうだ。特に、長期縦走という文明の保護か

ら半歩離れ自立した生活を楽しむ遊びでは、古いもの、つまり尖った機能、性能は多少劣っても、より単純で汎用性の高いものの方が、はるかに信頼性がある。次々開発される新製品の多くは、バックアップ体制の完備した上での高機能、一点突破型の高性能で、想定外の事にはかきし弱い。そんな事は十分承知しながら、今でもメーカーの創造的キャッチコピーにやられ、雑誌のバブ記事に物欲を喚起され、痛い思いをし続けている。

想定外の事が起こるのが戦争だ。戦争は想定外の事に如何に対処するかが一番の問題なのと同様、長期縦走でも、思いもよらない事が起こっても対応出来る、使い道が広く、シンプルでタフで簡単に修理出来る装備、どんな状態でも食べられる食糧を見つける事が必要だ。そんな新製品は皆無に近いから、古いものを改造しつつ使い続けたり、ネットオークションで探したり、自作せざるを得ない。少しは文明の保護から外れる長期縦走だからこそ、本質的に原始的でタフな装備が必要なのだ。現在の高性能な製品は、分業の細分化が文明を発展させたように、細かな専用用品化によってもたらされ、デリケートさは否めない。原初の製品には、万能型の物が多いのは当然だろう。

最近知った事だが、『はじめに』で記した山野井泰史は、96年1月4日～6日にかけて、黒戸入山、仙丈を越え熊ノ平泊まり、塩見を超え三伏下山という山行(丸山直樹、「自分という極限 山野井泰史 単独挑戦」、『山と渓谷』、97年1月号、184頁)をしている。総行動時間は33時間50分だから、目的とした全山80時間は十分可能だろう。我々のトレースを辿ったのだと知ってワクワクした。

以下、詳述することにする。本質的、根本的な変化はないが、神は細部に宿るので細かな事も蔑ろにすることは出来ない。

中高年の百名山から山ガールブームへ

若者から見放されていたアウトドア業界の救世主が、09年当たりからの山ガールブームかもしれない。アウトドア用品市場は、それまでの停滞傾向から、以後増加傾向が続いている。どこが作り出したか久しぶりの大ヒットで、山は中高年、超高年のものといった見方が変わり始めた。これまで女性は、恋愛とファッションと料理しか興味がないと言う通説があった。趣味は一般に男性のものであり、それに伴う消費も男性中心だったが、趣味分野名に「女子」「ガール」と言

った単語を接尾語的につけ加える事により、物欲がほぼ満たされた人口減社会に残された大きな市場、女性層を取り込み始めた。城女子、カメラ女子、森ガール、釣りガール等々、男性だけだった頃との違いは、ファッションが関心の大きなウェイトを占めることだろう。山ガールが男性を引き連れてくるとは、某山小屋主人の談だ。理解出来る。女一人、思わぬ大胆なルートを来る山ガールもいるという。そのチャレンジ精神は賞賛に値するが、まともで体系的、正確な情報が得にくい現状は憂慮すべき事だ。事故が起これば、無知は力とばかりは言ってられない。

さて、山ガールファッションとは、アンデス原住民女性のカラフルで重厚な重ね着ルックを、パステルカラーの薄い合繊生地でコスプレルック風にしたものだ。アンデス原住民の女性が存在感たっぷりなら、山ガールは、ほんのり石けんの香りがして小綺麗。生命感、存在感は薄く、透明感、清潔感を感じさせるプラスチックのような感触である。登山用衣類も、長く続いたくぐもった色使いが明るく変わってきたのはいいが、自然の中、特に雪の中ではもっとハッキリした色使いの方が良さそうだ。機能性を打破したところにあるのがおしゃれ衣類だ。山ガールファッションの重ね着ルックは、アンデス原住民女性のそれとは異なり、日本のセレクトショップ独特のファッションだろうか。ファッション誌の中の着こなしは、まるでござっぱりしたホームレスルックの集大成だ。しかし、厳しい自然環境の中で使う、耐えるのが目的である筈の衣類がそれでは問題だろう。日本は、登山の領域とハイキングやピクニックの領域がハッキリしないので、山ガールをピクニックガールと言い換えた方が実体をきちんと表している。ピクニックの領域なら、機能性は必要ないからだ。しかし、「パタゴニア」ブランドを「高尾山」ブランドと変えたら、誰も食指が動かなくなるだろう。言葉に内在するイメージがブランドには大切だ。

ツバが大きくヨレヨレしたハットも、マストアイテムだ。風が吹いたら視界が無くなってしまふ、岩場では上が見えない。

冬山でも、目出帽を被る人はめっきり少なくなり、アンデスの民族衣装、耳当て付き毛糸帽、チューヨ "chullo" が定番になった。頭の頂上と耳当てから伸びるとモの先に付いたポンポン "pom pon" は可愛くても、顔面の耐風、防寒性が不足しているので、低山での使用に留めるのが無難だ。

オーバーミトンが使われなくなったのは、山ガールとは関係ないだろうが、内綿入り5本指手袋の保温力は疑問符が付く。今一度、オーバーミトンの保温性を見直すべきだと思う。

流行のものがいいとは限らない、つまらない凍傷にならないようにしたい。

山シャツはほぼ消滅、合繊半袖 T シャツと長袖 T シャツの重ね着が標準になった。しかしニット製品は、一般に藪で引っかかり解れ、岩では擦れやすく、日焼けに弱い襟首の防御も不

足し、夏には暑すぎ、山に向かない。下半身の加圧タイツも当たり前になった。タイツの大きな欠点の一つは、破れても修理出来ない事だ。大きく破れたタイツを履いている人を見る事がある。CW-X は無料で直してくれても、大抵の山域はたぶん宅急便の配達エリア内でないから、山行中、修理を依頼し受け取るのは難しい。11年、好天の夏の北岳山頂で見た、山ガールと山ボーイペアのファッションはファッション誌のままで驚いた。2人ともゴアの黒いパンツを履き、冬用グローブ、女性はさらにその上にスカートを履いていたのだ。綺麗に見えた。

ともかく、実用性を打破したファッションを受け入れ、格好良く感じられるのは、高度な文化と感性のなせる技に違いない。

若々しい山ガールと比べれば、中高年の百名山は御利益を求める八十八カ所巡りかのような気がする。山小屋での予定調和の出会いや、ほのぼのしたエピソードを求めるのが山歩きかのようにだった。街のツアーと殆ど変わらない。山ガールには、綺麗なファッションをまとって歩く事、ハイキングの楽しさがある。しかし、いい年をした女性の事を、「ガール」だの「女子」と呼ぶ違和感は、今でも消えない。

ところで、看護婦、保健婦、助産婦といった女性の多い職業も、02年3月から、それぞれ看護師、保健師、助産師になっている。「婦」が付くと、それが女性だけの職業、かつ差別的に感じられるからだ。看護婦時代、男性のそれは看護士と呼ばれており、94年3月には男性の保健士が誕生しているが、以後、全て「師」の付く職名に統一された。日本では、助産師が今でも女性だけの職業なのは、性差別の根深さを示すものかもしれない。また、学校教育法の改正で、00年4月から、寮母は寄宿舎指導員になっている。このように、性的分業を強要するような、差別性の高い名称を変えるのが流れになっている。今だ、主婦は、男性には音が同じ**主夫と表記すればいいから**との理由で使われ続けるが、「主師」としなければ辻褄が合わない。「主婦」という言葉は、差別性を内在させながら余りに定着しているので、その差別性にも気づかず、変更しようとする機運さえ生まれぬ。

逆に、「ガール」、「女子」を付けた言葉は、差別的な発明だと思う。性的差別感を逆手にとった、女性に売らんが為の商用キャッチコピーだ。今は余り使われなくなったが、女医、女教師に対応する男医、男教師は存在しない。敬称の「女史」も、性別なく「氏」が使用されるようになり消滅しようとしている。妙に生々しい「処女峰」という言葉も、「未踏峰」という中立の言葉に置き換えられるようになっている。形態的には、未踏の山は「童貞峰」であるのに、平気でそのように呼んでいた社会は薄気味悪い。いい加減、不要に性を強調する名称は止め、出来るだけ両性にとって中立なものにすべきだろう。名が体を表すように、名が実体を作り出し、意識を作るから、

出来る限り性的に中立な表現が好ましい。

中高年の山歩きに飽き飽きしてきた頃、百名山ブームを仕掛けた NHK は 10 年から 13 年度まで『世界の名峰 グレートサミッツ』シリーズを放映する。ガイド付きとはいえ、NHK スタッフが世界の名峰、エベレストまで登頂し、それら山行をドキュメンタリーにしたものだ。そこまで本格的登山をきちんと映像にしたものは類がなく、さすが NHK の財力と、登山ガイド、システムの進歩は驚く限りだ。長期縦走でも、まともな情報があればずっと楽しく安全に楽しめるのに、こんなに登山者が少なくなったのは休暇の少なさだけではないと思う。ベースキャンプもデポもなく、長期間山に入っただけの縦走は生活そのものだから、文明に適應した体とその野蛮を甘受出来ないのだろうか。文明という薄皮を被った生活ばかりしている事は、生きている苦しさや喜びといった実感から遠ざかる。長期縦走は、多少でも文明の保護を外れ自然の中で長く生活するからこそ、本物の自然、生活と人生を思い起こさせてくれる気がする。多くの人が挑戦して、感じて欲しいものだ。より世界が実感を持って捉えられるとなると、確信している。

山スカート

登山衣類に入り込んだ、これまでにない商品は山スカートだろう。一般に女性の衣類は、男性用と比べ機能が低く、性的アピールが強調される傾向がある。女性の胸と腰は強調されるが、逆に男性は、ナポレオン時代のように股間が強調されようとはなく隠されるくらいだ。

何故、クラシック音楽の女性演奏者だけ、クラブのママのように妖艶な衣裳を身につけているのだろうか。歩きにくいスカートが正装なのだろうか。どうしてバレリーナやテニスの女性選手は、未開人で成熟した女性を示すという、局部をチラチラ隠して刺激する腰ミノのような短いスカートを履いているのか。11 年 4 月 21 日、国際バドミントン連盟が、観客へのアピールのため主要国際大会で 6 月から女子選手にスカートの着用を義務つけた。さすがに反発が強く、5 月 28 日には撤回したものの、男性の性欲剥き出し意識と、スカートがどのようなものかをハッキリと表していた。

航空機の客室乗務員が第一義的に保安要員というなら、女性客室乗務員がなぜスカートを着用しているのだろう。保安要員なら体の大きな男性のほうが向いているはずなのに、どうして女性ばかり採用するのかよく考えてみるといい。看護師でさえ今では殆どパンツ着用であり、社会的地位が高くなった。

性による不必要な衣類の相違は、あきらかに現代社会が今だ持っている無意識で根深い女性差別からのものだ。女性は性的存在である前に、男性同様まず人間である。日本では、どうして女性の全裸像だけが巷にあふれているのだろうか。男性の女性に対するあらゆる性意識のみ公認され、無自覚に両性とも容認している社会では、性的平等が実現するのはまだまだ先だ。全ての人にとっての基本的な人権の実現が難しいのは、女性だけ動きにくく、性を強調した衣類を着て当然、いや美しいとさえ思ってしまう感性を考えればよく分かる。女性のファッションは、男性の性的目線からのみ評価される。唯一、男性目線でない流行は、98年の夏から01年まで続いた山姥ギャルだけかもしれない。オランウータンかのように顔を焦げ茶色に塗り、目と口の周りを白く隈取り、髪は黄色や白のメッシュでは、普通の男性は引いてしまう。

10年くらいから、山スカートを見るようになった。鎖場の登りでは「嫌らしい目つきで見ないで」と言われそう。雨具を着る時はどうするのだろう。山スカートは、羽毛のものさえ作られている。二昔も前、タイツの上にショートパンツを履くのが流行だった。股間が気になるので重ね着にしていたと思う。スカートは、平地ならいざ知らず、山では下からの視線に無防備過ぎる。山スカート、妙にそそれ可愛く見える、我が根深き差別観。

ムスリム女性が身につけるスカーフ、ビジャブを見て、非イスラム社会の人は、イスラム社会の後進性、女性差別の現れと感じるが、ビジャブよりスカートの方がより女性(の活動)を束縛するものではないだろうか。スカートは余りに社会に根付いていて、その差別性さえ意識されない。

登山靴、トレールランニングの流行

日本にはそのフィールドもなく、軽量装備完全持参、コンプリート・ウルトラライトハイカーは倭風道具沼に落ち、09年10月31日にNHKがウルトラトレイル・ツール・ド・モンブラン"UTMB"のドキュメンタリー番組を放映してから、ブームは一気にトレールランニングに移行した感じだ。そのちょっと前の8月2日には、同じくNHK「小さな旅」で放映された『甲斐駒ヶ岳』で、黒戸を駆け上るトレラン選手が準主役(仕込みがバレバレはこの番組の特徴)として登場していた。以後、黒戸尾根ではトレラン風の人をしばしば見かけるようになった。

10年2月にはNHK出版から『BONE TO RUN 一走るために生まれた』も発売された。メキシコのタラウマラ族(ラムマリ)がサンダルを履いただけで、超長距離を凄い速度で走るというレースルポを軸とした内容だ。靴の衝撃吸収機能は格段に良くなったのに足の障害は減ってないという。裸足の方が靴を履いて走るより足への負担が少なく、シューズメーカーはもっと自然

に走る事が出来る靴を開発しているそうだ。彼らのドキュメンタリー番組は 11 年 3 月 27 日に NHK の BS で放映され、実際の走りっぷりを見る事が出来た。粗末なサンダルを履いているだけだから、立派なランニングシューズを履いた踵着地が出来る筈はなく、上下動が極めて少なく早歩きのようにさえ見える。踵から着地出来ればストライドが伸び、より速く走る事が可能との考えで、普通のランニングシューズはその衝撃を吸収するように進化した。靴が良くなると共に、走りは無意識で乱暴になり、逆にトラブルが多くなる。そこで、ヒトが本来持っている優しい足捌きを取り戻すため、最小限の保護機能だけにしたのが素足感覚の靴だ。

実際に見たり、聞いたりして知っていることは、自分が経験することと同様に大切なことだ。12 年の夏の山行で靴が破損した。その時、彼らの映像を見ていなかったら途中下山したかもしれない。往路の聖岳当たりから、踵のソールの一部が欠落しかけ、復路の三伏では指の付け根付近でとうとうアッパーが一直線に大きく裂け、注意して歩かないと足先が飛び出してしまうようになった。しかし、よく考えれば、壊れたとはいえサンダルよりずっと脱げにくく歩きやすそうだ。これまでソール剥がれ以外、致命的と思えるような靴のトラブルはなかったので愕然としたが、サンダルで走れるのだから注意して歩けばいいと思い直し、いつものように仙丈、早川尾根を越えて夜叉神登山口に下山した。

『靴』の項で、軽く柔らかい靴を履いた方がトラブルが少ないと指摘した。マラソンシューズは、母趾球部と踵部の厚みの差、高低差が少なく、ミッドソールも非常に薄いので素足に近く、ごまかしはきかないが一番自然な感じた。本来人間は裸足で歩いて進化したのだから、下手に靴に頼るより、優しく歩く方が足への負担が少なくて当然だろう。重かったトレールランニングシューズは、レーシングシューズ並みの軽さのものまで発売されるようになり、やっと母趾球部と踵部の高低差の重要性も広く認知されるようになった。

12 年 2 月に発売されたトレールランニングシューズ、ノースフェイス・ハヤサは、28.5cm で 280g/a、高低差 10mm でレーシングシューズに近い感じだった。試し履きした限りでは、殆どランニングシューズの履き心地で、これまでのトレランシューズと一線を画すものだった。エアフットシューズのようなホールド感のない素足感覚や不安定さはなく、余程買おうかと思った程だ。足形が合わなかったので止めたが、多くのメーカーがこの種の靴を出してくれれば、自分に合った足形のものを手に入る事が出来るだろう。心配なのは、アッパー部のメッシュの補強に熱可塑性ポリウレタン "TPU" (Thermo Plastic Polyurethane) テープが溶着されていることだ。衣類同様、溶着部分は固く、メッシュ部分との固さのアンバランスの為、メッシュ部に応力が集

中して破れるのではないかという点だ。これまで使った TPU テープでアッパー部が補強された靴では、**数度**痛い目にあったことがあるので不安だった。メッシュ部分が破れたり、アッパー補強部材が固くていくら履き込んでも足に合わなかった。紐通し穴の数が少ない点も問題だ。紐通し穴が少ない靴は、足に合わず甲に負担がかかることが多い。アウトソールは一枚ではなく、普通のランニングシューズよりちょっと凸凹の大きなパッチワーク状に貼られ、土踏まず部に補強のプラスチックが取り付けられていた。一枚で出来たアウトソールの方が剥がれにくく、足裏全体を使えるので好ましいと思うが、許容範囲の感じだ。しかし、この程度のもならランニングシューズにもあるのではないか。思わず、同等以上の履き心地と構造だったアディダスの adizero Mana 6 を買った。セールだったので、**定価**の半額以下だった。ソールパターンはハヤサと変わらず、重量も少し軽い 270g/a、28.5cm。日本で売られているアシックスは、ワイドサイズばかりだったが、07 年からスリムサイズが発売され始めたものの種類は少ない。アディダスは基本的に世界共通のサイズ展開で、それに加え日本ではワイドサイズを販売していて、踵の**柔らかい**フィット感とつま先部のゆったり感が特徴だ。12 年秋に出たというサロモン・S-LAB SENSE は、ほぼ一枚状浅い凸凹アウトソールでさらに軽いようだ。アッパー部に溶着された補強ポリウレタンテープと紐通し穴数の少なさは問題だが、ますますランニングシューズ、それもマラソンシューズに近くなった。ぐるりと一周回って元に戻ってきた感じだ。これら最近の軽量トレランシューズを見ていると、長期縦走には自信を持って山向きのランニングシューズを選べば十分といえる。

後継モデル Mana 7 は、靴一般のお約束ですっかり全てが変わり全く山向きではなくな**った**と思った。ソールパターンが adizero Japan と同じで溝が深くなったものだからだ。ソールがよりパッチワーク的になったので剥がれやすくなったと判断したが、何足もの Japan を使い、どれも全山往復くらいなら十二分の耐久性を持っている。ソール前半部の、アスファルトでは耐久性がある硬い貼り付けチップが平坦な岩、特に濡れた時に滑りやすかった欠点は、やや柔らかなものに改善され問題なくなっていた。ミッドソールは薄くなり遙かに接地感がよくなり、Japan と同等の 230g/a (Japan はモデルにより大きく異なり、最軽量 207g/a、最大 235g/a だった)と、軽さを実感出来る重さになった。アッパー部つま先の先端部は、ぐるりと補強され改めて補強しなくても山で安心して使える。このように、同一モデル名のものでさえモデルチェンジの度、その性格が大きく変化するから靴選びは難しい。何時までも基本的に全く変わらず、安心して購入出来るのは知りうる限り唯一アシックスのソーティ Japan TMM445 系列のものだけだ。山用としては、体重や荷物の重い人にとってやや耐久性が不足することだ。そして、それを山用に改良すれば、理想の定番無雪期用縦走靴が出来上がる気がする。アッパーはそのまま OK、不整地や荷重に耐えられるようにするため、ミッドソールを同じ厚さのよりしっかりし

たフォームに、アウトソールを発泡性フォームの軽量なものから硬すぎないゴムで作られた、初期ナイキ並の薄いワッフルソール(溝の極浅いラグソール)に変更するだけでよい。

これまでトレールランニングの世界は、ブルー・オーシャン "blue ocean" つまり未開拓で競争相手の少ない穏やかな領域だったかもしれない。

13年10月13日に行われた、第21回日本山岳耐久レース、通称ハセツネで、マラソンシューズ(アシックス・ターサー)を履いた一流の現役マラソン選手が新記録で優勝した。殆どロードの練習しかしないので、トレランシューズも持っていないとのことで話題になった。

本書でも詳述したが、堅いラグソールの靴が山に向いている、あるいは滑りにくいというのは間違いだ。ラグソールが合っている場所は思いの外少ないと思う。トレランシューズも相当ラグソールっぽい、無雪期長期縦走でも軽いランニングシューズがベターである、と証明されたような気がして嬉しかった。

近年までのトレールランニングの世界は、黎明期のフリークライミングには体操選手、トライアスロンは水泳選手というように、レベルの高い類似周辺スポーツから転向した人が多かったのと同様だったのかもしれない。以前のトレールランニングレースの参加者は、ランニングではなく登山好きの持久力に優れた人が多く、考えられないような年齢の人でもよい成績を出すことが珍しくなかった。国体の山岳競技『縦走』では、陸上選手を集めて編成していたことから分かるように、それは登山ではなく荷物を背負った長距離走みたいなものとして08年から廃止されている。ハセツネも登山の領域ではなく、長距離走の一ジャンルとして分類されるようになるかもしれない。無雪期の山道を歩くのに登山技術は必要ないから、そこを走って競争することは登山ではなく、道が悪く、長距離かつ高低差の大きなクロスカントリー競技と考えたほうがしっくりする。本格的長距離走の分野と認知されるようになれば、一流選手が大挙して参戦しレッド・オーシャン "red ocean" 血で血を洗う厳しい競争的分野になるだろう。日本の狭くて急峻で崩れやすい山道を走ることは、人の多い歩道を自転車で走るような場違い感と危うさがあり、山小屋というエイドステーションがあっても天候急変が珍しくない日本の山岳地帯では、普通のランニングにはない危険性がある。街のツアー客のように弛緩して歩いている小屋泊まり登山者より、トレールランナーはずっと気持ちいい存在でも、どちらも本来の登山者ではない。コンビニを兼ねたような食事付き山小屋があるから、そのような人たちまで山に押し寄せ、日本の登山が訳の分からない何でもありの状態になり、彼らの押し寄せないところや時期は閑散としてしまったと思う。山小屋の存在、どこまで文明化、都市化させても未来の人に対して許されるかどうかきちんと考えるべきだろう。

日本の登山用品領域は、グレー・オーシャン "gray ocean" 商業主義と信仰にまみれ真実

が伝えられない分野だから、こんな現象が起こっていても登山靴の世界には生かされないかもしれない。

80年代初め、テントサイト、行き帰り用にジョギングシューズを持参したり、重登山靴の代わりに山中でさえジョギングシューズを利用することが流行した。山では登山靴を履くべきとの抵抗勢力の力は今以上に強力でバッシングが山岳雑誌の誌面を賑わしたが、その軽さへの指向をメーカーは受け止め、頑丈な山用ジョギングシューズのような、例えばアシックスのガントレやナイキの "Lava Dome" 等が発売され、以後、軽い山歩き用としてもキャラバンシューズのような革登山靴そのままのデザインをナイロン生地で作っただけの靴から、ずっと軽くて履き心地のいいものになった。それらは凸凹のラグソールを持っており山用の感じは出ているが、多くの場所でのグリップが本当にいいとはいえない。しかし、遅々としたペースだが、確実に軽さと履きやすさは上がっている。

昔の貧しい時代は、新人が登山用品店に行くと、すぐ岩や雪をするようになるからと、この一足で全て OK な上位互換的、過剰品質の重登山靴を買われ、それで日帰りハイキングまでしていた。今で言えば、ヒマラヤ用スパッツ一式登山靴一足で、全ての山行をしていたみたいなものだろう。

ご承知のように、今でも無雪期夏山でも旧来の登山靴に対する信仰は根深い。もし夏山が普通のランニングシューズでいいなら、登山用品メーカー、小売店の商売はあがったりになってしまう。現在は、昔のように一つの重登山靴で岩から冬山からハイキングまでしていた頃とは違う。それぞれに相応しい靴は何か、よく考えれば分かることだ。

寒い雨の中でランニングシューズを使っていると、足が冷え切ることがある。ソックスの上にプラスチック袋を履けばましになるが、滑りやすくすぐ破れてしまう。以前は、滑りにくい防水生地、現在は防水透湿性生地を使ったソックスを自作(33g/pr/28.5cm)している。サイズの、そしてフィット感からネオプレン製のソックスを使う気にはなれない。

冬には、靴を自分の汗で濡らさない為と保温力アップの為、ソックスの上に履く**ネオプレンソックス**が販売されている。それを利用するには専用サイズの靴が必要になり、足のフィット感も相当悪くなりそうだ。雪があるところならプラブーツでも履きやすさは問題ないから、そんな無理をするならプラブーツにしたほうがずっと暖かいのではないのだろうか。湿雪で靴が濡れる心配もない。

08年9月28日、世界初、マラソンで2時間4分を切ったハイレ・ゲブレセラシエ選手は、普通の市販シューズを履いていたという。アディダスの adizero Japan だ。28.5cm で 235g/a、高低差はレーシングシューズ並みだった(実測の高低差と各社カタログ値が違うのは、測定法の相違だろう。大体の傾向と考えて欲しい)。つまり、踵からガツンガツンと着地する走り方でないなら、多少高低差があっても大した違いはない、まして不整地なら問題なさそうだ。以後、山で数足使った。それを履いても、平地でも山でもハイレ選手のように速く走れるどころか、以前の靴の頃と全く変化は感じられない。当たり前だろう。短距離のスパイクならいざ知らず、このような長距離用の靴では精神面を除き、全くパフォーマンスは上がらない。いい加減、道具地獄から這い出て、まともで効果的な能力向上を考えたいものだ。あまりにも道具にこだわる前にやる事はいくらでもあると、大反省。

より自然さを求める靴への探求は、70年のアースシューズから始まり、96年誕生したMBT(マサイ・ベアフット・テクノロジー)、04年ナイキ・フリーが発売、05年にはピブラムがファイブフィンガーズを、11年にはニュー・バランス"NB"のミニマスが発売されている。

アースシューズは踵部の方を低くして、ヒト本来の正しい姿勢に戻そうとする矯正靴、カウンターカルチャー時代の申し子、歩くのは不自然で不安定だ。MBTのソールは前から後にかけて円弧状の膨らみを持ち、自然な不安定さにより路面の多様性を疑似体験させ、姿勢や運動能力を本来の姿に正そうというものだ。アースシューズやMBTは、靴底の不安定さにより体を刺激し、素足で立った感覚を取り戻し、靴を履いて不自然になった体を矯正しようとするものだという。自然さを取り戻すのに、不自然な靴を履く不自然さは殆ど信仰であるが、詐欺師の言説のように一理あるので、一部の人に受け入れられる。

はっきりシェイプアップ効果をうたったリーボックのイーゼートーン、スケッチャーズのシェイプアップスも裸足感覚、ソールは非常に柔らかく、その上不安定な形にしたものだ。しかし、アメリカ連邦取引委員会"FTC"が、シェイプアップ効果があるという宣伝・広告は虚偽広告に当たるとして、リーボック社は11年9月28日、2500万ドルの罰金と商品代金返金、スケッチャーズ社は12年5月16日、罰金4000万ドルで和解した。言うような効果がなかったのだ。

ここからがベアフットランニングシューズだ。ナイキ・フリーは、ソールが極めて柔らかく、高低差も小さく、素足に近い自然な走りを促すものという。ピブラム・ファイブフィンガーズはほぼ高低差もソールのクッションもなく、地下足袋のように五本指にして自然さを追求している。靴紐通し穴さえない。NBのミニマスも高低差が0が非常に小さく、トレール用でさえアウターソール

のパターンは普通のランニングシューズ並みだ。

これらは、先述した軽量トレランシューズや普通のランニングシューズと履き心地に大きな相違がある。自由さ、柔らかさを追求する余り足のホールド感が非常に低いのだ。その緩さは、キャンプサイトでリラックスするのにぴったりの感じだ。素足感覚を追求して、自然な感覚を取り戻すのは練習の時だけに止めるべきだろう。本番では足をしっかりホールドして運動能力を上げたい。ランニングシューズは、しっかり足を締めつけ安定させ、靴生活している文明人の運動能力を高めてくれると『靴』で書いた。しっかりしたホールド感のあるレーシングシューズ以上が山向きだと思う。ウマでさえ、蹄鉄を打って蹄を保護しないと長時間歩けないし、走れない。靴に頼って、足を乱暴に使わないのは当然だ。素足感覚の靴は、基本的に本番用ではなく乱暴な足運びの矯正練習用だと思う。

水着で記録がどんどん更新されたのは08年の北京オリンピックの事だった。そこで、Speedo社のレーザーレーサーから始まった高速水着も、10年からは着用禁止になってしまった。余りに水着の効果が大きく、スポーツとしての公平性が問題になったからだ。現在では水着の素材は織物や編み物に限定されるようになったが、高速水着はポリウレタンやラバー素材で体を強く締めつけ水中での体の抵抗を少なくしたものだ。一人では着る事も出来ないくらいきついものらしい。クライミングシューズのフラットソールもそのような劇的效果がある。これも極めてきつい。どちらも健康には悪そうだ。足にフィンをつけるフィンスイミングは素足の水泳よりはるかに速く、別のスポーツになっているように、履く靴によりスポーツを分類すべきなのかもしれない。98年の長野オリンピックでは、踵が固定されていないスラップ・スケートを採用した選手が新記録を量産して話題になった。フリークライミングでは、手の甲にラバーを装着してフリクションを高めるジャミンググローブの使用の是非が話題になっているようだ。そのうち、チョーク代わりの粘性物質でも開発され、フラットソールの導入当時のような革新になるかもしれない。スポーツとして、どこまで新しい道具、装備は許容されるのだろうか。

しかし、加圧衣類やランニングシューズはどうだろう。分かるか分からないかくらいの違いがあるだけで、劇的な効果は全く無い。そんなに効果があるなら、マラソン選手が何故加圧衣類を使わないのだろうか。運動能力を高めたり障害を防ぐ効果がハッキリしないのは、踵着地用に進化したランニングシューズへの反省として、素足感覚の靴が開発された事例を他山の石とすべきだ。加圧衣類の締めすぎへの警鐘は、11年4月8日、国民生活センターから『加圧を利用したスパッツの使い方に注意！』（http://www.kokusen.go.jp/pdf/n-20110408_1.pdf#search=%27%E5%9B%BD%E6%B0%91%E7%94%9F%E6%B4%BB%E3%82%BB%E3%83

B3%E3%82%BF%E3%83%BC+%E3%80%8E%E5%8A%A0%E5%9C%A7%E3%82%92%E5%88%A9%E7%94%A8%E3%81%97%E3%81%9F%E3%82%B9%E3%83%91%E3%83%83%E3%83%84%E3%81%AE%E4%BD%BF%E3%81%84%E6%96%B9%E3%81%AB%E6%B3%A8%E6%84%8F%EF%BC%81%E3%80%8F%27)として出されている。ブーツで捻挫は防げないのと同様、障害を防ぐならきちんとテーピングすべきだろう。

トレールランニングは、道具地獄倭式ウルトラライトハイキングと異なり本物だが、山小屋頼りだ。整備されたルートと、エイドステーションとしての山小屋なくして成り立たないスポーツだ。

改めて 86 年 6 月発売された『ランニング登山』(下嶋溪著、山と溪谷社)の先進性を思い出した。靴はランニングシューズを使い、軽いものもいいが、ソールに穴があるようなものは破損するので山には向かず、『私の場合、岩用のシューズ以外は一応試用してみたが、急登以外は全部走ることを原則としているので、現在では 3000m 級の山でも、岩稜でもガレ場でも、夏の雪渓上、冬の雪の中でも、すべて使い古しの軽いジョギングシューズ』(87 頁)を使用している。靴には『軽量で柔軟性』が大切で、『精神論からは、ソールの厚く固い靴で着地の衝撃から足を守ろうとする考えは失格で、大自然に少しでも接近するために出来れば素足で走りた』(85 頁)としている。素足感覚シューズ、軽いトレランシューズへの指向は、既に二昔以上前のコアなランニング登山者が持っていたと分かる。山岳を走るのでさえそのような靴がいいという。それは、たとえ荷物を背負っているとはいえ、長期縦走にも十分な性能を持っている証明だろう。荷物を背負っていても、一歩一歩毎、足にかかる衝撃は、走りに比べたらはるかに低い筈だ。なお、その当時のランニングシューズは、今ほどパッチワークのアウトソールでも、穴や溝が付けられてもおらず、アッパー部のメッシュも極少なくて蒸れやすいものだったが、ソールは一枚板状だからその点では剥がれにくくて山に向いていた。メッシュは、せいぜい指の付け根上部の極一部に使われていただけだ。今では、普通のランニングシューズでさえ、アッパー部は全面網のようなラッセル地にニットが裏打ちされ、テープで補強されているだけだ。昔は特殊で高価な素材が一般化した。当時のランニングシューズの雰囲気が一番残しているのは、後述する TMM445 の系譜のマラソンシューズだろう。その頃のランニングシューズを、唯軽量化しただけの構造だ。

現在のトレランシューズは、レーシングシューズに近くなったが、紐通し穴の少なさや、足入れ部のパッドの厚みに違和感を持つものが多い。紐通し穴が少ないと、ベロにウレタンを多く入れる必要がある上、シビアなフィット感が得られにくい。固い靴ではないから足入れ部のパッドは、最小限の方がフィットが得られる。そのようにウレタンを多用すると、一見フィット感が得られ

やすくても、乾きにくく、柔らかでしっかりしたフィット感は得にくい。

所で、ランニングシューズを購入する場合に注意点がある。足先周りまでメッシュのものは破れやすいので、予め液性弾性接着剤(シリコン系やウレタン系)で補強しておくといい。本書 61 頁のイラストのように足指周りをぐるりと接着剤を薄く塗っておけば、トラブルはなくなる。踵部の補強は不要だ。足入れ部は、現在では TMM445 系列のものだけ、しなやかで滑りやすい表革風人工皮革で作られている他は、全てやや荒目のニット地で出来ており滑りやすいのはどうしてなのだろう。ランニング登山の頃は、表革風人工皮革のものがいくらでもあった。残念ながら、それは選択出来ない。また、ミッドソールがアウトソールの接地面にかけて広がっているものも問題だ。岩の間に填ると、靴を脱がない限り絶対抜け出せないのだ。多少フレア状ならまだしも、あまりに開いているものは購入しない方が無難だ。しかし、万が一岩に落ち込んだら、そのまま抜こうとせず靴紐をゆるめ靴を脱ぎ、岩に挟まった靴を取り出せば問題ない。

ちなみに、マラソンシューズも一層軽くなっている。アシックスのマラソン・ソーティ Japan は、TMM371 まではミッドソールがしっかりしたもので、N でも十分使用可能だったが、05 年発売の TMM390 は、ミッドソールがより柔らかくなり、それをカバーするため底面がフレア状に開き一回り大きくなり、全体では 1 割程度軽くなったものの不整地には弱すぎるようになった。Y の場合、TMM371 は往復 2 回使えそうだったが、TMM390 以降は 1 回でほぼ消耗する。アッパーは問題ないが、ソールがへたるのだ。軽量化は、よほど素材が劇的に変わらない限り、耐久性に引き替えて得られるものようだ。10 年発売の TMM421 はソーティ Japan ライトと名称変更になったが、前のモデルと同じだった。12 年発売された TMM445 は、ソーティ Japan となった。靴紐通し穴がアンシンメトリーになったのは軽量化のためだろうが、慣れれば問題ない感じだ。ミッドソールとアウトソールが TMM371 並に重くしっかりしたのは、前のモデルの軽量化が過ぎたとの判断だったのだろう。それでも TMM371 よりやや軽量だ。

靴は毎年モデルチェンジが行われ、同じモデルでもすっかり変わってしまうので、自分の足に合っている事は大前提として、必要な機能を満たしているものを毎回探す必要がある。しっかり、物事の本質を抽象化して捉え、流行やバブ記事に惑わされないようにしたい。最後に、『ランニング登山』の著者は 99 年 8 月 15 日、異例に雪が多く氷化したマッターホルンで滑落死されている。その日はあまりに条件が悪く登山を諦めた人が多かったのに、なぜ登られたのだろうか、合掌。

今回のブームは登山者ではなくランナーからのものだからレベルが高い。以前の記録なら、大差ない速度で歩けたのとは隔世の感がある。日本の山は、無雪期である限り、そして買い食いの出来る山小屋があればなおさら、何ら登山経験も技術も必要ない事がよく分かる。

最後に、ランニングシューズは本当に山に向いている。そして、それはヘラクレスのような選ばれた者だけに許された特権ではない。普通に貧脚の人こそ、軽い靴がいい筈だ。一流のスポーツマンも、例外なく軽い靴を好む。

登山靴やトレッキングシューズを履いた人の足音は、クマかと思うほどだ。静かな山にいと、相当遠くからドンドンと異様な音が聞こえ、それと気づく前は本気でクマだと思っていたくらいだ。その音は、膝や腰へのダメージの反作用として生ずる筈だ。ランニングシューズは、殆ど無音だから、本質的には衝撃は少ない筈だった。

長期縦走にランニングシューズを使用し始めたのは99年からだ。それまでも、入下山やテントサイト用としてマラソンシューズを持参していたが、下山の2日前から登山靴をザックに入れ履いてみた。調子がよかった。その年の2回目の山行では、完全にランニングシューズにした。登山靴とは使う筋肉が違うのか、大腿部の疲れは少なかったが、異様に腕が疲れた事を記憶している。00年は2度もランニングシューズだった。2人とも、山行中から足の甲が赤く腫れ、歩く度、一歩毎痛かった。スポーツ専門医の診断を受けると、レントゲン上異常はないが、疲労骨折、ひびが入っている可能性が高いとの事だった。その年の2回目は、多少よかったが、膝痛になって苦しんだ。2人とも、同じ時、同じ部位、同じ症状だから、たぶん歩き方に問題があったのだろう。翌年からは、腕や肩がこったり、痛くなったりしなくなり、やっとランニングシューズ歩きに適應したようだ。大腿部の疲れが非常に少なく、膝の故障も激減、足裏感が心地よく楽しく歩く喜びを得られるようになった反面、足裏の疲れが酷いのがランニングシューズの特徴のようだ。足下が軽くしなやかなので、ストックに荷重をうまく分散させられ4本足化したかのようになり、慣れるまでは腕や肩や手の平の疲れが酷かった。しかし、そのような疲労も、ストックの石突きの消耗も、ランニングシューズ歩行が身につくに従い激減していった。登山靴に慣れている人がランニングシューズ化するには、くれぐれも気をつけて欲しい。それら4回の山行の天候、使った靴はそれぞれ違うので厳密な話ではないが、参考にして頂きたい。

トレッキングブーツやハイキングブーツのように、接着製法の重登山靴もアウトソール、ミッドソールからサイドラバーまで一体で作られたものが多くなった。アッパーとの接着部分が多くなるので剥がれにくいのだろう。ところで、接着製法の靴の手入れには困った問題がある。革を手入れする、つまり油脂分、ロウ分やシリコーンを塗り込み、しなやかさを保ったり防水性を高め

る事は、革の撥水性を上げる事だ。しかし、そのようによく手入れした革には、当然接着剤が付きにくくなるから、一体式ソールでは特に問題になる。旧来の製法の靴なら、革のミッドソールにアウターソールを貼り付けるのだから接着力と革の手入れは無関係だ。一体式ソールは、アッパー中間部近くまで接着しているから、以前より剥がれにくいかもしれないが、昔のようにしっかり保革すると剥がれやすくなる。以前、張り替えに出したら、付きが悪かったらしく、保革剤は塗り塗らないで欲しいと言われた。殆どの接着製法登山靴は乾燥したヨーロッパ向きに進化した靴だから、湿潤な日本には向かない感じだ。これら接着製法の靴の寿命はブーツと同じと考え、使い切りにした方がトラブルが少ないだろう。運動靴の張り替えをする人はいない。

今でも、靴に製造年月日の記載があるものが殆ど無いのに、まだ登山靴には寿命があると言いつける企業と、無批判の山岳ジャーナリズムと、それに異議申し立てもしない消費者の従順さに呆然とする。ある時、関係すると思われる各行政機関に、製造年月日を表示する指導をして欲しい旨のお願いを、資料添付の上、送ったことがある。ただ一ヶ所からのみ、配達証明で、その件は当方の管轄にないとだけ記した簡潔な返事が届いた。日本的な、自分の領分を些かも越えないという奥ゆかしい反応だと感心する。

真理は明快であるはず。この寛容さや悪意に解釈すれば無責任さと自閉症的対応は、無明からもたらされたものではなく、一種思想の域に達しているのかもしれない。

加工食品流通業界には、「3分の1ルール」というものがある。製造日から賞味期限までの最初の1/3の期間を「納付期限」、賞味期限から前の1/3の期間を「販売期限」とする商習慣の事だ。「納付期限」を過ぎたものは卸からメーカーに返品され、「販売期限」を過ぎたものは小売店から卸に返品され、どちらも廃棄処分される。より新しいものを求める消費者の鮮度志向に答える形で90年代に広がったそうだが、まだ食べられる食品が大量に廃棄される食品ロスが、倫理的にもコスト的にも問題になり始めた。世界で一番厳しく鮮度を求めるのは、魚の生食文化を持つ日本ならではの、加工食品までとは行き過ぎだろう。そのような国民性が、時間による劣化が明らかな商品の製造日表示も求めないの一体どうなっているのだろうか。寛容さを通り越し、その受容的態度はロボットミーされたヒトのように人間味が感じられない。怒りを持ち、それを社会的にも克服しようとするのが現代の民主主義社会に生きる普通の人間だ。

しかし、豊かな自然に恵まれた日本は、同時に世界に冠たる自然災害多発列島であり、その住人は何事も甘受する受動的かつ健忘症で超楽観的性格に定行進化したのかもしれない。それならこの国土と風土にはお任せ民主主義がお似合いだが、何事も天災と諦観するのは奴隷

の平安だ。

ビブラムソールが使われ始めた頃の、色々な人が様々な意見を書いている記事(「ビブラム・ソールは果たしていいか?」、『岳人』54年6月号、71～73頁)を読むと、ビブラムには欠点が多く、肯定的な意見が殆どだった。接着製法登山靴の持っている欠点は、使い捨て化で解決するのがベターだろう。

自転車用の革サドルは、金属と一枚革(5mm以上の厚さ)だけで出来ているので、重量を除けば、耐久性と慣らしてからの乗り心地は並外れているのに対して、スポーツ用の革張り(ウレタンフォーム入り)プラスチックサドルは使い捨てである。しかし、革張りブラサドルは、旧来の重登山靴より遙かに耐久性がある。

冬山でめっきりプラブーツは少なくなり、中綿を入れた接着製法の靴が多くなった。防水性は中に入れてある防水透湿性素材で確保されるかもしれないが、中綿も、外の革自体も吸湿して、山行中に乾かすのは不可能だ。湿ると重くなり、断熱性が著しく下がる。保温性が高くなったと、オーバーシューズを使う事もなくなったから、昔より寒さを訴える人が多くなった気がする。歩き登山ならシビアな足捌きは必要ないので、日本の冬山や春山ではプラブーツがベストだと断言する。

日本で販売されているスカルバ・ベガは、08年からインナーブーツに高所用が標準装備されるようになってきている。日本での使用状況をよく知っているロストアローの判断はさすがだ。これまでは、内側がナイロンベロア、中綿は水を吸わない4mm厚のEVA、足入れをよくする為に水を吸うチップウレタンやウレタンがツバや足首部に入れられ、一番外側は厚手のナイロンコーデュラで作られた、非常に頑丈なものだった。高所用は、EVAが7mm厚にされ、ウレタンもグッと少なくなり、外は薄手の銀色ナイロン地に変わった。保温力をもっと欲しいが、前のモデルより確実に暖かくなっている。しかし、片足で80gくらい軽くなったものの、足入れ感は悪くなった。耐久性は、プラブーツのシェルの耐久性から考え十分だ。これまでのような取り外しの出来るインソールではなく、底には8mm厚、5g/a程度のあつという間にへたる平らな発泡ポリエチレンが張られており、取り外して乾かす事も出来ない。立体的な形でないため履き心地も悪いので、剥がしてEVA製の脱着式インソール(20g/a)に変え、ぐっと快適になった。このプラブーツは、使い切り商品として安価で販売されていて有り難い。製造年月が記されているのも珍しい。

ベガの UK サイズとシェルサイズ、カフサイズの正確な関係は、4.5 は 5 と 5-6、5 も 5 と 5-6、5.5 は 6 と 5-6、6 も 6 と 5-6、6.5 は 7 と 7-8、7 も 7 と 7-8、7.5 は 8 と 7-8、8 も 8 と 7-8、8.5 は 9 と 9、9 も 9 と 9、9.5 は 10 と 10-11、10 も 10 と 10-11、10.5 は 11 と 10-11、11 も 11 と 10-11、11.5 は 12 と 12-13 だ。

高所にプラブーツは使われなくなり、専用のオーバーシューズ一体式の靴が使われるようになっていく。暖かいだろうが、中は中綿入り革製だから途中乾かす事も出来ず、その点で長期山行には全く向かない。構造的に靴の手入れは出来ず、プラブーツ並みに使い捨てだ。

07 年から消えていたコフラックのプラブーツは、11 年、シェル素材をスカルパと同じ "Pebax" に変更して復活した。インナーは殆ど昔と同じだ。ローバのプラブーツは、インナーの保温材が繊維質のもので作られているので、湿ったら山行中は絶対乾かない。

それにしても、日本での革製登山靴の販売価格は異常だ。革製登山靴の関税は、30% が 4300 円/足のどちらか高い方が適用される。業者の場合 Cost, Insurance and Freight "CIF" 価格(商品価格と輸送料、保険金の合計)に対してだ。個人かつ国際郵便の場合、商品価格の 60% に関税がかかる。常識的に、CIF 価格は販売価格のせいぜい 1/3 から 1/4 までだろうから、関税率の高さが登山靴高値の理由ではなく、利益率や、流通経費の問題だろう。今の靴は使い切りの消費財だから、ソール張り替えサービスは止め、安価に販売して欲しい。ソールを張り替えても、新品より必ず剥がれやすい。運動靴は使い捨てだが、先進国では修理して使うことはない。

本書では、登山靴を旧来の製法、二重出し縫いと、新しい接着製法に分類した。

接着製法は、より正確に表現するなら、縫い糸を使わず接着剤だけで靴を作るセメントド製法だ。

手持ちの登山靴を分解してみて作り方がよく分かった。まず木型の底に合成紙のボール板とプラスチック板を重ねた内底を仮固定し、アッパー部を木型の上からかぶせ、底に吊り込みギャザーを寄せ、数十本の短い鉄クギで固定する。ここまでの作業で、革製の堅い靴下のようなものになる。次に、ポリウレタン製ミッドソール、鉄製シャンクを入れ接着し、サイドラバーを貼り付ける。最後にラグソールを接着して完成だ。このような作りの場合、ラグソールだけ交換出来る。二重出し縫いの靴と同じだ。必要ならミッドソール、サイドラバーまで交換可能だ。

今では、サイドラバー、ミッドソール、ラグソールまで一体で作られているものが多くなり、交換

料金は高くなったが、接着面積が多いので信頼性は上がっているだろう。軽く出来るかもしれない。しかし、根本的問題は保革剤を塗って手入れすると接着力が落ちることだ。

アッパーが内底にクギで固定されている構造だから、連日の雨での使用後に違和感を覚えた靴の中を見ると、内底が半ば剥がれ、スチールシャンクまで取れかけていたことがあった。たくさんの錆びたクギの頭が顔を出していたのを見て、恐ろしくもろい作りだと思ったものだ。当時はそのようなものでもクレームとして無料修理してくれた。

二重出し縫いの靴は、ラグソールが接着されている以外は、全て縫って作られているのでそのようなトラブルもなく信頼性が高い(シャンクは錆びるが)。そのため、製造に手間がかかる。不安なのはソールの突然剥がれだけになるが、昔は接着した上に周りをぐるりと縫ってあったり木ねじやクギで固定されていたようだ(芹沢一洋、『バックパッキング入門』、山と溪谷社、76年、41頁と42頁の写真)。十分な張り出しが必要で、厚いミッドソールが必要な構造だから、重くなって当然だろう。今でも、その様な縫い加工してくれる店もあるようだ。

12年には有名な革メーカー、スイスのガルサー社が廃業し、もはや手作りメーカーでは高品質の革の入手が難しくなったのかもしれない。とうとう、旧来の登山靴あるいは注文靴に対する信仰も終焉を迎えるのだろうか。

ガロコヒテン、ガロモンタン、ガロインパーミアブルは、革の断面の色が茶色だからタンニン鞣し、ヘンケ・モンブランは青白っぽいのでクロム鞣しのようだ。どの革でも、銀面が緻密で中に行くほど組織が荒くなっている。ガルサーはどれも比重が0.8くらい以上、ヘンケは0.7くらいだった。クロム鞣しは実際に軽いことが分かる。ヘンケの革は、革の両面だけベージュ色にくっきり染まっているので一枚革ではないと思って本書でもその旨書いたが、4.5mmもある厚い一枚革だった。厚い革を使っても比重が小さいのでその割に重くならない。ローバやハンワグで使用している革は、全て3mm以下の薄い革だったが比重が0.9近くもあるので、何らかの特殊な保革防水処理をしたものかもしれない。なおこれら比重は、傾向として正しいだろうが、サンプルが小さいので小数点2桁目は書かなかった。

くどいようだが、接着製法で作られた靴も新しい内は剥がれることがないので、登山靴も他のスポーツ用靴同様に使い捨てとして、それなりに安価で販売して欲しい。そうすれば、昔の鋏抜け、ピプラムの突然剥がれ、プラブーツの突然破壊の心配はなくなる。なお、ポリウレタンのミッドソールもプラブーツ同様突然破壊するので注意する必要がある。本書でも記したが、接着剤とプラスチックを使用した登山靴の寿命は、たとえアッパーに革を使ってもボトルネック部分の寿命になる。つまり、プラブーツと同じということを理解すべきだろう。

ソールの堅い登山靴を始めて履いた時のことを記憶している。あまりにアッパーが堅く一体どれ程締めたらいいかも分からないので、店の人に靴紐を締めてもらい、立って歩こうとしたらそのままずっ転けそうになった。それほど普通の靴に比べて違和感のある履き心地だった。もし、そのような靴を履く必要がある山に登ろうとしたら、店内でその靴を履いて多少は小走り出来るくらいの脚力が必要だ。その程度自由にならないなら、それは靴を履くのではなくギプスをつけることに等しい。逆に、それくらいの脚力があれば靴として使うことが出来る。それで、ゆとりを持って靴を持ち上げ、バランスを取って歩くことができるはずだ。しっかりした登山靴を履いている多くの登山者が頼りない歩きに見えるのは、靴の堅さに対して脚力が不足している、という理由もある。登山者も、多少のトレーニングが必要だ。

この項の始めの部分で、12年の夏山で靴が破損した話を書いた。アッパー部のメッシュの補強に熱可塑性ポリウレタン "TPU" (Thermo Plastic Polyurethane)テープが溶着されている靴で痛い思いをしたとも記したが、その靴で起こった事だ。

アディダスの adizero Feather RK(28.5cm、185g/a)だ。アッパー補強は殆ど全て TPU テープ、かつアウトソールは EVA ミッドソールに最小限貼ってあるだけの超軽量シューズ。アウトソールは一枚板状が一番剥がれにくい。復路の聖平当たりまでで、両踵ソール内側の一部が完全に欠落したのは想定外だったが、それ以上は壊れなかった。そして、荷物を背負っていても、想像以上に踵を使っていないことに気づかされた。また、TPU 補強テープの堅さとアッパー生地部分の堅さのアンバランスのため、三伏当たりで指の付け根の上の生地が大きく切れた。補強テープが縫い付けてあるタイプのものなら生地との間に多少のゆみがありフィット感もずっといい。アッパー生地にストレスがかからず破れにくいと思う。下山するまで、大きく裂けた靴を見られるだけでも恥ずかしく、表面のなめらかな TPU 補強テープには殆ど汚れがつかないのに対し、生地の部分が異常に擦り切れぼろぼろ状態のコントラストが恥ずかしさに輪をかけた。

さらに TPU テープの耐久性も問題だ。これまで使用した靴に使ってあった TPU 補強テープは、どれもウレタンソール以上に耐久性が悪かった。ベタベタになったことはないが、暫くで、ボロボロになって剥がれてきた。TPU 補強テープには、堅過ぎと耐久性に問題がある。

ストック、スノーショベル、わかん等

クイック式が多くなっているが、使いにくく、安全性に問題がある。ネジ式に比べ、出っ張りが

大きいのも欠点だ。調整する場合、クイックは一気に緩むので微調整が難しい、また運悪くクイックに岩でも当たれば突然開放され抜け落ちる危険がある。動かないようにしっかりクイックを締めるには強い力が必要で、手袋をしていたり、手が凍えていたら開けない、閉じられない。自転車のハブのクイックリリースは、金属製の長いレバーを持ち、ストックのようにシャフトぴったりに収める必要もないので、しっかり確実に固定出来る。クイックリリース機構は、このようなものを使うべきではない。

カーボン製も、レベルの高い素材を使ってないばかりか、傷に対する弱さもあるので、素材として向いているとはいえない。大して軽くもない。

レキのスーパーマカルーアンチショックは、スプリングを外し固定化して、スプリングなしのモデルに改造した。ネジ取り付けパーツをジュラルミンで自作し、エポキシ系弾性接着剤とポンチ4カ所で固定した。どのストックも、ネジ固定部がすぐガタガタになっていたが、ガタが出る度、このように修理するようにしてから全くガタが出ない。ガタが出ると使いにくいのは、ラチェット式のものと同様だ。スペアに買った何本ものチューブが新品のまま残っている。

なお、EVAフォーム製のようにざらついたグリップは、雪が付きやすいので冬には向かない。夏は、耐久性の点で好ましくない。

スノーショベルは、軽量化の為にミゾーのチタン製改造(292g)を使用していたが、小さいので効率が悪い。超々ジュラルミン製で頑丈なブラックダイヤモンド製ショベルは、ショベル部(346g)と固定スリーブ(27g)だけ持参すればピッケルに固定出来ることになっている。しかし、円筒形の固定スリーブをシャフトに叩き込み固定する構造だから、一度固定すると外するのが困難だから、普通は専用シャフト(192g)に固定して565g状態で持ち運ぶことになる。そこで、現在はショベル部にミゾーの固定具を取り付け、ピッケルのシャフトに簡単確実に固定、取り外しが出来るよう改造(367g)したものを持参している。

わかんの進歩は全く無い。市販のわかんで本気でラッセルが出来るのか疑問に感じるくらいだ。

相変わらずエアモンテのわかん(金属部分のみ)に、自作の取り付け具だ。金属部分はほぼ十分な性能を持っているが、取り付けバンド類はとても使い物にならない。

パイプは自転車のフレームやバットに使われる6061ジュラルミンで、始め1.0mm厚のものが現在は1.2mm厚にされ、50g/aくらい重くなって遙かに凹みにくくなった。爪(80g/片足)

はテントのポールにも使われる超々ジュラルミン 7001 鍛造で作られ、パイプがぴったり挿入されている。挿入部は弾性接着剤と、外側部分だけ片足 8ヶ(5g くらい)のステンレス製リベットで固定されていて絶対ガタがこない。パイプの凸凹や傷があまりに酷くなると交換するが、爪が破損したことはない。これまで使用した 5 足の内、片足だけが爪の横方向に小さく出っ張った部分が、よく見ないと分からない程度曲ったことがあるだけだ。

山で一番見るのは、エキスパートオブジャパンの製品だが、全てに渡りエアモンテのものとは比べ粗悪で弱い。パイプは 6061 よりずっと弱いサッシに使われる 6063 ジュラルミン 1.0mm 厚を使用、同じく爪は 7001 超々ジュラルミンより遙かに弱い 18-8 ステンレス板金(112g/片足)で作られている。金属部分の重量はほぼ同じ片足 300g くらいだ。爪は 1mm 厚のスポット溶接、パイプとの接合部はガタが多く、鉄製貫通リベット(17g くらい/片足 8ヶ)で固定されているだけだから、暫くでガタつき壊れて当然だろう。最近のものはパイプの前後共、上に曲げられており、平地用としてはともかく山向きではない。

粗悪品にもかかわらず、日本製を誇るメーカーがある。しかし、日本製であることは高品質である証明にならないのは自明だ。

カジタックスの廃業と品質劣化

カジタックスが 10 年 5 月 31 日をもって突然廃業した。驚き、スペアや補修パーツをふんだんに入手しても、それ以後が心配になる。ところが、モンベルが事業を受け継ぎ、10 年 12 月の 4 本爪に始まり、11 年秋には LX タイプの一部を販売し始め喜んだのも束の間、肝心の素材が変更され似て非なる製品になっているのを知ってがっかりだ。売り物であった特注の低温特性の良いニッケルクロム鋼(ホームページやカタログではそのように表示されていたのでその表記に従ったが、普通はニッケルクロムモリブデン鋼という)ではなく、市販のクロムモリブデン鋼に変えたのだ。細かな説明は、**本書 87 頁に記した**。一般的に、ニッケルクロムモリブデン鋼の廉価版がクロムモリブデン鋼だ。滑りやすい、硬い材質のアンチスノープレートにも改善が見られない。本格的山行に向くものは未だ作られていない。日本のものづくりの継承は、一アパレルメーカーには荷が重いかもしれないが、素材まで一般市販品に変えるのは羊頭狗肉であり、今後の購入予定リストから外さざるを得ないのが残念だ。低温下での靱性を保つため、強度を押さえた熱処理を採用する他ない。明らかに弱くなっているから、購入は注意すべきだ。

最近ネット上で LX アイゼンが折れるとの情報をよく見る。12 本アイゼンの前歯から 3 列目の後、靴の一番曲がる部分、母趾球の当あたりで折れていることが多い。曲がりやすい靴の場合、折れるのは主としてその部分だ。

XB が 3.2mm、LX は軽量化のため 2.2mm 厚の鋼材を使っている。単純に同じ形のものを作れば強度が持たない。そこで、リップを入れたり、曲げ加工をして剛性を出している。折れる部分の実質的厚さ、L 字型になった部分の(靴底からの)厚さは 6.0mm だ。それらに同じ曲げになるような力を加えると、LX には XB の $6.0/3.2=1.875$ 倍の応力がかかる。母趾球当たり、アイゼンがもっとも撓む部分では靴側表面には圧縮、反対側表面はその圧縮応力と同じ大きさの引っ張り応力がかかり、その応力の大きさは厚さに比例するからだ。アイゼンの厚さの中心部分には応力はかからない。LX は XB の 1.875 倍の応力がかかるのだから、折れやすく当然である。こんな落とし穴があったとは、なかなか軽量化は難しいという事だ。モンベルのモデルはさらに強度の低いものだから、もっと折れやすい。底が曲がりやすい靴で使う事が多い、本格的とは言い難いクラスのアイゼンにこのような構造は向かない。

XB と同じ形で LX を作ると、金属部分は板厚の比、つまり 69%の重量になる。母趾球の下あたりのアイゼンフレームの幅は 10mm。そのような板材を考えると、曲げ剛性は I に反比例、XB が 27.3、LX は 6.1 になり、4.5 倍も LX は撓みやすい。これでは爪は簡単に曲がってしまい実用にならない。同様に、曲げ強度は Z に比例するから XB が 17.1、LX は 8.1、LX は XB の半分以下の強度になる。それらの欠点を補うため、LX は曲げやリップを入れているので板厚ほど軽量にはなっていない。断面二次モーメント I、断面係数 Z、剛性、強度についての説明は、本書 154、155 頁を参照。単純すぎる比較だが、XB と同じ位置の LX の形状は、上下逆の L 字型、幅 7mm、厚さ 6mm、その I は 43.9、Z は 17.1、XB と比較すると、曲げ剛性は 1.6 倍、曲げ強度は同じになり、必要な性能を確保するよう工夫したデザインであることが分かる。

13 年の秋、完全ワンタッチ式のアイゼンが発売されたが、前後フックにワイドサイズ、ノーマルサイズの別はなく、それぞれ 1 種類では、カジタックス時代のようなフィット感は得られない。大きすぎる後部調整プラスチックパーツも改良されない、頑丈な XB タイプ、本格的なピッケルもパイルも発売されない。昔はカジタックスのピッケルとアイゼンが山を席卷していたのに、ハイキング用のものを除いてすっかり見ることは少なくなった。

特殊鋼の価格は 30 万円/(チタンは 300 万円/t)くらいだから、300 円/1kg。

アイゼンの重量は 1kg 程度、使う鋼材の重量は 700g 弱くらいまでだから、プレスで打ち抜

く前の鋼材の重量は 2 ~ 3kg と考えれば、1 セットに使う鋼材の価格は 600 ~ 900 円である。特注の鋼材の最小ロットが 100t と考えると、3000 万円になり、アイゼン 3 ~ 5 万セット作ることができる量になる。これは年間の販売数に対し相当なものだろうから、これが特注のニッケルクロムモリブデン鋼を使わなくなった理由かもしれない。

間違った**アイゼンの研ぎ方**をしている方をよく見る。先端だけ鈍角気味に研いでいるのだ。本来は爪の根本から先端(幅 1.0 ~ 1.0 強 mm くらいにしている)まで直線的に研がないと、刺さりが悪くすぐ丸まってしまう。面倒だからそうするのだろう。しかし、電動工具を使えばヤスリで削るよりずっと楽に作業することが出来る。加熱によって熱処理の効果がなくなってしまうから電動工具使用をためらうのだろうが、注意すれば大丈夫だ。もし、ベルトサンダーがあるなら、80 番くらいの粒度のものを使うとよい。先端部分は熱の逃げる方向が一方向だけになるから焼けやすい。焼きが戻ってしまうから、絶対赤黒く、赤くならないように作業する。一面ずつ、ほんの少しずつ熱くならないよう作業すると時間がかかるので、頻繁に水に漬け冷やしながら行う。どの程度で熱くなるか、使わなくなったアイゼンや金属片で練習して感じを掴んでから本番に入るとよい。次に勧められる電動工具はディスクグラインダーだ。アイゼンをバイスで固定し、絶対赤くならないよう少しずつ作業する。手で触ってもやけどをしない熱さ以上にならないよう全体を少しずつ、かつ十二分に冷やしつつする必要がある。水を使って冷やしにくいので、ベルトサンダーでの作業よりずっと時間はかかるが、ヤスリでこつこつするより遙かに楽だ。うまくディスクサンダーをバイスに固定出来れば、ベルトサンダーのように快適に作業出来るかもしれない。

ところで、50cm とか 55cm といった長さの**ピッケル**を、ぶらぶらさせて一般道を歩いている人がいる。氷用のピックが急角度についているものではないが、氷を登る訳ではなくせいぜい急な雪壁を登るだけだから、普通の斜面で杖として使用可能、少なくとも雪面に届く 60 ~ 70cm くらいは必要ではないだろうか。ぐさぐさの雪壁でもある程度の長さがないと支えにならない。

ザック

本書では、ザックはパッキングのフルブルーフ化に向かって進化していると書いた。ヨーロッパ系旅行者が、しばしば大型ザックを背負っているのを見るにつけ、それらのザックが日本的

縦走登山向きに作られた訳ではないことが想像出来る。ロングトレール用のザックなら旅行用と類似で十二分だろう。地形的にも、気象的にも欧米になく厳しい状況で行う縦走向きザックは事実上ないと言っても過言ではない。必要がないからだ。しかし、日本でも開発されないのはどうしてなんだろう。多少パッキング技術が必要でも、コンパクトにパッキング出来、どんな状況でも使いやすいザックは、日本では、肝心の背負い心地を無視したものしかない。一部コアな登山者に人気のあった石井スポーツの大型ザック、ガッシュブルムも 13 年度で製造中止になって当然だ。

人間工学的によく考えられたザックは、本書 104 頁のイラストで描いたヤックパック、『バックパッキング入門』67 頁で写真が紹介されているジャンスポーツのグレートバックだろう。大きさの違いはあるが、トレラン用ザックのように背中から腰にかけぴったり抱きつくような形状を持っている。安定感とフィット感は完璧に近い。しかし、トレラン用のような小型ならともかく、大型では、パッキングしにくく使いにくいので消滅した。立体的に作られているといっても、現在の大型ザックは、町用としての格好良さ(と生産の簡略化)を狙っただけのものと思えない。本来のインターナルフレームザックの必要機能は、本書 94 頁のイラストに描き説明したとおりだ。主たる需要が旅行者になって、すっかり本質が忘れ去られたと思う。テントはまだ日本ブランドが移動用山岳テントとして余命を保っているが、大型ザックはもはや自作しかないようだ。

相変わらず、日本ブランドにはまともなものがない。某ブランドの 11 年にモデルチェンジした大型ザックには、背面長によるサイズ分け(3 サイズ、S、M、L でも幅がありすぎるが)さえなくなり、背面長の調整はウェストベルトの上下で行うようになった。内蔵フレームは荷重を支えるには弱く、適正な形状を保つ役割をするとは思えない。普通のヒトは、腰とウェストが一定の位置関係にあるので、ウェストベルトの上下だけで背面長を調整出来る筈がない。ウェストベルトの位置を移動させても、腰の位置は変わらないので全くフィットしなくて当然だ。20%軽くなっているようだが、犠牲が大き過ぎる。ショルダーベルトはイモ付けかつ適切な硬さではない。ローが作った、インターナルフレームザックの基本的構造と各パーツの機能を今だ理解していないのは、日本ブランドザックの不思議だ。

自作ザックで唯一、市販パーツを使っていた夏用背面パッドのウレタンフォームが崩壊して、新たなフィルタースポンジに変えた。これで、やっと完全自作が完成した。

なお、一時愛用していたマックパックのカスケードという大型ザックは、とうの昔に崩壊している。コットンとポリエステル混紡地にワックスを染みこませた頑丈で耐久性の高い生地を使っているが、重要ポリウレタン部が加水分解して壊れては手の施しようがなかった。フレームとショル

ダーベルトを接続する重要部分に信頼性の劣るポリウレタンが使ってたのだ。リービヒの最小律と相似、製品全体の寿命もボトルネック部パーツの寿命で決まる。

テント、テント生活の智慧

様々、新たなテントが発売されるが、本質的と言えるまで良くなったものは何一つ無い。しかし、部分改良されて完成度が高くなっているものはある。新製品が余りに多いので、衣類や靴よりかもしれませんが、ご多分に漏れず以前より商品選択が難しくなった。一つ一つを基本から見直すことにしよう。欧米ブランドには、本書で示唆したように長期縦走登山向きのテントはない。そのフィールドがないから、厳しい山岳環境に耐えられる軽量テントは無いといってよい。日本ブランド軽量テントの多くもキャンプ用なのは、長期縦走者が少なくなったためだろう。

軽量化は余程の新素材でもない限り、必ず耐久性や使い勝手と反比例する。テントの生地が薄くなり、特にフロアーにはフットプリントを常用している人が多くなった。これでは、重量的には本末転倒、かえって重くなってしまふ。フロアーの汚れを防ぐ効果はあるが、風が吹いた時の設営や撤収を考えると、フットプリントは穏やかなキャンプ場でのみ使うものということは自明だ。山の凸凹した天場では、フットプリントとフロアーの間の水が何時までも抜けなかった、という思い出話を本書でも書いたように、うまく機能するとは限らない。本体やフライシートの生地もスリップを心配しなければならないほど薄くなっているが、得られる軽量は、失われた信頼性と比べはるかに小さなレベルになっていると思う。

次の表は本書 155 頁と同じものを参考のため載せ、その下の表は今回新たに測定したものの、.351 はカタログデータだが、イーストンは実測値と同じ筈だ。最近、DAC が公表した剛性のデータでは、.340 は 129.2、PF9.0 は 149.4、NSL10c は 219.7、NSL9c は 130.8 となっており、本書での実測からの計算値とほぼ同じになっている。FL8.88 は 135.9、計算値 146、もう 1 本切ってみたら 141 が少し違っただけだ。韓流のチューブは精度が悪い。

イーストンもホームページに堅さ "Stiffness" を公表していたが、次元、単位の記載がない。尋ねると、単に社内の目安だという。それでは、どちらのチューブが堅い(撓みにくい)かぐらいの目安にしかならないが、以下の表で正確に分かるだろう。

本書で説明したように、細いチューブは、太いものより柔らかくて曲がりやすいが、突風が吹

いてポールがひどく撓んでも曲がり癖がついたり折れたりしにくい。

断面二次モーメント I、断面係数 Z、剛性、強度についての説明は、本書 154、155 頁にある。

	.333	.340	.355	.433	PF9.0	PF10.2	FC8.88	D7178
直径	8.46	8.64	9.02	11.0	9.00	10.20	8.88	11.0
肉厚(mm)	0.67	0.64	0.64	0.76	0.66	0.73	0.62	0.8
I (mm ⁴)	125	130	149	322	150	245	134	335
剛性比	0.84	0.87	1	2.16	1.00	1.64	0.90	2.25
Z (mm ³)	29.6	30.1	33.0	58.5	33.2	48.0	30.3	61.0
強さ比	0.90	0.91	1	1.77	1.01	1.45	0.92	1.85
断面積 (mm ²)	16.4	16.1	16.8	24.4	17.3	21.7	15.4	25.6
重量比	0.98	0.96	1	1.45	1.03	1.29	0.92	1.52
	.344	.351	NSL10c	NSL10e	NSL9c	NSL9e	UL.c	UL.e
直径	8.74	8.91	10.28	10.82	9.00	9.45	8.62	9.07
肉厚(mm)	0.48	0.53	0.62	0.60	0.55	0.53	0.60	0.57
I (mm ⁴)	107	122	225	252	131	148	122	138
剛性比	0.72	0.82	1.51	1.69	0.88	0.99	0.82	0.93
Z (mm ³)	24.4	27.6	43.7	46.7	29.1	31.4	28.4	30.4
強さ比	0.74	0.83	1.32	1.42	0.88	0.95	0.86	0.92
断面積 (mm ²)	12.5	14.0	19.2	19.3	14.6	14.9	15.1	15.2
重量比	0.74	0.83	1.14	1.15	0.87	0.89	0.90	0.90

事実上、新しいポールは韓流ばかりだ。例えば DAC では、93 年 "Combination"、96 年 "Prss Fit"、97 年 "Featherlite"、00 年 "Featherlite SL"、04 年 "Featherlite NSL" と矢継ぎ早に開発していたが、最近は落ち着いているようだ。

ポールの素材に革新的なものは全くないから、実際の使用上の違いは何ら感じられないだろう。軽くすれば、弱く撓みやすくなるといったように、あちら立てればこちら立たずだ。カーボンには本書で書いたように、安全性や耐久性に問題がある。

しかし、できるだけ単純なポールが好ましい。単純なチューブ構成のものであれば、スペアチューブの管理や、持参して山中で完全復旧するのも簡単だ。

イーストンの.433 は 06 年で廃版だ。しかし、どれを見ても、何だか一番最初の.333 から殆ど進歩してないししか思えない。それ以後、素材が変わっていないから当然だろう。逆に、オリジナルのシンプルな作りに改めて魅力を感じる。

NSL10.2、9.0 とウルトラライト(UL)ポールは、メインチューブの両端がバルジ加工で太く(必然的に肉厚は薄く)されている、あるいは中央部がスウェーピング加工で細くされている。

NSL10c、NSL9c、ULc の最後の c はチューブ中央部を表し、NSL10e、NSL9e、ULe の末尾の e はチューブ末端部を示す。c は center 中央の意、e は end 端を意味している。

NSL は 04 年発売の DAC 社 Featherlite NSL。Featherlite のようにチューブ接続部に角張った段差がないので、スリーブ式のテントに挿入する時、引っかからない。メインチューブの全長は 450mm、中央の細い平行部分はそれぞれ 368mm、380mm、両端の太い平行部分はそれぞれ片側 37mm、31mm、テーパ部はそれぞれ 4mm。表示は、中央の平行部分を表しているようだ。インサート部は、それぞれ 35mm、30mm と短めだ。これまでどのインサートチューブも両側のメインチューブに均等な長さ挿入されていたが、NSL のインサート圧入側の長さは 26.5mm、インサート部は 24mm と、力学的にバランスが取れない。圧入インサート側末端の 6mm がメインチューブ内径より 0.02mm くらい太くされ固定される。DAC 社によると、50 ~ 200kg の力でメインチューブとインサートチューブが固定されているとしている。実際、その固定部分はメインチューブの直径が 0.02mm くらい太くなっている。直径 10mm のものが 10.02mm になったとすると、円周で 1.004 倍大きくなった事になる。つまり 0.4% 伸びた訳だ。アルミのヤング率を 7000kgf/mm² とすれば、0.4% の伸びは 28kgf/mm² になるから、素材の強度の半分弱の応力が予めかかっている事になり嫌な感じなのは Press Fit と同様だ。

yunan 社のウルトラライトポールは、インサート部が分離するインディペンデント・インサート・システム(II)を採用している。12 年春からエスペースの小型テントに採用されている。メインチューブの全長は 400mm、中央の細い平行部分は 338mm、両端の太い平行部分は片側 27mm、テーパ部はそれぞれ 4mm。メインチューブの全長は 400mm、フローティング・コネクター(FC)と異なり、均等な厚さの普通のパイプで出来たインサートチューブはほぼ同じ 25.5mm だ(全長 51mm、両端のプラグを含めた全長は 79mm)。FC のインサートは大変凝った構造で、理論的にもっともな感じがしたが、製造の困難さから旧来のシンプルなチューブに戻したのだろうか。10 年のウルトラライトポールシステムには、FC のような中央部が肉厚のインサートチューブが使われていたので、その変更理由が分からない。

FC はどちらのメインチューブにも固定されていないので、収納に不便な事もあるが、II は一方のチューブに固定され、既存のポールのように扱いやすい。インサートチューブの両端にプラスチックのプラグ(デルリン製)が付けられ、その間をショックコードが通っている。だから、テントポール一本全体を貫くショックコードが不要で、少し軽くなったという。一方のプラグだけインサートチューブにしっかり圧入されているため、いつも同じ部分からポールが分離出来る。どちらのプラグも、強く引き抜けばメインチューブから抜ける程度で圧入されており、両プラグを引っ張るショックコードによりそれぞれのメインチューブは接続される。だから、いつもショックコードは引っ張られた状態であり、これまでのポールのように、使用しない時はショックコードを抜いておいたり、インサートチューブ、テントチューブ内部やショックコードを乾燥させる事が難しいのが気がかりだ。テントチューブの内側まで濡れたり凍ったりする事は珍しくない。そのような時、圧入されていたプラグが外れたらポール紛失の危険さもある。

NSL10.2、9.0 とウルトラライト(UL)ポールのメインチューブの中央部と両端部を比べると、両端は中央部の 1.12 から 1.13 倍の剛性、1.07 から 1.08 倍の強さになっている。端が中央よりやや強かつ剛性が高い(曲げるのにより大きな力が必要)という事だ。メーカーが違っても、どちらも同じような強度、剛性のバランスになっている。

NSL10.2 のインサートチューブは、メインチューブ中央の 84%の剛性、90%の強さ、メインチューブ両端(インサートチューブと重なり合う部分)の 74%の剛性、84%の強さ。一般的なポールが 70%くらいの剛性、80 から 85%くらいの強度に設定されているのに比べ、やや剛性が高く強くなっている。

NSL9.00 のインサートチューブは、メインチューブ中央の 89%の剛性、96%の強さ、メインチューブ両端(インサートチューブと重なり合う部分)の 78%の剛性、89%の強さ。NSL10.2 より、さらにインサート部が強く剛性が高くされている。

yunan 社のウルトラライトボールのインサートチューブ(インディペンデント・インサート)は、メインチューブ中央の 77%の剛性、85%の強さ、メインチューブ両端(インサートチューブと重なり合う部分)の 68%の剛性、79%の強さ。両端部は旧来のボールと同等の比になっているが、中央部はほんの少し剛性が低く(曲げるのにより小さな力でよい事)になっている。

このような複雑な構造にするのは、テントボールの一部に応力が集中させないようにする工夫だ。つまり、チューブとチューブの接続部の強度と剛性をどうバランスさせ、ボール全体としてのウィークポイントを作らないかという事だ。でも、とても成功したとは思えない。一つ解決したかと思えば、また新たな問題が生じてしまう様な気がする。

以上は 7001-T6 製で、他の韓流チューブと同じだ。このように凝った作りのチューブは、一層精度が出ていない。直径は測る場所により 0.03mm 以上も変わる。カタログ値と寸分違わないイーストンとの大きな相違だろう。

イーストンの.351 は 06 年に発売された NANOLITE シリーズ、インサートチューブはメインチューブの 75%の剛性、86%の強さになっている。インサートチューブは旧来のものより少し剛性が高く強度が高い比率になっている。メインチューブは、オリジナルの.333 よりやや曲げやすく、弱いが相当軽い。イーストンとしては珍しく、インサートは片側 30mm と短い。曲がりやすくして、応力の集中を防ぐ工夫だろうか。

ところで、今回も全ての韓流ボールのメインチューブ内径とインサートチューブ外径の差は 0.1mm 以上もあるのに対して、イーストンはどれも 0.07mm 以下となっており、ガタを殆ど感じない。材質は同じ 7075-T9、イーストンは 7001-T6 より強度が勝っているとしている。

Carbon FX のインサートチューブは、.340 のものと全く同じものが使われている。メインチューブの剛性は同等だが、強度が遙かに強いから、相当曲げてもメインチューブは壊れない事になる。逆に、インサートチューブは壊れやすいのが困った問題だ。

これを解決使用としたのが、Carbon FX のインサートチューブに AirLock コネクターを使ったものかもしれない。

特許の AirLock コネクターは、II と類似の方法でメインチューブとインサートチューブを分離したシステムだ。接合させるメインチューブそれぞれにデルリン製の受け具を挿入、そこにカーボンとアルミ複合素材のインサートチューブを入れる。受け具の一番奥はインサートにカチッと固定されるようになっており、両側の受け具を貫いて、強いプラスチックロープが渡されロープの両端には抜け止めのアンカーが付けられ、チューブがばらけないようになっている。ショックコードではないから、振れば 1 本のポールになる事はないが、インサートチューブを受け具にカチッと固定出来るので、半刺しでメインチューブを破損する危険はなくなる。インサートチューブをカーボンだけで作らないのは、万が一の破損を考えたためだろう。カーボンが折れる時は、竹のようにささくれ立ちテントを破る恐れがあるからだ。万が一、インサートチューブが折れた場合、まずロープを切り、受け具からそれぞれインサートチューブを抜き、新たに交換のインサートチューブを入れて使う。以後、その部分でメインチューブがばらけてしまう事になるのは問題だろう。帰宅後、きちんとした修理はメーカーに依頼する必要があるのは面倒だ。インサートの長さは、韓流と異なり十分長い。

なお、テントポールの剛性は、1 本のポールを片持ち状態で横方向に出した時の先端の下がった大きさでは分からない。同じ剛性のものでも重い方の撓みが大きくなるのを、剛性が低いと勘違いしない必要がある。カーボンとアルミの同等剛性のポールと比較しても意味がない。この場合、アルミの方が重いので撓みが大きくなるだけで、それは剛性とは関係ない。剛性の定義は本書に書いてある。

10 年 6 月にエスパースがオプション部品として発売したシリコンゴム製ショックコードは、-28 まで伸縮力に殆ど変化がなく、-40 で完全に伸びきるが温度を上げると-25 で完全復元する。これまでの生ゴム製は-10 で伸び始め-40 で伸びきって復元しないので、山行中に伸びてポール組み立てに苦勞する事もあった。8.5 ~ 8.8g/m と極わずかに重くなったが、伸びきって困るトラブルは全く無くなった。夏山では過剰品質だろうが、厳冬期には必需品だ。

エスパース・マキシム・ゴアテックスは 09 年 10 月、X-Trek 地が変わりエスパース・マキシム-X になった。高強度の熱圧着シートでハンモック取り付けループが取り付けられ、使い勝手が著しく上がった。ハンモック取り付けが、防水性の犠牲なく美しく実現された。ポールは DAC のフェザーライト NSL になり、トータルで 10% 近く軽量化されている。

ソロ、デュオ・シリーズに 99 年から採用されている、フルコネクテッド・ポールスリーブは、生地伸縮に対する適応力がないと思っていたが、今では両側に外付けグロメットが取り付けられ、調整面でも完璧なものになっている。04 年からソロ、ゴアに、05 年からデュオ、ゴア、11 年にはソロウインターに導入されている。どちら方向からでもポールを入れる事が出来るので、一人で簡単にテントを立てられる。エスペースだけに可能な技だ。12 年からポールは yunan 社のインディペンデント・インサート・システム、ウルトラライトポールが使われ、1 張り当たり 100g くらいは軽くなっている。軽量化の多くはポールによる。それらは、もちろん実感的違いを感じる事が出来ない程度だ。

ダンロップ V シリーズの一番小型テント、V-3 は 12 年から廃版になり、同等の大きさのものは、より軽量の素材を使ったモデルに移行した。89 年 V300、94 年 V304、98 年 V308、00 年から V3 と改良されたが、時代はさらに軽量化を求めたようだ。現在、雪山対応の VL シリーズと、夏専用 VS シリーズになっている。VL の本体とフライには 20d、グランドシートに 30d という極薄地が使われているから、雪山専用にした方が安心だ。ポールは、1 人用は NSL の 8.5mm 径、2 人、3 人用は 9.0 と 9.6mm 径のミックス、4 人用は 9.6 と 10.25mm 径のミックスが使われ、ジョイント部は全て、細いチューブに共通化されている。上部に太いチューブを使った "Combination" と名付けられたポールシステムで、天井部分により広い内部空間を確保しようとしているもの。普通のドームテントのポールは、同一径のチューブで構成され、素直なドーム、半円形状になっているのに対し、ポール中央部に太くて剛性が高いチューブを採用することにより、ポールはやや台形気味の形状になる。テントの天井部分が広がり、頭部スペースにゆとりができ、居住性がよくなるが、不自然なポールが思いもよらぬ問題を引き起こす恐れがないのか心配だ。3 人以上のものは、上部の 4 本が軽く曲げられている。だから、スベアポールは 1 人用は 1 種でよいが、2、3 人用は 2 種、4 人用は 3 種類持つ必要がある。ジョイント部はサイズ毎、全て同じ太さだから、1 人用以外のテントのスベアチューブも太いチューブ 1 種でいいかもしれないが、長期の場合は気分がよくない。末端の両側チューブの長さは他の部分と異なり、ジョイント部の形状はそれぞれ違うので、厳密にはその 2 種類も持参しなければならないが、末端は曲がったり折れたりしないので省略してよい。しかし、単純な個人的趣味だが、このように複雑な構造のテントポールは好きになれない。

ペグは極小タイプばかりになっている。古代の日本人は、中国から倭国、倭人という蔑称で呼ばれるのを嫌い、自分の国ことを中国に対して太陽の出る方向にあることを示した「日本」と

いうことばを作り自称した。同様に、極小のペグは矮小ペグみたいで好きになれない。本書で書いたような大きさの頑丈なものでなければ強風には絶対耐えられない。優しい状況でしか張らないからそれでいいのに違いないが、それでは『倭をもって貴しとする』ではないか。純チタン、マグネシウムやカーボンもペグには全く向かない材質だ。

吊り下げ式テントの欠点の一つは、強風時は特にフックがフライシートと擦れ、生地を傷め防水性を消耗させる事だ。そのデメリットを解消するため、手持ちの吊り下げ式テントの本体の引っ掛けフックは、フロアー 70d 防水地を袋状にしたベルトと 20mm 幅バックル構造に改良している。生地が薄くなり、見過ごせない欠点になった。

最後に、これまで何張りのテントを、ウレタンコーティングの劣化によって捨てたのだろうか。虎は死して皮を留め、天幕は死して竿を残す、手持ちの大量のポールに嘆息する。

テント収納用完全防水袋もシリコン防水地のものが多くなり、擦れに弱くなった。夏はフロアーに細かな砂利がついていることも多く、70d くらいの擦れに強い防水地のものが見当たらなくなって困っている。そこで、今でも MB アクアベルを使っているが、暫く使うと白い防水被膜が皮がむけるようにペロペロ剥がれてくる。

テント生活は生活技術の一つであり、個人の嗜好や目的意識に大きく依存する分野だから、多様な登山に対して一般化、普遍化した解答は出せない。しかし、定着やベースからのピストンとはかく、長期縦走生活をする人は殆どいないので、そこにどんな問題があるかも把握していない空論しか殆ど見たことがない。そこで、重複するかもしれないが、生活の知恵を書きたい。

テント内の靴置きシートには、現在タイベックス(100 × 90cm/54g)を使用している。ナイロン防水地より水切りが良く、ブルーシートより軽い。フロアーに使う訳ではないので防水性は十分で、本体に使う訳ではないので耐裂性も問題ない。

夏には冬のように**ハンモック**の必要はないが、ハンモックの取り付け部を利用して、物干し紐を付けておくと大変便利だ。4カ所の取り付けループを使い、四角、X字状に 2mm ロープを張り、必需品になっている。

夏には小さな銀マット(50 × 30cm/48g)を持参する。主として、テント内でザックにパッキングする時、膝の下に入れる為に使う。それまでは、膝が痛くてたまらなかったが、全く苦痛が

なくなった。フロアーにも優しいだろう。その他、就寝時の踵の下に敷いたり、ピストン時のザック内に入れ背当たりを良くするために使って便利だ。

冬期は4日連続(5連泊のこと)してテントの中で沈殿したのが最高記録だ。経験が少ない頃は、2日もテントの中で殆ど身動きも出来ず沈殿していると、翌日体が動くのだろうか、行動出来るのだろうかと非常に心配していたが、いつも問題なく翌日はしっかり行動出来る。昔、ヒトは冬眠する能力を持っていたのかもしれない、と思うほどだ。エコノミークラス症候群は、横になっているのだから問題ないだろう。

しかし、狭いテントの中で身動き出来ずにいると、暖かいシュラフに入っても必ず足下が冷えてくる。そのような時はポリカーボボトルに湯を入れ、湯たんぼとして使うとぐっと楽になる。ポリカーボボトルのキャップにはシリコンゴムのパッキンが入っているので、キャップは確実に閉まり、閉めた感じに安心感がある。馴れても、シュラフの中に水を入れる不安は消えないが、丈夫なフリースパックにでも入れると安心かもしれない。1Lの0の水を50に上げるとすると、効率100%なら50kcal、LPGは約4g必要になり、夜寝る時にシュラフに入れ朝は25になっているとすると使用した熱量の半分2g損失したことになる。本書で説明したような方法なら、案外ストーブの熱効率が高いので毎日の損失を2.5gと考えれば十二分だろう。20日間毎日湯たんぼを作っても50gの損失に過ぎないので、遠慮なく湯たんぼを作ればよいだろう。

テントのジッパー、特に力がかかり濡れるフライシートのジッパーは動きが渋くなりやすい。ジッパー用の潤滑スプレーか、プラスチックに悪影響を与えないシリコンスプレー(KURE製のシリコンスプレーはべた付かずよい感じがする)をたまに噴霧するといい。コイル部にローソクをこすりつける古典的方法より効果がある。

シュラフ

ある日本ブランドが09年から、生地をバイアスにしてストレッチ性を出したというシュラフを発売したが、登山用としては蛇足でもキャンプ用としてはよく考えられている。

今やどの製品の品質も底上げされ、昔はよくあった、羽毛が異様に臭ったり、生地から羽毛

抜けが酷すぎるようなものはなくなった。逆に、羽毛の脱脂しすぎや、生地を通気性不足は殆ど考慮されない。

問題は、内外ブランド共、ザックと同様、その使用対象者が長期縦走でなく、定着キャンプや緩い山歩き用のスペック至上主義になっていることだ。ザックが一般旅行者向け、シュラフはキャンプ用に定向進化しているみたいだ。その様に凝った作りのシュラフは、厳しい状況下での使用では様々な不具合が生じる。

人間工学的な立体構造は魅力的で軽量化できるが、ぴったりだから温度調整にジッパーを一寸開けても寒い上、ジッパーを開けないと入れない。これでは狭いテント内では使い難い。夏用でさえカラー付きが普通になり、温度調整がしにくくなった。極寒地専用のシュラフには是非欲しいが、残念ながら日本ではそれほど寒い場所はない。夏用シュラフにカラーは不要、冬用は取り外し式なら許容できるが、本書で記したように工夫すれば、日本の使用ではカラーのない方が使い勝手がよく、軽い。

高品質な羽毛は、濡れに弱い。あまりに薄い生地は、かえって通気性が悪く、著しく擦れに弱いのでテントの外で干すのさえためられるほどだ。

透湿性の小さい生地を使ったシュラフでは、羽毛が湿ってロフトが小さくなったり、羽毛が凍りやすい。羽毛量が少ない高ロフトの羽毛を使った超軽量シュラフは、湿ると中綿が抜けたかと錯覚するほどペチャンコになってしまう。どちらも日本のような多雨、多湿の地で使うものではないが、時期を選んだ短期山行なら問題ないのだろう。

胸の上にジッパーを持つ、人形タイプの羽毛シュラフも発売されているが、もちろん、入りやすい反面、保温力が落ちる。羽毛もずれやすい。このようなものは、昔、合繊シュラフのスタンダードな形だったが、保温力に優れ掛け布団として使いやすいサイドジッパー式に改められた。昔は、ダウンシュラフにも胸上ジッパー式がいくらでもあった、一種の先祖返りだ。欠点と長所を秤にかけて購入すればいいだろう。

これまで、様々な**羽毛シューズ**を試した事がある。薄手、厚手、底にフォームを入れたもの、何個か自作もした。しかし、フリースのソックスに比べ暖かさが感じられないと本書で書いたが、今でもその理由が分からない。いいフリースソックスは販売されていないので、自作するといいたいだろう。羽毛シューズと同等重量で、遙かに暖かく感じられるものを簡単に自作出来る。その唯一の欠点は、テントの外へそのまま出られないことだ。

ところで、ヴァランドレのシュラフのディファレンシャルカットは、他社とは異なっている。

チューブラーベル "Tubular Bell" 構造といって、単純なディファレンシャルカットではなく、読んで字の如く、断面形状を、予め人が入っている状態を想定した円形リング状にしたものだ。内側の大きさは旧来のものと同じだから、外生地が遙かに大きくシワシワに見える。ヴァランドレのシュラフは、仕立てが悪いからシワシワではない。逆に非常に手が込んだ作りの製品だ。つまり、人が中に入っても、バッフルがストレスなく伸び、十分なロフトが得られるという考えで作られている。普通のものの生地取りは、ほぼ上下に分かれているだけなのに対し、縦方向に何本もの縫い目があるのは、シュラフ断面の形を立体的にする為のものだ。

普通のディファレンシャルカットは、単純に内側の生地を少し小さく作り、それらをバッフル生地で繋いでいるだけだから、外はピンとして見えるが、内側の生地は弛んでシワシワになっている。中に人が入れれば内生地が体にフィットして、全体として、体の周りに必要なロフトを得られるようなサイズにしている、と本書に書いた。

しかしヴァランドレは、体を全く押さえず膨らむように作られているので、体にフィットせず大きすぎるか、小さくて身動きがとれないような気がする。また、真の膨らみは体と側生地周長の差になるから、大きすぎる側生地は無駄なロフトになるだけではないのだろうか。テルモスのような構造は、ちょっと勘違いではないかと思うが、ダウンジャケットを着たまま入ったり、ベースキャンプでゆったり過ごすにはいいかもしれない。また、入り口が細く絞ってないので、入りやすいのは大きな長所だ。

足下サイズは普通のものと同じだから、足下のゆったり感はない。遠征用シュラフ、ベースキャンプ用シュラフの例として表に示した REI デナリーの測定値で分かるように、そのようなシュラフは、胴体の太さは大きいけど足下は普通というものが多い。しかし、ミラのように真直ぐ上を向いてピンと足を閉じて寝るような律儀な人でない限り、胴体の太さは普通でいいから、足下はゆったりしていた方がずっと寝やすく、疲れが取れる。保温力は多少低くなっても、そのメリットの方が遙かに大きいと感じるのは、信仰とは思えない。

以前、生地は Pertex の Microlight (1.3oz/yd^2 、 44g/m^2) を使用していたが、旭化成の生地に変えている。側生地は撥水加工された 37g/m^2 、通気性 $0.6\text{cc/cm}^2/\text{s}$ 、内生地は 40.8g/m^2 、通気性 $0.8\text{cc/cm}^2/\text{s}$ のものだ。撥水加工は、通気性を悪くする事が多い。ご多分に漏れず、このシュラフも、より通気性が低い生地を外側に使っているのだから、外側生地部分で結露が起りやすくなっている。羽毛用生地は、一般的に $3\text{cc/cm}^2/\text{s}$ 以下 ($125\text{Pa} = 1.27\text{gf/cm}^2$ の圧力下)であれば十分だから、もっと通気性の高いものが好ましい。

最近では、**ヨーロッパ規格 EN13537** の、使用推薦温度を表示したシュラフが多くなった。05

年以降ヨーロッパで販売する為には、その認証を受けなければならないからだ。

4段階で表示され、それぞれ；

- ・ Max Comfort (Upper Limit of Comfort) : 男性がフードを閉じず、手を外に出し、ジッパーを開いた状態のシュラフに入り、過度に汗をかかず快適に寝られる温度。
- ・ Comfort : 女性が8時間快適に寝られる温度。
- ・ Lower Comfort (Lower Limit of Comfort) : 男性が8時間快適に寝られる温度。
- ・ Extream : 女性が体幹の温度低下なしで6時間不快ながら寝られる温度。

Max Comfort(本書では Tmax と記した)は、それでも暑ければシュラフから出て、掛けるだけにすればいくらかでも調整可能、Extream(本書では Textream と記した)は、サバイバルといった状況だから普通に使う条件ではない。

そこで、女性が快適に寝られる温度である Comfort(本書では Tcomfort と記した)、男性が快適に寝ることが出来る温度の Lower Comfort(本書では Tlimit と記した)の2つが、シュラフを選ぶ場合、一番の目安になる。女性は男性より寒さに弱いので5 高い温度に設定されている。

認証を取る為のテストは、一つのシュラフ当たり€1500と高価だ。また、以前あった規格は、兵士、若い男性、アウトアマン、マウンテニアラーを対象にしているのに対し、この規格は普通の人を対象にしている。-24 以下の低温は考えられていない。

テストに使うシュラフは、袋から出してよく振り1日おいて十分膨らみが回復したものを使用する。シュラフが湿る一番の原因である発汗の影響は考慮されておらず、テント内のような超多湿状態でもなく、雪も降らない条件の上、全く身動きしないマネキンを使った試験だ。実際の使用では、汗をかき寝返りも打つ人が中に入り、スタッフバッグから湿って半ば凍ったようなシュラフを出し、直ちに使用するような状況だから、このテストでは湿っていても回復力があるタフな羽毛、シュラフかどうかは分からない。自動車の燃費表示程度の信頼性と考えればよいだろう。

シュラフの保温力は、使うマットにも大きく影響される。

風雪に翻弄される狭くて小さいテントの中、不安一杯の状況では相当ゆとりある暖かさのシュラフが必要だが、短期かつすぐに下山出来るような場所なら、勢いが続くから薄いシュラフでも平気で耐えられる。ブランドに対する信仰があればなおさらだ。

厳しい状況で使うシュラフ選びは、それらの点にも留意しなければならない。

羽毛表示法の変化

一般に、シュラフでは立法インチ表示、羽毛布団ではかさ高を cm 表示している。どちらもぴんと来ない表示だから、『シュラフ』の「羽毛の質」の項では、グラム当たりの容量を mL で表してみたが、11 年 4 月 1 日から羽毛布団では、羽毛の品質評価の単位として「かさ高」から「ダウンパワー"dp"」表示に変わった。1g 当たりの容量を、立方センチメートル cm^3 で表している。これは本書で使用した mL と同じだ。シュラフも分かりやすい表示にすべきだろう。

羽毛の品質

最近、900 フィルと表示するものも珍しくなくなった。良く洗い、ダウンの割合を増やせば高く出来ると、各メーカーは解説している。ちなみに、タンポポの綿毛のような一つのダウンは、ダウンボールではなくダウンクラスター "cluster" (房) という。語感的にも、あれをボール "ball" (球) と呼ぶには躊躇する。ダウンボールでは、ダウンを詰め物にした球みたいだ。ダウンクラスター "cluster" (房) の方が感じが出ている。

さて、著しく湿った時や、湿ったまま圧縮収納してまたすぐ開いて使うといった厳しい登山での使用では、そのようなエレガントな羽毛は向いているのだろうかと疑問に思う。未脱脂のウールはしっとり重い感じがするが、濡れに強く、脱脂したウールは柔らかく膨らむが、濡れに弱く耐久性も劣るのではなかったのか。羽毛もウールも同じ動物性だから、同様なのではないのだろうか。ウール製品の経験では、そんな気がしてならない。

その昔、アンドレジャメ(石井系ではヒマルチュリとして販売)のダウン製品には、Henkel 社のオイルトリートメントがされていた。12 年にはセラデザインズが 7 倍長く乾いた状態を保ち 33% 早く乾くという撥水加工したダウン Dri Down を発売し、他社のものにも撥水加工されたものが出てきて、羽毛に撥水性を与え濡れに強くする競争が激しい。13 年にはパタゴニアが分子レベルでシリコーン加工したエンカプシル・ダウンという、撥水性の強いダウンを使ったジャケットをリリース。その加工で羽毛の繊維がしっかりして、ロフトが 25% 上がる、つまり 800 のものを加工して驚異的な 1000 フィルにしたという。ちょっとうさんくさい話だ。Pertex の Endurance という、非常に薄くポリウレタンをコーティングして 1000mm 以下の防水性と高い透湿性を持たせた $0.85\text{oz}/\text{yd}^2$ 、10d、 $30\text{g}/\text{m}^2$ くらいの生地を使っている。標準的な Microlight の $1.3\text{oz}/\text{yd}^2$ 、 $44\text{g}/\text{m}^2$ と比較して擦れに弱く、通気性が悪く、扱いには注意しな

ければならないのは当然だ。加水分解の不安もある。外生地に内側生地より透湿性の悪いものを使うのは、外生地で結露が起りやすくなる点で好ましい事ではない。この 1000 フィルパワージャケットは生地も羽毛も、宣伝通りうまく機能するか興味深い。今でもヤッケの殆どにエントラントを採用しているメーカーだから、日本の多湿状況での使用に合うか心配になる。

撥水性と、親水性や吸湿性は基本的には二律背反の性質だ。ウールは、外皮は疎水性だが内部は親水性、湿度が高くなると外皮のスケールが開き吸湿、しかし外皮は撥水性だから濡れた感じがしない。その良い性能を保つために、脱脂しないウールの方が濡れに強いと言われる。羽毛はタンポポの綿毛のような構造だから、その繊維の細部まで表面が撥水処理されたら吸湿性や透湿性はどうなるのだろうか。そこまでするなら、高弾性率の極細繊維で羽毛類似構造を作れないだろうかと思うくらいだ。洗浄と脱脂を十分してロフトは上がったが、耐湿性や湿潤時の回復力が落ちたのをカバーするため、羽毛に撥水処理をするかと邪推してしまった。

13 年秋から、山岳用品各社は東レと河田フェザーが生産する超撥水性の羽毛クイックスダウン "Quix Down" を採用し始めた。名称が異なっても、明らかにその OEM の商品も多い。撥水加工によりロフトが上がり、濡れにくく乾き易くなり、羽毛の水濡れに弱いといった欠点を解消したという。撥水加工により、羽毛を水に浮かべると未加工のものよりずっと長時間浮かんでいるようだ。この条件に合うような、全く押さえたり潰したりしない条件では水濡れに強そうだ。しかし、実際の羽毛製品は、着ているだけでも、ましてザックを背負ったり、シュラフの中に入ったりすれば相当押さえつけられ潰される。

特許公開番号 2001-123383 に羽毛の撥水・防水加工法がある。これまでも羽毛を樹脂加工して撥水性を高めたり抗菌防臭効果をうたうものもあったが、吸湿・放湿性が低下していたという。しかしこの加工により、嵩高は 7% 程度上がり、水浸漬後の重量増加率は 20% くらい少なくなり、濡れた羽毛を 60 の乾燥炉に入れて乾くまでの時間は、90 分が 65 分あるいは 75 分に短縮している。耐久性、嵩高性、撥水性が高くなったので洗濯しやすくなったとのことだ。従来のように、撥水剤を付ける為に樹脂接着剤を使わないので吸湿・放湿性が落ちないとしているが、理解しにくい。クイックスダウンがこの特許を使用したかどうか知らないが、参考になるデータだろう。

最も羽毛の濡れが問題になるのはシュラフだ。主として、体から出た水蒸気がシュラフの外側生地当たりで結露し、そのままスタッフバッグに押し込められ羽毛が芯までぐしょ濡れになる。そこで、次にスタッフバックから出しても膨らみを回復しないことになる。しかしこの『増補』で公開しているように、そのようにならないための極めて効果的な方法がある。

上記の特許では、水浸漬後に、未加工の羽毛がその重量の 80%の水を吸水保水していたものが、加工後 60%くらいになっている。つまり、加工により吸水保水量が 75%に減少しているから、60 の乾燥炉での乾燥時間は同じく 75%くらいになって当然だ。この程度の差は、合繊綿やフリースと比較すると大した違いではなく、十二分に水を吸っており乾きにくいと思う。羽毛自体の吸湿量はウールと同様ケラチンだから同等のはずだ。テフロンを羽毛組織の細かな部分まで塗布すれば、羽毛自体の吸湿性は少なくなり、発散性も減少する。本質的には羽毛のよい特性をスポイルするが、羽毛表面の撥水加工により羽毛間に水を溜めなくなることとの相乗効果により水浸漬後の水分保持量が 75 %になり、乾燥時間もそれに比例するだけのことだ。画期的かのように宣伝されるが、合繊綿やフリースの吸水性の少なさや乾きやすさと比べれば誤差といってもいいものだと思う。他の撥水加工をした羽毛も、メーカーが公表しているデータからはこの特許のものと大差ない感じだ。撥水性の羽毛を使用して、ユニクロダウンとの差別感を出せても、フリースの代わりとして気楽に使うことが出来ないことだけは確かだろう。

カウチンセーター、アイスランドイクセーター等に使われるウールは、基本的に未脱脂(汚れを取る為以上には脱脂しないこと)、未染色のものが使われ、耐久性、防水性や防寒性が高いと評価されていた。靴下や手袋では、そのようなウールで作られたものが厳しい環境下での性能は圧倒的だと本書で書いた。羽毛も、多少臭ったとしても、出来るだけ自然のままを生かした、洗浄しすぎないもののほうが悪条件下(濡れたままスタッフバッグに詰め込み翌日また出して使うようなことを繰り返す場合)の耐久性そして信頼性が高いと信じたいのは、何でも過去を美化したい老化病に侵された為だろうか。

厳冬期、シュラフの濡れ対策

冬期におけるシュラフの濡れは宿命だが、明らかに効果のある**方法**がある。

冬期小屋に吹雪で閉じ込められていた時、寒さの余り、小屋中に置いてあった薄っぺらな毛布をシュラフの上に掛けた事があった。体から発散した水蒸気は羽毛層を通り、シュラフの外側生地で結露する。その上に合繊の毛布をかけると、側生地に直接寒気が接しないので、外気に接した毛布で水蒸気が結露するのではと考えたのだ。押さえられるので明らかにロフトは減るものの、予想通り毛布は湿り、シュラフの濡れは著しく少なかった。そこで、シュラフの上に掛

ける薄く軽くコンパクトになる合繊毛布のようなものを持参しようと、各種素材を探して試したが今だいいものはない。

ダウンの上に薄いシリコン加工ポリエステル綿を重ねたシュラフが、Sea To Summit から11年に発売された。アイデアは同じだが、綿の層を取り外す事が出来なくては、そのまま置んだら結露した水はダウンに吸収されてしまう、アイデア倒れの製品だ。また、逆ディファレンシャル、内生地が外生地より大きくて、より体をゆったりかつ隙間なく包み込むようにしているが、本書で書いたような適正サイズのディファレンシャルカットの方が合理的かつ軽量だ。頭部だけ逆ディファレンシャルカットはよくあるもので、それはいいだろう。

『シュラフ』では、湿り対策として、まずシュラフを直ちに畳み中の湿気を抜くとよいと書いたが、上記した中学理科レベルの常識を忘れた間違いだった。その間違い蘊蓄を、とある倭式ウルトラライトハイキング教祖が**無断**引用していたのは、申し訳なかったとしか言えない。

さて、シュラフの湿気抜きの方法だが、以前はシュラフ内の湿気が羽毛に吸収される前に抜いてしまおうというエセ科学的手法だった。その方法では、下山後2～3ヶ月は完全に口フトが戻らない。

今の方法は、シュラフの湿気、水分は、殆ど低温側、つまりシュラフの外生地の部分で結露している筈という仮説で始めたものだ。以前のように、直ちに潰して中の湿気を抜くようにすると、一番濡れている外生地と近くの羽毛部分から全体に濡れが散ってしまう。

起きてから、シュラフは出来るだけ押さええない事が肝心だ。そうすれば、濡れは外側生地の当たりに留まったままの筈。具体的には、まずシュラフから上半身を出し、ヤッケを着て、テントの壁面に付いた雪を処理して(15分はかかる)から静かにシュラフを出て、オーバーパンツとインナーブーツを履く。インナーブーツのひもを締めなければ足は温かいままだ。膨らんだままのシュラフはテントの脇に置く。シュラフを出来るだけ潰さないように、テント周辺、足の上に乗せて置いて広げる。そして、湿った、濡れた部分がストーブ側を向くように工夫する。それから、ストーブをつけ食事。

水は前日に作ってある。そして、ストーブからの熱を受ける様にシュラフの位置を調節して干せば、食事が終わる頃にはある程度乾いている。食後も、極弱くストーブをつけ、出発間際に切る。

それから収納。以前のやり方では、スタッフバッグに詰めるとき、手が濡れて冷え切ることが多かったが、現在の方法ではグチャーと水が出てこず、手も冷えない。多少乾いた感じだ。次に

シュラフを出しても、氷ったままだったり、ロフトが失せた状態ではなく、以前よりずっと乾燥してロフトも高く、入っても冷や冷やしなくなった。下山後もあつという間にロフトが戻る。やはり、濡れたままパッキング、氷った状態での移動を繰り返すと、ダウン回復力へのダメージは大きいと分かる。

もちろんこの作法は厳冬期以外不要だろう。

このような使い方をするには、側生地に撥水性がない方がいい。撥水性の高い生地の場合、結露はシュラフ内で起き勝ちだ。側生地の中に水滴が透けて見えたり、縫い糸部分から染みしてくる事から分かる。撥水性が高い生地では、外からの水濡れを少しは防ぐ反面、中からの結露は生地自身を濡らすのではなく生地の内側表面で起こってしまう。厳冬期用ダウンシュラフの側生地は、出来るだけ通気性が良く、親水性のものがベターだと思う。

マット

相変わらず冬は半身のサーマレスト、夏は発泡ポリエチレン製マットを使っている。凸凹しているものは嵩張り、窪みに入った水の処理に困る。それぞれ 720g と 192g だ。これも、新たな製品で実感的に良くなったものはないばかりか、悪くなっている気さえする。軽量化は、フォームの発泡率を高くする事、穴を開ける事、側生地を薄くする事そして面積を小さくする事で行われ、素材を根本的に変えたものではないので、必ず耐久性や保温性の低下とのトレードオフだ。

これまで使用してきたサーマレストの熱抵抗値 "R-value" (クロー値と同じ。m²K/W で表されるので、単位面積当たりの熱抵抗、つまり断熱性あるいは保温性を示す。逆に、熱伝導係数は W/m²K、ワット・毎平方メートル・毎ケルビンで表される。つまり表現が逆になっただけのものだ)を比べてみると、それぞれ半身タイプで；

38mm 厚さのものでは、サーマレスト・スタンダードは 4.0~4.3、680g、生地を滑りにくくしたステイテックは 4.0~4.3 あるいは 4.0~4.7、724g、ガイドライトは始め 2.7~3.5、620g、その後 3.8 に表示が変わった。以前は幅を持った表示かつ毎年多少の変動があったが、ガイドライト以降、01 年から単一数值表記になっている。ガイドライトは切れ目のあるフォームが入っているので、保温力が低いのは当然で、反発力、回復力の低さは冬山向きではなかった。バルブ口を開いてマットを押さえてみると、フォームの反発力の低さがよく分かる。現在のもも山用として販売されているものは、同様に反発力、つまり回復力が明らかに落ちる。フォームの材質

は基本的に最初から同じだから当たり前だろう。穴を開けたり、発泡率を上げているだけだから、保温力、反発力や回復力が落ちる。保温力も前2者に比べ相当落ちるので、殆ど使う事はなかった。いつの間にか、皆、オリジナル・サーマレストの復元力の強さをすっかり忘れてしまった。中が凍結するような条件では、極めて大きな差になる。

25mmタイプは、いくら空気圧を高めても、お尻部分が落ち込み地面に着いて断熱効果がなくなり、使い物にならなかった。薄い発泡ポリエチレンマットよりクッション性が勝っても、一部にコールドスポットが出来るのは致命的欠点だ。表面生地が濡れるので、雨の中での使用にも向かないから夏向きでもない。凸凹のリッジレストは、凹面の谷部に水が入り取れない上、ザック内に入れるには嵩張りすぎるので日本の山向きではない。熱抵抗値は、人が寝た状態ではなく平面と平面の間にマットを置いて熱の移動を測定せざる得ない筈だから、このように実際使用時との乖離が出てくる。

12年に買ったのは40th アニバーサリーだ。4.0、478g。保温力がスタンダードに近く、軽い事に惹かれた。しかし、スタンダードに比べ、保温力も回復力も明らかに劣った。Prolite4の厚さを45mmに増し保温力が上がったようだから購入した。Prolite4は09年にProlite Plusとなり、フォームを改良すると共に、長方形の角を取り、少し丸め、足下に向かって細くして面積を小さくする事により、これまでと同じ重量480gで熱抵抗値を3.2から3.8に上げた。12年には40th アニバーサリーと同じく、さらに丸く足下を絞った形状になり430gになっているようだ。マットは、きちんと寝た状態で最小限必要の形になり合理的かと思えるが、マットの上で寝返りも出来ない、動くときすぐマットからはみ出る。最大の問題は、体が乗らず暖かさが伝わりにくい長辺部の縁は一番凍りやすい場所だという事だ。実質の幅が狭くなっているのだから、逃げ場所がなく、氷が体に触れ冷たい事この上もない。ベッドやマットは、なす型のように丸くなっているより、単純な長方形の方がはるかに使い勝手がいいのではなかろうか。重量減は、明らかに反発性、回復性の低下、使い勝手の悪さと耐久性の低さと引き替えに得られたものだ。生地の厚さ(周辺は上下側生地接着面)は、始め0.47mm、ステイテックも同じだが、上面にざらついた生地が使われ、薄手のウルトラライトは生地も薄くなり0.35mm、40th アニバーサリーも0.35mmだが、底面は極薄くウレタンコーティングされ滑り難くなり、上面はややざらついた生地になっている。単純計算で側重量は3/4になっている。0.47mmの生地の厚さに慣れていると、いつまでも0.35mmの生地の薄さには不安を持ってしまうが、テント内で使うなら問題ないだろう。

冬には、使用につれサーマレストの中は凍り、膨らまなくなってくるが、下山後一番重くなっ

ていたのは 11/12 全山 20 泊 21 日後のプラス 100g だった。3 週間で 100g 水が入った訳だ。サーマレストの内容量は最大で、 $0.038 \times 0.5 \times 1.2 = 0.0228\text{m}^3$ 。マットの表面積は $50 \times 120 = 6000\text{cm}^2$ 。100kg を表面全体均等に載せると 0.017kgf/cm^2 、たったゲージ圧 0.017 気圧で耐えられる。もちろん、人の体は平らでないから、一部に大きな荷重がかかる。しっかり空気を入れても、お尻の部分には加重が集中してマットが潰され寒さを感じる。しかし、ロスも含め 2 気圧分の吐息を入れ(ロスがなければゲージ圧 1 気圧になる)れば、横になって底付きがしない程度の圧力は得られるに違いない。実際の使用でも、口で目一杯しっかり固く空気を入れないと底付きしてしまう。

37 の飽和水蒸気量は 44.1g/m^3 、吐息だけでゲージ圧 1 気圧分の空気を入れるとすると、 $44.1\text{g} \times 0.0228 \times 2 = 2.01\text{g}$ マット内に入る。20 日使用すると 40.2g 増える。実際はその 2 倍程度の水が入るので、半分納得出来る感じだが、自作口金(49g)を使い自転車用携帯ポンプ(Top Peak Mt.rocket CB、121g、手が冷えないカーボンボディー)で空気を入れても内部がしっかり凍る理由は相変わらず全く不明だ。その上、狭いテント内でポンプを使うのは大変窮屈で入れにくいので、暫くで持参しなくなった。

万が一の**パンク修理**には、最近、自転車用ゴム糊不要パッチ式パンク修理シート、パーク GP-2 も持参している。重さはないに等しいが、実際サーマレスト修理に有効かは分からない。自転車のチューブの修理でも、やや不安定なのだ。ゴム糊よりうまくいかない。試した限りでは、サーマレスト生地に極めて強く張り付き、取り外すのが困難なくらいだった。

衣類、製造国と国籍等

パタゴニアの日本支社は 88 年開設され、89 年 10 月には目白に日本直営店を作り、91 年秋からは卸売りも開始した。それまでパタゴニアの製品は、モンベル子会社のベルカディアを通じ 83 年から(89 年春まで)リーズナブルな価格で販売されていた。ベルカディアが OEM 生産もしていた。

パイルジャケットを売り出した頃のパタゴニアは、パイルはアメリカ製、セーターがイングランド製、ラグビージャージがニュージーランド製だ。以後、生産地をベルカディア時代に一部日本製、それ以後、香港製から今に至る中国やエルサルバドル製と変えてきた。ある有名セレクトショップの店長は勘違いして『…設立当時、物作りの生産拠点として日本を選んだ…』(廣沢慶、「BEAMS に学ぶ山姿 連載 5」、『岳人』、09 年 5 月号、63 頁)と、日本製を褒め称えてい

るが、何を勘違いしているのだろう。その他、驚異の勘違いと妄想の連載だった。パタゴニアを、(日本の気候に向く、向かないかはともかく)機能的な衣類であるという実体からではなく、ファッション衣類として伝説を妄想、信じて愛用している人は、日本以外そんなに多くないのではないだろうか。初期のパタゴニア製品は縫い目よれよれで、縫製の品質は他のアメリカブランド衣類同様、劣悪だった。パイルジャケット、クライミングパンツはファッション誌でも取り上げられていたが、舶来信仰の非常に強く貧しい時代だった。今でも、その伝統を脈々と受け継ぐ様はアメリカの植民地、いと悲し。

下請け生産の不安定さの教訓から、モンベルは下請けや OEM 生産を脱却すべく、2+3=5 次産業化を計り、91 年に初の直営店を開き、95 年からは二重価格を止め定価販売にした。その頃には殆どの商品が中国製になって、ファブレス企業化している。以後、小売店に頼らず、基本的に自ら作り、販売するというスタンスに変え成長した。08 年からは小売店でのカタログの頒布も縮小し、直営店と、カタログ販売に軸足を移している。昔オフレコで聞いたが、モンベルは日本でゴア使用量の半分ほど占めていたようだ。だから、特権的にゴアと他の防水透湿性素材をミックスした製品を作っていたのだろう。それにしても、同社の特許は欧米系の名前の方との連名のもを除き、全て単名で取られている。創業者が余程才能のある方が、社内には他に才能のある人がいないのか、会社の封建的体質を示しているのか。

このように、企業は生産の国際分業を進め、日本の消費者も昔のように生産国にこだわらなくなりつつある。グローバル企業はもちろん、多くの企業は国境を浸透膜とし、資本の圧力で賃金の安い国で生産したものを先進国で販売する事により利潤を上げる。双方の国にとっていい結果になってるようだが、同じ人間が住んでいるのに先進国の人間の方が利益を得ている気がする。しかし、大量の安価な商品をふんだんに消費する豊かな生活は、エコからどんどん遠ざかる感じた。先進国では許されない悪い労働環境と、環境基準が甘くて汚染をばらまいて生産するから安く生産出来るだけの筈だ。そのように作られたものは非常に安いので、使い捨てが当然という感覚が身についてしまった。未来のヒトに対して申し訳ない気がするほどだ。今やちよとした企業には国籍も国境もない。人は、国籍でも性別でも人種でもなく、資本家か否かの 2 種類に分類出来るようになったのかもしれない。

85 年には住友ゴムがダンロップのタイヤ部門を買収している。それ以前、71 年から住友ゴムが作っているのに、ダンロップテントと名付けたりするほど両者の関係は深かったが、89 年、日本酸素(現、太陽日酸)が有名な魔法瓶メーカー、サーモスを買収した。

94 年 7 月、日本におけるノースフェイスの商標権を取得したゴールドウィン(韓国での商標

権も持っている)には、経営危機のため 02 年には三井物産の資本が入り、最近では、世界で販売されるノースフェイス製品の 40%を生産する韓国のヤングワン貿易が、12 年 3 月 9 日からゴールドウィンの筆頭株主になっている。

EPI は 94 年から日本製になっている。製造していた Taymar 社が 93 年に Coleman に買収されたが、商標権を持っていたのが幸이었다。以後、Coleman からそっくりな形のガストロブが販売されているのは、そのような事情だ。

ライクラ、コーデュラといった商標で有名な、デュポン社の子会社インビスタは、04 年投資会社を買収されてしまっている。05 年 10 月には、イギリスの有名な繊維メーカー Pertex ブランドの商標及び特許を全て三井物産が取得した。

始めてゴアテックスのトレッキングブーツを作った有名な Danner のラクロス社は、12 年 7 月 6 日、ABC マートが買収した。

米で有名な尾西食品は、12 年 10 月 29 日に防災需要の増加を見込んだ亀田製菓の完全子会社になり、山で普及していた 200g タイプが廃版、お茶碗一杯分 100g タイプのスプーン入りだけになってしまった。

このような例はいくらでもあるのだろう。

アメリカのアウトドアメーカーも所有者がどんどん変わっているが、その一部の例は本書でも書いた筈だ。

小売店も、大きな会社にどんどん買われ、経営者が変わる。

ICI 石井スポーツは、オーナー社長が年齢によるためか、経営に意欲をなくしたのを客だったスキー好きのキョーリンの社長が知り、01 年キョーリンの子会社になった。その後、IBS は西、ICI は東という紳士協定はなくなり、ICI が関西に進出した。

好日山荘は上州屋の傘下に入ったかと思っていたら、次に小杉産業に移り、09 年 2 月、破産しキョーリンの子会社になった。12 年 4 月 4 日には、DRC キャピタルにより「日本で敵対的 TOB が成立した 2 例目」として、その完全子会社になった。ICI と経営者が同じだった頃でも、現場それぞれの店の店長同士は仲が悪く、店自体も競合していたのが不思議だった。

業績の良かった筈の IBS 石井スポーツの社長(ICI 社長の甥)が確か 06 年 1 月 1 日突然亡くなり、婦人も体調を崩し 09 年 9 月に廃業して、驚く事にキョーリン傘下に入った。叔父、甥関係だった 2 大登山用品店の経営者が一つになったのだ。

ICI と IBS が一緒になり、商品のバラエティーが減ってしまったのは残念だ。それぞれ傾向の異なるオリジナル商品の内、IBS のものがなくなってしまったからだ。例えば、シュラフは同じ製造元でほとんど同じデザインだが、ICI はぴったりしていて小さめ、IBS はゆったり

かつ非常に高品質の羽毛を使ったモデルも作っていた。テントも同様、やはりICI はコンパクトで小さめ、IBS はドームテントの入り口部分にポールを1本追加してフライの入り口部を大きく広げたり、ゴアテントの入り口部分だけにフライシートを取り付け快適性や居住性を高めたりしていた。高価なイーストンのポールを採用していたのはIBS だけだった。

登山用品業界も、もはや個人起業家の出幕はないような、成熟した分野になったのかもしれない。

新しい発想で作られたアンダーウェアが、ファイントラックから04年発売された「フラッドラッシュ」だろう。従来の吸水性繊維を使った下着は、繊維自体は疎水性で吸水性はないが、生地
の構造や表面の親水処理により汗を拡散させ、素早く乾燥させようとするものだ。それに対し特許である「フラッドラッシュ」は、繊維の1本1本に撥水処理がされ生地自体も吸水しない。しかし、その上にぴったりした従来の吸水繊維製下着を重ねると、汗は直ちに上の層に移動して、皮膚は常に乾いた状態に保たれるという。そんなにうまく働くのだろうか、能力以上の汗をかい
たらどうなるのだろうか。濡れることが多く寒い沢登りにいいかもしれないが、体を冷やしたい時には困る感じた。汗は体温を下げるために出るのだから、その汗をすぐ皮膚から離せば、その機能
が台無しだ。一度実際使ってみて確認する必要があるようだ。しかし、5レイヤーの重ね
着を推薦しているが、3レイヤーまででなければ使いこなせそうにない気がする。

推薦使用法に反しても、夏のブリーフには「アクティブスキン」ブリーフ(L 寸 28g)が圧倒的に乾きやすく便利だ。しかし、非常に薄い生地にもかかわらずカットが悪くフィット感に欠けるのが残念。夏の雨天の行動でも寒さに震える事がある。そんな時には、「アクティブスキン」ノースリーブ(L 寸 47g)を着用するとグッと温かくなり行動しやすい。軽くて水切れがよく乾きやすく、山シャツの下でも効果を感じる。

試着してみて、エバープレスフオンパンツは魅力的に感じた。200g 程度と非常に軽く、ストレッチ性があるので履いているのを忘れるほどストレスがない。雨具のパンツとしてなら止水ジッパーを許してしまいそうだった。雨具のパンツなら、たとえゴアより透湿性が低くても問題ないと思うからだ。

この会社は、黎明期のモンベルのように新進気鋭のものづくりに挑戦している。殆どの商品を日本で作っているのも好ましい。それでも価格が高いとはいえないから、きちんとしたものを適正な利潤で売ろうとしているに違いない。日本繊維産業壊滅の危機の中、登山界の鎌倉シャツになって欲しいものだ。

現在使用している衣類も多少変わった。例えば、冬のアクションブルオーバーとマウンテンジ

ジョガーだ。アクションプルオーバーは、異常に固い袖口とヘム部のゴムを取り外し、ヘム部を100Mでストレートにし、袖口は柔らかで長いジャージ、ヘロヘロの襟には、防風性の高くシャンとした Windpro Hardface (300g/m²)の二重にした。腰が出る事もなくなり、袖口は脱ぎ着を楽にし、襟は劇的に保温力を上げた。重量はほんの10g未増だ。マウンテンジョガーの後部、腰からお尻の全面にポリエステルペロア地(200g/m²)を裏打ちして、特にテント内で座っている時の冷えがなくなった。30～40gの重量増。100Mで自作(L寸相当、139g)したベストは、寒い冬の行動に重宝している。

夏のパンツは、市販品がごついものばかりになり、ショールーの生地を輸入して自作。アイダーを改造したものとはほぼ同じだ。また、ファイントラックのストームゴージュパンツも使っている。薄いポリエステル100%生地(横にのみ伸縮性)なのにXLで350gと重いのは、こった作りのためだ。濡れにこだわっているにもかかわらず、ウェスト部のゴムは普通の水を吸うもの、ナイロンウェビングも縫い付けられ乾きにくい。それらは、耐水性のゴムに替え、ウェビングは濡れても乾き易く軽い取り外しが出来る靴紐に交換した(オリジナルのウェビングも使用出来るようにした)。ランバーパッドと干渉するお尻のジッパー付きポケット、膝上についた左右ジッパー付きポケット兼空気流通孔も蛇足だから取り外し、279gになった。どのメーカーの登山パンツも、大きなバックル、ジッパースライダーを持ち、重いザックを背負うと体を傷つける事さえある。乾きにくいウェスト部のゴムやウェビングも同様だが、実用性と共に、本質的に軽量化や乾きやすさを考えた衣類はほぼ見当たらない。これで、グツと乾き易く、足捌きが良くなった。撥水性が非常に強い生地だ。しかし、堅い感触の一方向しが伸縮性のない生地だから案外破れやすく、最初の山行で岩に擦れて破れてしまった。耐久性に問題があるポリウレタンを使っていないのは安心。パワーストレッチを使った衣類は、ウレタンが劣化するためかどれも暫くでノビノビになり廃棄処分してしまったが、これは信頼出来そうだ。

本書『衣類』の「糸の太さと布の重量」で説明したように、デニール表示の割に重量は軽くない。各メーカーは限界的デニール数の糸を採用した衣類を次々発売している。生地重量が書かれていない事が多いので、何か革新的な素材が開発されたかのような気にさせるが、そのような事実はない。そして、取り扱いに注意と表示されるのが当たり前になった。そして、引っ張っても破れないだけの強度はあるだろうが、擦れに対しては非常に弱くなっている事を覚えておいた方がよい。豊かな社会になり、以前ほど耐久性が求められる時代になったので、擦れに問題がある素材でも使われるようになったのだろう。極薄地は、羽毛抜けを避ける為、強いカレンダー加工をする必要があり、**通気性が悪く**パリパリしてドレープ性もなく着心地が悪い

くらいだ。薄い生地がしなやかとは限らない。もちろん、最近の衣類の軽さは、生地自体の重量以上にデザイン、各パーツの軽量小型化、つまり使い勝手の悪さと引き替えに得られたものだ。

近年、何にでも使われる**シリコーン防水地**は、スリッピーで擦れに弱い生地だから限定したものにのみ使うべきだろう。ザックは、地面に置いただけで穴があき、背中やショルダーが滑って使いにくい。夏のスタッフバックに使っても**同様だ**。ザックカバーに使うと、ザックを置いた時に滑落させそう。滑りやすいので雪取り用の袋にも向かない。始めて購入したこの生地を使った製品は、トロールのマラソンという大きさの割に非常に高価な山岳マラソン用ザックだった。90年くらいのことだっただろうか。容量は30L程度、237gと、当時としては非常に軽いのでサブザックとして使っていた。それは適所適材の素材で作られ、背中とショルダー部は滑りにくい綿ポリの平織り生地、底は擦れに強い100d強のナイロン地、本体とフタだけシリコーン防水地だった。軽量化だけを考え、使い勝手を無視している商品が多いのでよく考えて購入すべきだ。

除雪用の手袋の手首部分は、ゴアテックス製に変更した(121g/pr)。除雪を続けていると、撥水加工ナイロン地が濡れてくるので、古いゴアのヤッケの袖口を切り取って縫い付け、酷い濡れから解放された。

最後に、本書でも書いたが、(ヨーロッパ系向き)**欧米サイズ**と(アジア系向き)**日本サイズ**の問題だ。欧米サイズは日本サイズより一サイズ小さい表記、欧米サイズM寸が日本サイズL寸と考えれば一応着ることは出来るが、日本サイズのL寸は欧米サイズのM寸として使うことは出来ない。大きく異なる点は、日本サイズは上着であれば裾が短く、パンツはヒップが小さい(股下も短い調整出来るものが多い)ことだ。きちんとどちらのサイズを採用しているか表示してあるものはいいが、相変わらず、併記しただけで実際はどちらのサイズを採用しているか分からないものも多い。欧米サイズと書いてあっても、日本向きに直してあることもある。どちらのサイズを採用しているかきちんと表示して欲しい。このようないい加減な表記を欧米先進国で行えば、リコール問題なり巨額の罰金が処せられる。

パタゴニアは13年春からアジアフィットを発売しているが、それは日本サイズのことだ。

有名なシェラデザインズの60/40マウテンパーカは、90年代初頭、既にアメリカでは廃版になっており、日本向け専用として欧米サイズのまま製造されていたが、04年秋のモデルから日本サイズとなり今でも販売されている。以後、日本サイズときちんと表記している。

防水透湿性素材

ゴアテックスは 07 年秋から 4 種類にランク分けされた。それまでの XCR、Paclite といった素材の構造による分類を、使用状況の厳しさ順に Pro Shell、Performance Shell、Paclite Shell、Soft Shell とした。

Pro Shell は一番厳しい基準をクリアしたものだというのが、基準は公表されていない。裏地がトリコットではなく極薄織物で作った生地は、全て Pro Shell のようだ。2 レイヤーの Pro Shell もある。裏地を極薄織物にする技術を Micro Grid Backpacker Technology と名付け、旧来のトリコットのものは Performance Shell になっている。Performance Shell 以上が、雨具やヤッケとして使われるものだ。実用的に性能は同等だ。Paclite Shell は旧 Paclite のように裏にポリウレタンのドットを貼り付けたものをいう。Wind Stopper はシームテープ加工していないゴアテックスを意味する。

13 年秋に、Pro Shell は防水、防風性はそのまま透湿性が 28% アップ、高い耐摩耗性を持った 40d 以上の生地を使い、専用のシームテープにリップストップの織物裏地を使った Goretex Pro プロダクトとなった。ゴアテックスの防水透湿性の膜は、テフロン多孔質膜に汚れによる防水性の低下を防ぐ為の親水性ウレタン樹脂膜(穴なし)を貼り付けた、卵の卵膜のような白い薄膜だ。剥離したゴアテックスを見るとその薄さがよく分かる。しかし、その樹脂膜により透湿性が低くなる欠点があった。そこでこれまでの複合 2 重構造を、3 層のテフロン多孔質多層構造に変えた。一対のテフロン多孔質膜の間に、薄くて目の細かなテフロン多孔質膜をサンドイッチして透湿性を上げると共に、完全防風性を保ったまま汚れによる防水効果の低下を防いでいる。中間部の目の細かなテフロン多孔質膜は、防風性が高く目の大きな膜より撥水性が高いから、その部分で汚れをシャットアウトする。薄いので透湿性も保たれるはずだ。防風性と透湿性がうまくバランスする厚さと目の細かさのテフロン多孔質膜を挟んだのがミソだ。しかし、経験的にはこの程度の透湿性アップは実感出来ないと思う。完全防水地しかなかった時にゴアテックスによってもたらされた快適性があまりに大きな飛躍だったのと異なり、以後は小さなマイナーチェンジにしか感じられない。でも、耐久性を無視したような薄い生地のもが増えすぎた現状を見ると、耐久性のある厚い生地を使うことは価値がある。しかし、ゴアテックスは今でも完全防風にこだわっているが、日本では多少の通気性があったほうがより透湿性が高くなり快適になるような気がする。ヤッケを使っていると、生地裏に雪が出来ている事が結構あるので、相当透湿性が不足していると思うのだ。親水性ウレタン膜がなくなったので、保水性が少なくな

り多少は雪が出来にくくなっているかもしれないが、

テント用は、09年秋から X Trek という名称になった。表 30d、裏地が 15d 極薄織物のゴアテックスの事だ。難燃性の問題から、テントに使用できない地域、国が多いので、ゴアテックスの名を冠する事を止めたのか、衣類ほどハッキリした効果がないので名前を変えたのか分からない。

基準のハッキリしない分類で混乱しそうだが、どれも何ら基本的には以前のもので変わらない、進歩もない。それでも、名前がお色直しされ、もっともらしい説明があるとそそられてしまうのは、言霊のなせる技かもしれない。

ゴアテックス社の商売についての批判記事が Outside 誌(Mike Kessler, 'insane in the membrane', p.78~120)12年4月号に載った。ざっとまとめてみると、

ゴアの基本特許が 97 年に切れ、その頃までは HyVent、H2No、エントラント等の類似、防水透湿性素材のヒエラルキーのトップにいたが、99 年には BHA 社(2004 年に GE ジェネラルエレクトリック社に買収)が eVent を開発、ゴアより透湿性が高い事を売り物にした、ゴアと同じ ePTFE の商品を出され攻撃的になった。

02 年 eVent を導入したバスクはゴアのライセンスを取り上げられた。

03 年 Lowe はアウターウェアに eVent を採用したが、(ゴア社の圧力か)すぐ止める事に。

05 年スカルパ、ラスポルティバ、ガルモントは OutDry の使用を止めるようゴアから言われる。ガルモントは欧州の展示会に OutDry の商品を出さないよう圧力をかけられた。

08 年 MHW (2004 年コロンビアに買収されている)が OutDry のグローブを発売したら、全てのゴアアクセサリー生産ライセンスを取り上げられた。

08 年 REI が eVent の自社ブランド衣類を発売したら、ゴアアウターウェアのライセンスを取り上げられた等々、、、。

そこで、10 年秋、コロンビア等が欧州委員会にゴアの独占禁止法違反について 50 頁の文書で訴えた。アメリカの連邦取引委員会"FTC"にも、非公的ではあるがいくつかの訴えがあり、11 年春、ゴアに召喚状を出した。どちらも現在は調査中のようなのだ。

ゴアのアウターウェアでの防水透湿性素材のシェアは 70% 以上、今年の売り上げ予定は 3 ビリオン、つまり 30 億ドルというのに。しかし、難しいのは防水透湿性の定義がはっきりしない事だ。(ここまで記事のまとめ)

日本の状況も変化している。ジャパンゴアテックス社は潤工社とゴアテックス社 50% ずつ出資の会社だったが、09 年 9 月 21 日、どんな事情かゴア 100% 出資の子会社になった(11 年 4 月 1 日から、日本ゴア社と改名)。それまで日本では尖ったブーメランのようなロゴが青、その他の国ではロゴが赤だった理由だ。ゴアブーティー、バックライト、マイクログリッドの特許全て日本人の名前、ジャパンゴアテックス社で取られているので、ゴアテックス社におけるジャパンゴアテックス社は特別開発力のある存在だったにもかかわらず、何故潤工社は株式を全てゴア社に売ったのだろうか。余程、他の部門の業績が悪かったのか知るよしもない。

永久補償制度も今は昔だ。何年か前までは、相当くたびれた、長く使ったものでも無条件で交換してくれて驚き感動したものだが、近年はそうではない。相対的に安くなっているし、ゴアテックスへの信頼性も今や盤石だから今更という事だろうか。数年前、永久補償を信じて、古い売れ残りのゴアテックス・エスパースを買った。構造的に今でも一番優れている上、たとえ生地に剥離が起きても永久補償だからと安心して購入したのだ。ゴアテックスの永久補償制度に安心して、色違いのヤッケ等を何枚も持っているおしゃれな登山者は一考を要す事だ。これを奇貨として、学生時代のように、1 枚の雨具兼用ジャケットを使い倒すエコ生活に戻すのもいいだろうが、冬山に耐えるような厚手の生地を使った雨具はもはや存在しない。02 年の秋、春先開業した某アウトレットでは、10 年以上前の某日本ブランドゴアジャケットが定価(当時、普通 20% オフで販売されていた)から 40% 引きで売られていたが、とんでもないと思った。登山用品は普通のアパレルと違い、10 年以上前の在庫でも平気で売られる類のものらしい。ファッションとしてもその程度のもので、機能も 10 年以上前から大差ないと証明しているようだった。

そのような事情を知るにつけ、早くゴアテックスを卒業して、新たな信頼出来る防水透湿性素材を見つけたいと強く思うようになった。

通気性がある防水透湿性生地、GE 社の eVent、モールドンミルズ社の Neo Shell は昔のマイクロテックスと同じく、通気性により透湿性が上がる効用を主張している。ある実験では、ゴアテックスのポリウレタン層が水分を溜めるのに対し、マイクロテックスにはポリウレタン層がなく、通気性もあるので、透湿性も保温性も高いという結果になっている(成瀬信子、「透湿性防水素材に対する考察—ラミネート素材が抜群」、『岳人』、85 年 1 月号、82 ~ 86 頁)。実際の使用下でも、もっと通気性、透湿性があるって欲しいと感じる事が多い。また、一時代前の大き目ヤッケでは、ばたつきで寒さを感じたこともあるから、体にフィットしたばたつかないカットの方が、完全防風性より重要だと分かる。バイク用衣類と同じだ。マイクロテックスが市場から消えたのは、製

品としての信頼性不足だったという。ゴアテックスは、永久補償で信頼性を担保し、時間をかけより信頼出来る製品に改良した感じだ。ちなみにシリコン"Silicone" は、GEが開発したシリコン樹脂の商標名だった。

除染作業で有名になった白い生地、タイベックスは防水透湿性、あるいは防塵性を持つ、デュボンの開発した高密度ポリエチレン不織布だ。様々な種類があるが、テントに使うにはまだしなやかさや耐裂性が不足しているのは『テント』の「生地」で書いたとおりだ。

フリースから極薄手ダウンジャケットへ

99年秋にユニクロから始まったフリースブームは、10年秋からのウルトラライトダウンジャケットに取って代わり収束した。ユニクロがフリースに進出してから、登山用品メーカーは差をつけにくいフリースのラインナップを激減、価格を半減させると同時に、その代わりに極薄ダウンジャケットを防寒衣の中心に据えた。しかし、またもユニクロが同等品質のダウンジャケットを発売した。640フィルのダックダウン、東レ製極薄地を採用した10年モデルからは、数倍の価格の山用極薄ダウンジャケットと重量的にも変わらなくなった。それまでのユニクロダウンは、羽毛抜けを避ける為、あるいは自由に側生地を選ぶ為、羽毛を不織布などのパックに入れ、それを側生地の中に縫い込んでいる。そのため、羽毛製品らしくない重量、固く、通気性が悪いものだったが、登山用と同じ羽毛専用生地を側生地に使い、その中に直接羽毛を封入し、軽く柔らかで本来の羽毛らしい商品になった。このような洗濯に向かない、デリケートな衣類が一般化するとは、豊かな社会になったものだ。

登山用品メーカーは、ユニクロダウンに対抗してか、薄手ダウンジャケットの中綿を合繊綿に変えた、濡れに強いという防寒衣を各社がリリースし始めた。ダウンと同じ価格なのは驚く。ダウンや合繊中綿キルト衣類の生地は、原理的に高密度で通気性が少なく透湿性が悪いので暖かいだろうが、中間衣としては好ましくないと思う。ヒマラヤで使われる専用ダウンスーツでさえ、活発に行動すると暑すぎ、汗をかきその後、体を冷やす(Mike Parsons and Mary B Rose, "Mallory Myths and Mysteries -The Mallory Clothing Replica Project", Mountain Heritage Trust, 06, p.37)という。フリースと比べ、(撥水性)ダウンは濡れに対して極端に弱く、合繊綿キルト衣類は滑りやすく通気性が悪過ぎる、中途半端でひ弱な商品だ。

シンプルなフリース衣類は山用としてはすっかり影を潜め、非常に凝ったものばかりになっている。切り返しが多く、素材も部分により細かく変えられる。バイオミクリーとのキャッチフレーズ

も一般化する前に忘れてしまったが、旧来のフリース生地に匹敵する手触りの暖かい生地はなく、暖かさに対する重量も変わらない。見栄えの新奇性だけが売り物だ。今でもアメリカでは、各種のポーラーテックが売られているので、自作しなければならない時代なのだろうか。あるいは、ユニクロのフリースを改造する他なさそうだ。

防風衣、ヤッケ(ハードシェル)の変化

ヤッケ、最近このような防風衣は、ソフトシェルに対応した言葉としてハードシェルと呼ばれる事も多い。今では、ヤッケと兼用出来る厚手の生地を使った雨具はない。雨具はより薄い生地です、防水性だけを考慮して作られるようになったからだ。デザインの傾向は大きく3段階に変遷している。

最初、フード以外殆ど平面裁断、襟収納フード、袖口ジャージ、縦胸ジッパーで見頃が細くストレートのものだった。今着てみると非常に細くて、バイクウェアとして現在でも通用するデザインだ。

次に、マウンテンパーカのようなシルエットで、見頃が大きくなり、襟収納フード、ウエストで絞り、袖口はベリクロ止め、胸ジッパーは斜めになった。バイクで走るとばたつく感じだ。冬山で寒い事もあった。本書で紹介したヤッケはこのタイプだが、もう使っていない。

最近では、全体に細い上に腕や見頃まで立体的に作られ、袖口を筒状にして脱ぎ着しやすくなり、止水ジッパーと襟にフードを収納しないパーカ型にして軽くなった。パンツと異なり、動きの少ない上着では例え 200g 軽くなっても殆ど感じられないが残念だ。体にぴったり合わないと、細身直線見頃の時代のもののようにきつく感じる事があっても、強風下ではバタつきがなく、ウエスト絞り時代より確実に暖かいと感じられる。

致命的に困るのは 00 年頃から使われ始めた止水ジッパーだ。止水ジッパーは、左右コイル裏、平らなテープの上にポリウレタン樹脂膜を貼り合わせ、ジッパーを閉じると樹脂膜が左右ぴったり密着して防水性を得るのだから、機構上どうしても開閉が固くなる。普通のコイルジッパーの裏を表として使っている。しかし、スライダーに雪が付いたら絶望的に動かなくなる。手が凍えた時や、厚手の手袋での操作は困難な事がある。ジッパー部分が剥き出しだから破損する危険、普通のジッパーにポリウレタンを貼り付けた構造だから、ジッパー部分は堅く曲げにくいのも大きな欠点だ。保存する時に伸ばしておかなければ止水性が台無しになる。ポリウレタン

の色移りにも注意が必要だ。フラップ不要、縫製ではなく溶着出来るので製造コストが安くなり、ジッパーとは思えないフラット感、見た目のスッキリさから何もかもに止水ジッパーが使われる。通気性のある生地で作られた町用ジャケットにさえ、止水ジッパーが使われている。製造者のコスト意識と見かけの新奇性が、機能に大きな欠点のある流行を作り出したのかもしれない。12年初めからは、開閉が少し軽くなったというピスロンタイプの止水ジッパーが本格的に採用されるようになった。普通のピスロンとはエレメントの形が異なるので、従来のもより強度が低いという。その他問題点は、コイルジッパータイプと同じだ。

反対に、最近のオーバーパンツは大幅に重くなった。サイドジッパー、ポケット、エッジガード、内蔵スパッツ等の凝った構造のためだ。余りに重いので、サロペットのようなものも多い。

パンツの動きやすさは、デザイン(太さ)と軽さに大きく依存する。お尻や膝はどこよりも大きく曲がり、特に膝の動かしやすさが非常に大切だ。ヤッケよりはるかに動きやすさが求められるのに、たとえ膝を立体的に作ったとしても、脚捌きが悪いものばかりなのは驚くほどだ。ヤッケの軽量化の努力と宣伝全てを反故にする変化だ。サイドジッパーが止水ジッパーのものはさらに膝を曲げにくい。止水ジッパーを曲げるとその堅さに驚く。曲げた部分は隙間が空くから止水性も心配だ。ヤッケとオーバーパンツはペアで使うものなのに、木を見て森を見ない改良で、トータル重量も使い勝手もかえって悪くなった。

現在、ヤッケはノースフェイスのマウンテンジャケットを使っている。止水ジッパーを使わないまともなものはそれしかなかった。さすがに、78年に日本での販売を始め、94年から日本での商標権を持っているゴールドウィンは、日本での使用をよく心得ている。XLで824g、山用としては蛇足の左右脇下ジッパー(YKK コイル3番)、フリース取り付け用前立て左右ジッパー(YKK ピスロン5番)、左右内ポケットとジッパー(YKK コイル5番)、スノースカートとジッパー(YKK コイル3番)を取り外し、斜め胸ジッパー(YKK コイル5番)と前立てジッパー(YKK ピスロン5番)スライダーの引き紐を、オリジナル極小物(全長20mm弱、1mm径細引きの先に極小プラスチックパーツ)から十分長く実用性のある3mmロープに交換して672g。裏地付きにしては許せる重量だ。これで何とか本物の山ジャケットになった。アウター地は厚手でざらつき気味の2レイヤー、シームテープもニット裏打ちなしの幅狭13mmを採用して、着心地はゴアテックスとは思えないほど柔らかく、ザックも滑らなくて疲れない。冬用には特に、滑りにくい生地が良い。一度使ってから、裏地との間、袖口や裾に溜まった雪を掻き出すために、取り外し縫い付けたスノースカート部の一部をベリクロ化した。側地と裏地の間に出来た雪がテント内で溶け、ジャケットを濡らす事があったからだ。筒袖は脱ぎ着に非常に便利だ。今でも袖

口をゴムで絞ったデザインや、止水ジッパーを使っている日本ブランドは、日本の山での使用状況を知っているとは思えない。どうしようもない欠点は、斜め胸ジッパーだ。非常に使いにくい。前立てジッパー胸の部分の左右に縦にジッパーを取り付けるのが一番使い勝手がよく、ザックとも干渉しない。

燃料と水分発生量

燃料による水蒸気発生量を、自分の頭で考える前にネットで検索、カタログを調べた情報だけで書いてしまったが、燃料が完全燃焼した時の水分発生量は、燃料の分子式から中学生でも簡単に計算出来ることに今頃になって気づいた。

ブタンは C_4H_{10} 分子量 58、完全燃焼すれば水 H_2O 分子量 18 が 5 つ、つまり分子量で 90 発生。1kg のブタンを燃焼させると、1.55kg の水蒸気が発生する。

プロパンは C_3H_8 分子量 44、燃焼すれば水 H_2O 分子量 18 が 4 つ、つまり分子量で 72 が発生し、1kg のプロパンを燃焼させると 1.64kg の水蒸気が発生。

白灯油を $C_{12}H_{26}$ 分子量 170 とすると、燃焼すれば水 H_2O 分子量 18 が 13 ヶ、つまり分子量で 234 が発生する。1kg の白灯油を燃焼させると 1.38kg の水蒸気が生ずる。

ガソリンを C_8H_{18} 分子量 114 とすると、燃焼すればそれから水 H_2O 分子量 18 が 9 つ、つまり分子量で 162。1kg のガソリンを燃焼させると 1.42kg の水蒸気生まれる。

135 頁の『プロパンは 0.31g/kcal、灯油は 0.13g/kcal の水蒸気を発生する。プロパン 1kg、灯油 1L 燃やすと、それぞれ 3.7L、1.4L の水が出来る(『調理器具』の「燃料の比較」の項参照)』は、間違いだった。

ブタン、プロパン、白灯油、ガソリン 1kg 当たりの水蒸気発生量(kg)は、

	ブタン	プロパン	白灯油	ガソリン	
	1.55	1.64	1.38	1.42	kg 水蒸気が発生
白灯油を 1 とすると、	1.12	: 1.19	: 1.00	: 1.03	の比率になる。

白灯油やガソリンの組成は厳密なものではないが、重量当たりの水分発生量は、重量当たりの発生カロリーとほぼ反比例するので、燃料の優劣は、使い勝手で決めればよい。

調理器具、新しいストーブ

今でも冬に EPI の CSSA を使っているのは、ものを大切にする性格だからではなく、それ以上使い勝手のいいストーブが現在も見当たらないからだ。つまみが大きく、かつ火力の微調整が効くので、テント内でちびちび暖房にも便利だ。炎が中央に集中するから効率がよく、必要十分の火力がある。4 本足五徳は安定している等々。

しかし、最近新たな火力調整機構を持ち、極めて安定した火力調整を可能としたストーブが開発された。09 年発売された、SOTO のマイクロレギュレーターストーブ SOD-300 だ。点火装置内蔵は好ましいが、五徳が 3 本足で躊躇していたところ、13 年には 4 本五徳の SOD-310 が発売され、思わず購入してしまった。つまみを 1 周以上回してやっとガスが出てくる点は違和感があるが、火力微調整は CSSA 並に出来、炎も中央集中だ。しかし、高出力ストーブの常、ガス缶と火口の距離をとるため、背が高く不安定な事は問題だ。ブースターも長いものが必要だ。

PC の冷却用として、丸形ヒートパイプが販売されている。直径 6mm のヒートパイプを、保護用の 6063 材 8mm パイプに挿入して曲げ、先端に集熱部を作り、これまでのパワーブースターのヒートパイプと交換するつもりだ。ヒートパイプは、**真空にした銅パイプの中に少量の作動液(水)**を封入した**もの**。銅パイプの一端が加熱されると**中の作動液**が揮発し、温度の低い部分で凝結して熱を放出し、火口の熱を効率的に缶部分に伝える働きをする。パイプ内側はざらついた構造になっており、凝結した液体は毛細管現象でそこを伝えて**再度火口の方に移動する**。**熱伝導率は銅の 100 倍以上、と明記するメーカーがある程効果**が感じられる。**現在使用中の市販ブースターは重量は 87g と十二分に軽く、案外頑丈な感じだ。**

マイクロレギュレーターストーブ一番の売り物は、低温でも火力が落ちない事だという。物理学の限界を超えられる筈もないから、一体どういう仕組みだろう。従来のストーブの火力調整はニードル式だった。ガス通路に円錐形のニードルを出し入れして流量を調整する。EPI は、ニードルの円錐先端に針をつけ、微調整が効くようにしている。

マイクロレギュレーターの火力調整は、LP ガス用調整器をストーブの火力調整に応用したものだ。プロパンボンベは 20 で 8.5kgf/cm^2 (本書に記している絶対値。大気圧を引いたゲージ圧は 7.5kgf/cm^2 つまり 7.5 気圧)だが、それをガス器具で燃焼させるため減圧する装置がレギュレーターだ。気温によりボンベ内圧が変わっても、家庭用ガス器具の場合ゲージ圧で 3.0kPa、 30gf/cm^2 程度に落とす働きをする。特許公開番号 2009-229033 に詳しい説明と図がある。以下、その構造と働きを簡単にまとめてみる。

マイクロレギュレーターストーブは、ガス缶側つまり一次側にあるガス室と火口側の二次ガス室の間にピストン状の弁を持っている。二次ガス室の一方にはピストンがあり、反対側はダイヤフラムになっており、それを外から調整スプリングで押さえている。そして、ピストン弁部の隙間の大きさを、二次ガス室内のカウンタースプリングと、ダイヤフラムを押さえる調整スプリングの力とのバランスで調整して、ピストン弁の開度を変える、つまり二次ガス圧を変え火力を調整する機構だ。つまみを戻した状態では、二次ガス室内のカウンタースプリングがピストンの弁を閉じるように力を加えているので、ガスは出ない。つまみを回すと、調整スプリングが押されダイヤフラムに力を加え、ピストン弁が開いてガスが出る。ここまでは普通の弁と基本的には同じ働きをする。しかし、つまみを触らない状態で一次ガス圧が下がり、隙間からの流量が減ると、ダイヤフラムと調整スプリングの力により、ピストン弁が流路を開く方向に自動的に動き、一定の二次ガス圧にする。ここがミソだ。温度が下がり一次ガス圧が低下しても、ある程度はピストンの隙間が自動的に変わり一定の二次圧にする、つまり同じ火力を保つ事を寒さに強いと表現している。

カウンタースプリングのパネ力でピストン弁が閉じられているから、弁を開くためには、調整スプリングをそれ以上の力で押さなければならない。つまみを回すにつれ調整スプリングは縮まりパネの力が増し、1 周程度回してやっとカウンタースプリングの力に打ち勝ちピストン弁が開く。これまでのストーブとは違う操作性には慣れが必要だ。それから、つまみを回すのに正比例してガス流量が増え、火力が上がる。ニードル式では、機構的にある程度つまみを回すと全開になってしまう。

ニードル式でも、微調整が効く EPI のものなら、一次ガス圧の低下に従ってつまみを開けば火力は落ちない。普通のニードル式は微調整が難しいので、一次ガス圧の低下に対し適切な二次圧力に調整するのが難しい。

つまり、マイクロレギュレーターにより低温まで安定した火力が可能と言っても、使用につれガス缶内の LPG は気化熱で冷やされ、より気化しにくくなり、残った LPG の中にはブタン分が多くなってしまふ。LPG 自体の低温特性以下の温度では全く効果がない点は、これまでの

ものと同じだ。そこで、低温下でキャニスター内のLPGを最後まで効率的に使うためには、これまでのストーブのようにパワーブスターで缶を暖めざるを得ない。そこそこの低温下ではマイクロレギュレーターは安定した火力を維持するのは確かでも、LPGの蒸気圧が極低くなるような気温の時はどうしようもないものだ。ガス缶が冷え内圧が低くなっても、LPGガス自体の低温特性の範囲内では、ある程度はつまみ調整不要で、自動的にガス流出量を一定に出来る、同じ火力を維持するようにしたのがマイクロレギュレーターストーブだ。

ガスの詰め替えに対する注意が、原子力安全・保安院から07年11月6日に『簡易な液化ガス容器への再充てん禁止に係る注意喚起』として出されている。それでも、自己責任で注意して使う他ないのが現状だ。市販されているガスの成分は、安全率を十二分にとられているようで、厳冬期用としてはまだまだ役不足に思う。

09年からEPIの遠征ガスは、190gだけになり、イソブタン60%、プロパン40%になった。大缶の場合、どうしても最後にブタンが残るので、小さな缶だけにしたとの事だが、パワーブスターを使えばそのような事はないのに、残念だ。

ナルゲンは08年から素材をPETに変更したが、今のところポリカーボネイトは安全性に問題があるとは考えられないので、ポリカーボネイト製のボトルが、頑丈で一番信頼出来る。

ポリカーボボトルは、テント内で**自然が呼んだ時には一番安心して使用出来るボトルだ**。13年10月2日にマナスルに登頂した女性お笑い芸人は、そのドキュメンタリー番組でナルゲン1.5L(1Lタイプと同じ太さで背を高くしただけのモデル)にする様を演じて見せたようだが、広口だから女性でも漏斗なしで事が出来るのは長所だ。ナルゲンのキャップも確実に閉まり、口から水が漏れたことはないが、やはりポリカーボボトルのキャップに入っているシリコンゴムパッキンの密着感と安心感を選ぶ。女性は本書で記したような漏斗を作り、肌に当たる面にビニールテープを貼っておく。なお、1.1Lサイズで丸1日は十分だろう。このような使用の為には、キャップ脱落防止のキャップストラップは外しておいた方が使いやすい。テントの壁面びったりに置くと中身が凍りやすいので、離して置いておいた方がよい。

今だ、ネオプレン製のガス缶保温カバーが発売されているとは信じられない。これで本当に21世紀なのだろうか、あまりに理科離れしすぎている。

アルコールランプが倭式ウルトラ派に支持されているようだ。アルコールの発熱量は 7kcal/g くらい、LPG の 60% 程だ。その上、火力調整が難しく、効率よくお湯を沸かせるとは思えない。しかし、ヒト用気分活性燃料として全てのお酒の中で一番軽量なことは、西丸震也が登山用として利用していたことでも明らかだろう。小型ガスストーブは 60g、小型缶 110g に LPG が 110g 入っているものを持てば、2 人が 4 日間使っても十分な量だから、理科の実験をする訳でも、ママゴト遊びをするつもりもないなら、軽量化の考慮対象にもならない。

液燃式ガスストーブは、ガス缶の内圧により液体のままの LPG 燃料を直接供給するので、一般のガスストーブのように使うにつれプロパン成分が少なくなり、火力が落ちるような欠点はない。しかし、だからといって使用時の気温が低くなれば内圧が低くなるので、厳冬期はプロパンの比率の高い LPG が必要だ。LPG の名のように本来、気体だから液体燃料より不安定さは否めないから使うのを躊躇する。火力の微調整がしにくいのも欠点だ。液燃式のガスストーブだった Coleman の Extream X-1 は既に廃番になり、カートリッジも手に入らないので普通のガス缶を使う為のアダプターが発売されている。

食料等

これまで、お湯をかけるだけで食べられるラーメンはチキンラーメンだけの様なものだったが、カップ麺の中身を袋に詰め直して持参する事も出来た。07 年 3 月には、詰め替え用のカップヌードルが発売されそのような無駄もなくなった。シーフード、カレー、チリマトヌードル、カップヌードルしょうゆ、どん兵衛きつねうどん、どん兵衛天ぷらそばがあるようだ。もちろん、コンパクトにしたいなら、さらに潰せばいいだろ。スプーンで食べやすくなる。しかし、乾燥したままの状態でも美味しく食べられるのはチキンラーメンだけかもしれない。

10 年から、MH の FD 食品にも新たなパックが発売されている。カップヌードルのリフィルのように空気を抜いて小さくパックした Pro Pak (包装 13g) だ。オリジナルよりコンパクトだが、中身を潰したほどコンパクトではないので結局どちらも潰せば同じになり、これまでの 2 serve 分がより実感的な 1 serve と表示されていることに注意する必要がある。Pro Pak もリフィルも、包装の四角い角が丸められ他のものを傷つけない配慮がされている。

行動食の量をチョコ、飴、各 6 個から、夏は各 5 個、冬はチョコ 6、飴 5 個に変更したが、

それで十分なようだ。

ところで、以前マッシュポテトを食事に使っていた頃は、マヨネーズと共に野菜チップスをビタミン、ミネラルや繊維質補給の為、利用していた。マッシュポテトに混ぜて食べる。もちろん漬けて持参した。最近、スーパーでもよく見るようになり、おいしさを思い出した。

口が大きい上、ワンタッチ式で保温材が入れられないので、保温力が低かったのがステンレス製テルモスの欠点だった。しかし、サーモスは07年、小さ目で保温材入りの口を持った保温力重視のものを発売した。FEK-500が500mLで320g(カバーなしで290g)、FEK-800の800mLで400g(カバーなしで360g)、これでやっと、以前のガラス製の保温性が得られた。13年10月には、保温性が多少高まりより軽量になって、FFK-500は500mLの280g(カバーなしで260g)、FFK-900が900mLで390g(カバーなしで360g)と進化している。

これまで、薄い素材により軽量化された反面、外力に対して弱くなり、現状の素材を使う限り、さらなる軽量化は難しい。チタン製のものさらには凹みやすかった。『テント』の『ポール』、『調理器具』の『チタンコックフェル』で説明したように、チタンとステンレスの比重はヤング率に比例しているから、ほぼ同じ形状のものを同等剛性で仕上げると、殆ど同じ重量になる。軽くなっているのは、剛性が落ちたことを意味し、凹んで真空層が失われれば保温力が失われる。

今後、さらなる軽量化とコンパクト化は、例えば高ヤング率のカーボンファイバーで外側を補強して、ステンレス板の肉厚を極限まで薄くすると共に、真空部の厚さも可能な限り小さくする事が考えられる。高剛性化により、そのような事が可能となる。傷に対する弱さはあるものの、本体が金属剥き出しでなくなり厳冬期の使い勝手も著しく増す。さらに、キャップの断熱に本体と同じ真空構造を採用、普通の水筒並みのコンパクトさにする。断熱キャップだけは、ガラス製魔法瓶の時代と何ら変わっておらず、非常に嵩張り、保温力のボトルネックだった。そんなものができれば、冬山に是非持参したい。サイズが、普通の同容量水筒に毛が生えた程度の大きさに収まる筈だからだ。

昔の山の食事、FDやレトルト食品のような軽く美味しく日持ちのする食品が普及する前の食事は、必然的にごはんにふりかけやラーメン中心のものなり、10日もすると誰でも手や顔がむくんできた。それでも問題なく動けたつもりだったが、運動能力は相当落ちていたはずだ。反対に、数日なら何ら栄養を考える必要がないことになる。運動をするのだから馬鹿食いを避け、腹に負担をかけない、どんなに疲れても風雨でも食べられ、いざとなったら調理しなくても食べられるものがベターなのは論を待たない。短期山行の方が、スペ粉を食べてまでして山

には行きたくないと言われるのはもっともだ。そんなものを食べる必要は全く無い。

包装の軽量化のため、**真空パック器**を利用している。現在使っているキューパックの素材自身の気密性は凄いが、シール部はどうしても皺がよるので密封性が問題だ。そこで現在は、最初のシールの数 mm 外側を皺の無いように再熱圧着している。それ以後、半年後でも気密状態を保つことができるようになった。

食べたら、最後まで面倒を見る必要がある。「**体重の変化**」で記したように、落とし紙には溶けやすいトレットペーパーを持参するが、丈夫なフレッシュパルプ 100%のもの、手に匂いが付いたり食器を拭いたりする可能性を考え無香料、かつシングルでミシン目入りを使っている。現在使用しているネビアの場合、ミシン目 2 つ分で 450mm、それを半分に折り 225mm に、さらに 2 回折って 56mm になり、幅方向は最初の 114mm を 1 回折り 57mm、つまり 16 重の 56 × 57mm、1.1g になる。それが一拭き分だ。十二単以上である。野外では、予め 1 回分の数プラスアルファをポケットに入れたりして事に及び処理する。もし 1 回に 4 枚使うなら、1 日 4.4g、10 日で 44g、20 日分で 88g になる。

LEDランプ

白色 LED を使ったヘッドランプが開発されてから、電池交換を忘れるほどになった。大きな欠点は、LED の目を刺すように刺激的な光だ。LED ヘッドランプの人が多くなり、行き交う時には本当に眩しい。非常に明るいものが多くなっただけが原因ではなさそうだ。ママチャリに付いている LED ライトは、自動車のヘッドライト以上に刺激的に見える。自動車のヘッドライト、ロービーム並みに光漏れのないような基準が欲しいくらいだ。

電球式ヘッドランプの時代は、コンパクトでも暗い電池 2 本タイプは 2.5V、0.3A の、明るい電池 4 本モデルは 2.5V、0.5A 規格の電球を使っているのが標準だった。LED 時代になり、同じ明るさを得るのに必要な消費電力がほぼ 1/10 になり、コンパクトでかつ非常に明るいランプが多くなった。多くの人が、昔の常識からは信じられないほど明るいランプを使うようになった。登山に必要な明るさの問題は抜きにして、まず刺激的で眩しい光の原因を考えてみる事にしよう。

太陽光や、白熱電球のように高温によって発光するものから出る光は連続スペクトル、つま

り波長の短い所から長い所まで連続して全周波数の光が出ている。太陽光なら紫から赤まで、天気にもよるが平らなまぼこ断面のように、電球では紫から赤方向に向かい直線的に増える形だ。全周波数が平均的に出ている昼間の太陽光では白色に感じられ、紫、青成分が少なく赤方向に行くほど光の強さが増す電球の光は赤っぽく感じられる。

ところで、白色 LED は一般に青色 LED と黄色の蛍光体を組み合わせ、擬似的に白色に感じられるようにしたものだ。青色 LED は、青 460nm に鋭いピークを持つ線スペクトルだ。それに励起された蛍光体が、560nm 当たりに緩いピークを持つ光を、青色ピークの低周波数側の位置から赤色の端までヒトコブラクダのこぶ形のように連続的に出している。一番長波長側、赤色末端では殆どなくなる。それらの光を合わせて白色っぽく感じる。ヒトは全波長がまんべんに出ている光を白色と感じるが、白色 LED は赤成分が少なく、スペクトルは青色に著しいピークがある非常にいびつな形をしている疑似白色だ。その鋭い線スペクトルが目には刺激的に映る原因だろう。小さな部分から発光しているのも、光が刺すように感じられる理由だ。短波長側の青色に顕著なピークがあるので、ガスや霧には散乱して非常に見にくくなる。フォグランプには、赤より波長の短く散乱しやすい黄色(580nm くらい)を使うのは、目の感度が高くて感覚的に一番見やすいからだ。また、赤色成分が少ないので、食べ物美味しく見えない。

対向者ヘッドランプの明るさに幻惑されたか浮気心は止まず、最近でも色々なヘッドランプを買ってはいるが、相変わらずマトリクスを使い続けている。ただ、万が一のスペアとして 07 年からペツルのイーライト(電池込みで 28g)を持参するようになっただけだ。これで、紛失や万が一の故障でも安心になった。

一つの小さなランプに、照射範囲を変えられたり、明るさの調整が出来たり、目を刺激しない赤色 LED が付いていたり、点滅機能が付いているものが普通になった。それを大抵は一つのボタンで操作するから、長押ししたり、ダブルクリックあるいはトリプルクリックしたり、なかなか複雑だ。同じメーカーのものでも、それぞれの操作法に相違があり、タッチ感に大きな違いがあるので複数のものを使用していると操作に迷う事もある。厚手の手袋をはめていたり、手が凍えたら使えないようなものが多いので、ラフな使用にはかえって不便になった。もちろん、電池が非常に持つので、一度スイッチを入れさえすれば、後は何の操作もせず使い続けて問題ないから、大した問題ではないかもしれない。しかし、どんどん機能満載になるのは普通の進化だが、自分の使用目的に合うように改良されるとは限らない。一般登山道を歩くのに必要な明るさと配光が欲しいのに、そのようなものが今のところ見つからず、マトリクスを使い続けざるを得ない状況が続く。

スベアも必要かと考え、ペツル・イーライト(27g/CR-2032、2個込み)を07年に購入して、その後スベアとして持参している。白色ワイド光、スポット赤色、それぞれ強弱と点滅機能が付いている上、防水だ。12年の新モデルは、白色光のカatalog上明るさは増したが大差なく、スポット的だったのがワイド赤色光に変わり、ヘッドバンドが巻き取り式になった。マトリックスの明るさは、白色ワイド光の弱程度だ。

08年購入したブラックダイヤモンドのスポット(54g/電池無し、単4電池3本)は、スポット光とワイド光のモードがあり、それぞれ3段階に光量調整出来る。ホールドスイッチがなく、防水性がないのが欠点だ。マトリックスはワイド光の弱よりやや明るい。スポット光はマトリックス2と同等の明るさだ。

同じ社のギズモ(34g/電池無し、単4電池2本)は09年、そのコンパクトさに惹かれて買ってしまった。ワイド光だけで、強弱の光量に調整出来る。マトリックスはワイド光の弱よりやや明るい。霧雨の中使っていたら、中まで濡れ消灯、山行中は復活しなくなった。日本の山で使用するものには、**防滴性では不足**、防水性が必要だと思う。

翌年は、エナジャイザーのエクストリーム(67g/電池無し、単3電池1本)を、防水性とリチウム電池使用可が魅力で買った。スポット光の無段階調節と赤色光が付いている。マトリックス2くらいの明るさだ。スイッチは極めて押しやすいが、簡単に点灯するのが致命的欠点。本体と電池室別体構造は、名前とは真逆のヤワさに、大電池メーカーのブランドを信じた自らの俗物性が情けない。

性懲りもなく、11年には2つのランプを買った。まず、新型スポット(57g/電池無し、単4電池3本)だ。光量調整が無段階になり、Catalog上の明るさ自体は旧タイプより上だが、余りに配光が異なるので違いをうまく表現出来ない。広いワイド光は、マトリックスより暗く、歩きには使えそうもない。スポット光はマトリックス2と同等の明るさだ。ホールドモードが付いたので、やっと安心して持ち運べるようになった。

もう一つは、ペツルのピクサ3(122g/電池無し、単3電池2本)だ。2個の配光パターンの違う白色LEDを持つ。ワイド光の手元モード、ワイド光に弱いスポット光を加えた歩行モード、遠くを見るためのスポット光の3モードを持ち、防水性もある。本来、工事作業用のランプだから、ワイド光は広く均等な明るさのスポット光といった感じで、真暗闇の作業でも手元全体を昼間のように明るく照らすのが、歩きには周辺が真っ暗になり目眩がする。光の外周部から一気に暗くなる手元モードは、歩きには少々合わない。そこで、散光のためのリングをワイド光LEDレンズの前に貼り付けた所、周辺の闇にスムーズにつながる異次元に歩きやすい配光になった。スポット光はマトリックス2同等だ。押しボタン式ではなく、回転式スイッチはマトリックス同様、確実な操作が出来、本体を裏返して完璧にロック出来る。

ところで、自動車用ヘッドライトのハイビームは、綺麗な形で殆どムラのない配光を持っているのに対し、ヘッドランプのワイド光は、形が歪み、ムラの多い配光だ。その上、車のヘッドライトは、どれもきちんとしているのとは比べ、ヘッドランプはメーカーにより、モデルにより歪みやムラ具合が全く異なる。同じモデルでさえ、多少違う。持っているものの中で唯一、均一で綺麗な配光なのはピクサ3のワイド光(自作散光リング取り付け後も含め)と、限界の明るさがマトリックスだけだ。それは、ヘッドランプとして特筆すべき、ムラがなく均質で綺麗な形の配光パターンを持っている。ピクサ3の歩行モードは、手元モード光の丸い光の中、前方部分に、小さなスポット光を加えたもの。手元モードに進行方向が明るくなるので、ルートを探しつつ歩かなければならない時には良さそうだ。でも、そのような時には、スポットにすればいいのだから、不要なモードかもしれない。

自転車用のLEDライトは、ヘッドランプのスポット光よりさらにスポット的に、その部分内だけ明るく照らす。ヘッドランプは、スポット光でもワイド光でも、歩きに向いたよい配光が今だけはっきりしないようだ。モデルにより、メーカーにより全く異なる。スポット光では、明るい部分が広すぎるばかりか周辺まで光が漏れるので、対向者のランプが眩しくて仕方ない。明るくするなら、車のヘッドライトのように外への光漏れを少なくする工夫をすべきだろう。今の大光量ヘッドランプは、人と行き違う時は弱にするか、人のいない原野で使うものだ。

12年にはブラックダイヤモンドのストーム(62g/電池無し、単4電池4本)を、防水性に惹かれて入手した。機能は新スポットとほぼ同じ。イーライト新型も買った。

電球の明るさは、W表示や、ヘッドランプではボルトVとアンペアA表示で、ほぼ正確にその明るさを想像出来た。蛍光灯は別物と受け止められていた。しかし、LEDの照明器具が普及するようになり、旧来のW表示では、その明るさをイメージすることが難しくなった。また、LED照明は、これまでになく照射範囲が狭いので、明るさが以前のものと比較しにくい。初期の高輝度LEDは、1Wというように表示されていた。

そこで、ルーメンlmという光束の単位、つまり光量を表す単位が使われるようになった。これまでも室内の明るさは、使用する照明器具のW数ではなく、使用面での明るさを示すルクスluxで表されていた。ルクスluxは照度の単位、つまり実際の明るさを示す。単位面積当たりの光束を意味し、ルクスluxは、 1m^2 当たりのルーメンlmになる。 $1\text{lux} = 1\text{lm}/\text{m}^2$ だ。同じルーメンでも、そこからの距離によりルクスが異なる。自転車や自動車のライトの表示には、カンデラcdという光度の単位、つまり光の強度を示す単位が使われる。ある方向をどれ程明る

く照らすか、分かりやすく表示したものだ。

ルーメン lm 表示は、登山用ヘッドランプでも 07 年くらいから目にするようになった。先述したものでは、イーライト、旧 16 lm、新 26 lm、新スポットのスポット光 75 lm、ワイド光 16 lm、エクストリームは 60 lm、ストームのスポット光 100 lm、ワイド光 25 lm、ピクサ 3 のワイド光 30 lm スポット光は 50 lm。マトリックス 2、旧スポットとエクストリームの高輝度 LED はどれも 1 W となっていた。

それらを比較して、ワイド光でもスポット光でも、表示ルーメン、光量の違いは感覚的に大して感じられず、それ以上に各ランプで著しく異なる配光パターンが問題だと改めて分かった。人間の感覚は正比例的ではなく、対数的なのかもしれない。

一般登山道での使いやすさは、明るさよりはるかに配光の方が大切だ。歩くのに必要最小限の明るさで前方を照らし、周辺の闇とシームレスにつながる配光は、今でもマトリックス以外無い。明るくスポット的に照らすものは、その部分しか見えないので大変疲れる。ワイド光部分に散光リングを貼り付けたピクサ 3 はずっと明るくていいが、電池の消耗ははるかに凄い。強力なスポット光も付いていて便利なこともあるから魅力的だが、電池の持ちが悪く、不安定なヘッドバンドのため、まだ本番では使う気になれない。多くのヘッドランプのワイド光は、嫌に横方向に光が広がる割に進行方向の光が弱かったり、ムラがあったりして使いにくい。スポット光も、それぞれ配光は大きく異なり、一体どれが使いやすいのか判断出来ない。同じルーメンでも、配光が異なると光の強さカンデラが大きく異なるので、何を求めるかによって必要な配光のものを選ぶ必要がある。スポット光はあれば便利と思うが、どんな配光がいいのだろうか。

ところで、マトリックス、ストームとピクサ 3 は定電圧回路を持ち、一定の光量を長時間保つようになっている。それで、2 本あるいは 4 本の電池で使うことが出来る。しかし、マトリックス以外は明らかに光量がじわじわ落ちていく。例えば、ピクサ 3 がサバイバルモードになる暫く前には、マトリックスより暗い程度の明るさになってしまうから、実用的に安定した明るさを保つ時間は思いの外短い。最低限の明るさながら、一定の光量を長い時間安定して出すのがマトリックスの比類ない美德だろう。

白色 LED の動作電圧は 3.7V 位だから、ヘッドランプには乾電池を 3 本使用するものが多い。 $1.5 \times 3 = 4.5V$ 、終止電圧を 1.0V とすればその時 3.0V、その平均電圧を 3.75V としているからだ。電球の場合と同様だろう。

エクストリームとギズモは単純な昇圧回路を持っているだけだから、電池 3 本使用のものと同じように、使用につれ明るさがだんだら落ちていく。

マトリックスは PFM 方式 "Pulse Frequency Modulation" パルス周波数変調(パルスの幅は同じで、周波数を変えることにより電圧を制御する方式)の定電圧回路で、最後までほぼ一定の光量を保つ。ピクサは PWM 方式 "Pulse Width Modulation" パルス幅変調 (一定の周波数(この場合 310Hz)を使い、パルスの幅を変えて電圧を制御する方式) の定電圧回路を持ち、電池残量が少なくなるとサバイバルモードになり 10 時間程度照射する。サバイバルモードになるまでの時間が、マトリックスと比べものにならないほど短く、サバイバルモードは**マトリックスより遙かに暗く、歩行用をずっと暗くした明るさだ**。ストームはどんな回路が表示していないが、電池残量が 75%になるまで一定の光量を保ち、それ以後の光量はだら下がりという。案外、一定光量で使える時間は短い。マトリックスのように、最後の数時間だけ徐々に暗くなるようなランプに慣れてしまうと、どうも使い勝手が悪い。**一定の明るさを保つための電子制御機能を持っている大光量の LED ランプは、消費電流も大きいので電池の容量が相当残っている状態で突然消灯する。そのような危険を避ける為、敢えて容量がある程度を切ったと判断された時点から光量をグッと下げたり、電子制御を解除するのだろう。**

電球同様、LED でも、必要以上の電圧をかけると寿命が短くなる。しかし、乾電池 3 本タイプでもリチウム電池を使用出来るように対策したものも多くなった。ベツルでは 09 年モデルからだが、その他次々新モデルをリリースして、今や LED ランプ界でカッティングエッジ・カンパニーだ。ストームもリチウム電池を使用出来る。

購入時の注意は、まず頭に付けた時、光が目に入ってしまうような薄い本体、透明な本体のものも避ける事だ。霧が結露してレンズから垂れると、水滴が光り一層眩しい。そのような LED ランプでは帽子の上から付けるとよい。マトリックス、コンパクトながら奥まった所に LED が位置するイーライト、それにピクサ 3 以外は全て問題。それらのヘッドランプは、物理的に光の広がる範囲が限定されるので、対向者の目を多少でも刺激しにくい。

初期の白色 LED は、前面が丸いレンズ状になった透明なエポキシ樹脂製砲弾型で、中の小さな発光部には反射板がつけられている。これは、そのまま使うことが出来る。また、初期の高出力 LED は、剥き出しの LED 基盤周囲を大きな深絞りの反射鏡で覆って光りを集める構造のもので、嵩張っていた。今では LED 基盤のすぐ上に、小さな一体式のレンズを重ねて必要な配光を得る**方式**となり、非常にコンパクトになった。エクストリーム、新スポット、ストリーム、ピクサ 3 は、そのようなレンズを使っている。一つの革新だ。自転車用ライトでは、光の漏れが目障りとして、LED を後に向け反射鏡とレンズで光を集中して出すタイプが発売され、明るく路面を照らす為、不要な部分への光は以前より綺麗にカットされている。自動車のヘッドライトのロービーム程ではないが、不要部分への光漏れが少ない。余りに明るいヘッドラン

プが多くなり、そろそろ光漏れ対策を考えなければならない感じだ。しかし、そのような配光は歩きには向かないので、テンポラリーに使うスポット光に留めるべきだろう。普通の歩き用ヘッドランプに、探索用スポット光のような明るさは不要であり傍迷惑だ。

このような、まだ新しい製品の場合は特に、毎年毎年新製品が発売され、よほど自分の必要機能を把握し総合的に判断して禁欲しない限り、物欲地獄の中で苦しみつつ、昔がよかったと懐かしんだりする羽目になる。そのような試行錯誤が面白いのは、貧しさの証左だろうか。

最後に、登山用として理想的なヘッドランプは、マトリックス程度の明るさとブロードな配光を持つ白色光、やや強いブロード白色光、フォグランプとしてイエローの強力スポット光、それに天場あるいはテント内用の目を刺激しない弱い赤色のブロード光を持ち、それぞれ最後まで一定の光量を保つものだ。スイッチは、押しボタン式でなく、ダブルクリック等もない、誤操作がなく悪条件下で使いやすい単純な回転式、モード切替と電源はそれぞれ別、そんなタフなヘッドランプが欲しい。もちろんラフにパッキングしても誤作動しない電源スイッチ。電池は単 3 が 1 本まで使用可能であれば、容量の割に軽く電池のロスも少なく、電池交換も楽だ。せいぜい 2 本までが便利で、たとえ単 4 電池でも 3 本では入れ替えが面倒。

日本のような多湿、多雨の気候では、ヘッドランプには防水性が必須だ。また、バンド部にも水を吸わないものが望ましい。バンドには、しばしば逆に肌さわりのよい吸湿性のある素材で作られ、一旦濡れると何時までも乾かず、長期山行向きではない。重くてフィット感が悪いゴム製の必要はなく、パンツ用の内蔵ゴムバンドに使う吸水性のないベルトがベターだ。マトリックスのバンドをパンツ用 30mm 幅のものに替えたら、フィット感に大差無く 15g 軽くて、嵩も小さくはるかに使い勝手がよかった。

天気情報の入手とワンセグラジオ、電池等

アナログ TV が 11 年 7 月 24 日正午終了して、TV は地上デジタル放送、地デジに完全移行した。FM ラジオで TV 音声を聞けなくなり、視聴覚障害者から情報を得られなくなるとの危惧の声が上がったが、無視されたようだ。障害者の権利保護がこれほど一顧だにされなかった事例は、近頃珍しい。携帯のワンセグ TV は、電池を消耗し、安定した受信が出来ないといい。携帯のワンセグ機能を使えば画像も見えるが、アナログ TV よりはるかに電波が届きにくいのではどうしようもない。雑音はないが、突然切れるのもデジタル特有だ。山では、説明

の分かりやすいTVの天気情報を聞きにくくなったことだけは確かだろう。

コンパクトなワンセグラジオが発売されたのは、12年の秋も深まった頃だ。ソニー XDR-63 TV(本体 67g、アンテナ 5g、イヤホン 6g/電池無し、単 4 電池 2 本)、カードサイズラジオより一回り大きく、アンテナも、イヤホンも別体になっている。一時代前の携帯より大きなアンテナを取り付けないとワンセグを受信出来ない。アナログ時代のTVより安定して受信出来ず、恐ろしく電池を消耗するので、さすがに山に持参する気にはならなかった。初期のデジタル選局ラジオは非常に電池を消耗したが、今ではアナログ選局ラジオ並みになっているのに一体どうなっているのだろうか。これまでのポケットサイズラジオと操作性が全く異なり、今でも操作に戸惑うことがある。基本的に同じ用途のものだから、同じにすべきだ。今後は、面倒だが、昔のように天気図をとらなければいけないかもしれない。ちなみに、天気図を見るにはワンセグ画面で十分だ。

そこで急遽購入したのは、08年から発売されている山用ポケットラジオ、ソニー ICF-R100 MT(本体 60g/電池無し、単 4 電池 1 本)だ。山ラジオと言っても、防水でも、耐衝撃性に優れる訳でもなく、非常に頑丈なケース(89g)が付属しているだけだから、勘違い商品とっていた。また、TVが受信出来ないから買う気にもならなかった。しかし、各山域毎に、受信出来る局が予めプリセットされ、電池の持ちも使い勝手も非常によい。主要な局が受信出来なくても中継局を簡単に受信出来るので便利だ。場所によりプリセットされていない局でもよく入るものがあったが、地デジ時代になり旧来のポケットラジオより使いやすい感じた。AMでは、エリアにかかわらず1チャンネルはNHK第1、2チャンネルにはNHK第2、FMでは、同じく1チャンネルにNHKが記憶されているので分かりやすい。

12年から、平日の13:17頃から放送していたNHKの「お天気耳より情報」は、月曜日と金曜日だけになり、夏には本当に天気情報から取り残された感じになる。冬は出発時間が遅く、NHKで5時くらいから15分置きに出される天気情報を聞けるからまだまだが、TVの天気情報に頼り切っていたつけが回ってきたようだ。本気で、また天気図を描く練習をしなければならぬ。

それにしてもデジタルには抜けた所がある。地デジはアナログTVの数秒遅れ、ワンセグTVはさらに数秒遅れる。その内部処理の多さが、電池消耗の原因なのだろうか。

97年に購入したICレコーダー(ソニー ICD-70)の電池寿命は、2週間置いておくだけで消費してしまい驚いたが、現在のICレコーダーはマイクロカセットレコーダーを遙かに超える

電池寿命と録音時間を持っている。あまりに長時間録音出来るので、PCと繋いで、ファイル名をきちんと付け直しておかなければ後から検索出来ないほどだ。

このように、製品が高機能化しても電子回路が省電力化され、電池の持ちが大きく改善されたものも多い。

80年代初頭、ヒマラヤアタック用として-30℃でも使える専用のリチウム電池が初めてヘッドランプやトランシーバー用に使われたが、80年代中旬のオートフォーカスカメラの時代になり消費電力が多くなって、エネルギー密度が高い規格化された**リチウム電池**が一般化し、92年には単3型も発売され、電池の性能向上、低温特性、大容量化と軽量化が著しかった。マニュアルフォーカス時代なら、焦点調整やフィルムの給送に電気は必要なかったが、オートフォーカスになり、それら全ての機能が電気力でなされるように、さらにデジカメの時代になるとフィルム時代に比べ、現像からライトボックスまで含んだ一層多くの機能が電子回路によって動かされ、より電力を消費するようになった。そこで、**リチウムイオン充電電池**を採用するものが多くなった。メモリー効果がなく軽量だ。しかし、しばしば報道されるように、エネルギー密度が高いリチウムイオン充電電池は、発火等トラブルで何百万個もリコールになることがある。そのような危険性のあるものだから、以前からリチウム電池を海外から個人輸入することが出来なかった。2008年から、リチウム電池は手荷物として機内に持ち込むことは可能だが、受託手荷物として受け入れられなくなっている。なおリチウムイオン充電電池以降、さらなる高エネルギー密度の電池は開発されていないので、電力消費量の多いスマホの電池の持ちが非常に悪くなってしまった。電池の性能が電子機器、IT機器のボトルネックになっている。

リチウム電池の頃は、各社とも規格化されたものを使っていたが、リチウムイオン充電電池は各社がそれぞれ専用のものを使い、それは数百種類以上にも及び、それぞれは殆ど互換性を持たない。プリンターの消耗品ビジネス同様、それら充電電池は非常に高価だから互換バッテリーという不思議な商売も成立している有様だ。小型化、デザインの自由さの為に専用電池はいいかもしれない。カメラを買い換える度、新たな充電電池を買わなければならないのは不便極まりない。充電器もそれぞれにあり互換性がないばかりか、充電中を表示する**統一規格**もなく、手持ちのものでは、あるものは黄あるいは赤、または緑の点滅、緑、青が充電中を意味し、充電完了の知らせは、順番に消灯、緑、緑点灯、消灯、消灯と、分かり難いことこの上ない。

消費電力の大きい機器が多くなり、**エネルーブ**(ニッケル水素充電電池のブランド)の普及も著しい。ニカド充電電池は、アルカリやマンガンのような一次電池と比べ遙かに低温特性はいい(-20℃で電解液が凍結)が、リチウム電池よりずっと低温特性が悪く、自己放電が多く保存に

向かなかった。また、ニカド電池は残量がある内に継ぎ足し充電すると次第に容量が少なくなるメモリー効果があり、使いにくいものだった。リチウムイオン充電電池の低温特性はニカド充電電池より少しよい。アルカリやマンガンは、氷点下では殆ど使えなくなるが、エネルーブは-10 近くまではそこそこ使え、リチウムイオン充電電池は-20 では相当弱くなるものの、使用機器に対し大容量のもの(カメラ本体の耐寒性を無視した話だが、デジカメの場合、撮影可能枚数が大きい事、つまり最低 500 枚程度以上)を使えばある程度実用になる感じだ。リチウム電池はその程度の温度では全く問題ない。

エネルーブは継ぎ足し充電しても容量が落ちない使い勝手の良さと、保存性の良さを持っているので広く普及した。低温特性はニカドと同等だ。エネルーブ単 3 は 05 年発売され(1 年目 85%、3 年目 75%の容量に)、06 年には単 4 タイプが、09 年には充電可能回数がこれまでの 1.5 倍、1500 回(1 年目 90%、3 年目 80%、5 年目 70%の容量)に、11 年には充電可能回数が 1800 回に改善されている。そして 11 年には大容量タイプの**エネルーブプロ**も発売され(充電可能回数は 500 回)、12 年には単 4 タイプ追加され、単 3 タイプの容量は 50 mAh 増えた。

アルカリより大電流の放電時では持続時間が長い、ラジオや時計のような低電流の機器では持続時間が短くなる。エネルーブプロはさらに大電流消費機器に強いが、低電流での使用ではまだアルカリにかなわない。エネルーブ単 3 も重い、エネルーブプロ単 3 はそれ以上に重いのが登山用としての欠点だ。

電池容量は、同一タイプの電池の場合に一定の選択基準にはなるが、負荷電流により大に異なる点に留意しなければならない。また、電池のタイプによって特性が大きく相違するので種類の違う電池の単純な比較はできない。そこで電池の選択は、容量に加え、重量、低温特性等を加味した上、目的に合ったものを選ぶ必要がある。

これらのデータは 10 ヶの平均であり、個体毎に相当異なる。以下は 0.05g の精度の秤で測ったが、『その他』の「乾電池、ヘッドランプ」の項のデータは 1g の精度のもので測り、同じく 10 ヶの平均を取ったものだ。それで十二分な程、個体差が大きい。

		重量(g)	容量(mAh)	公称電圧(V)
エネルギー	単 3	25.8	1900	1.2
エネルギー	単 4	11.7	750	1.2
エネルギープロ	単 3	29.9	2450	1.2
エネルギープロ	単 4	12.4	900	1.2

カメラ

カメラ付き携帯やスマートホンの普及につれ、デジタルカメラ(以下、デジカメ)の販売台数は10年をピークに落ちている。カメラ付き携帯やスマホの影響だろうか。コンパクトデジカメは極小固体撮像素子を使っている。初期の使用目的の多くはTVカメラの撮像管の代わりだったので、縦横比はTVと同じで、大きさの表示も撮像管を踏襲した。そのような極小撮像素子のカメラだから、カメラ機能を携帯やスマホに組み込むことが出来る。フィルム時代のコンパクトカメラの多くが、大きな一眼レフカメラと同じフィルムサイズを持っていたのと大きな違いだ。価格の劇的低下は電子機器の常、初期の撮像素子は、画素数も少なく小さなものでも非常に高価で、それを採用する他なかった。そうすれば、レンズも本体も全て小さく出来る。始めはアナログテレビ並みの画質だったものが、技術が進歩し、画素数だけなら大伸ばしでも十分な画素数になり、フィルム時代並みの高感度特性さえ持つようになった。そのようなコンパクトデジカメにも、スマホ等の影響で、やっと大きな撮像素子を採用するものが発売され始めた。極小撮像素子の長所は、非常に深い焦点深度、つまりピンホールカメラ的に前方から奥までピントが合うことだったが、撮像素子が大きくなると、フィルムカメラの頃の焦点深度、ぼけ感を得られる。ラティチュードがフィルムのように広くなるのも魅力だ。小さな撮像素子では、すぐ白飛びしてしまう。

しかし、山で使うには、どれも昔より操作系が細かく、小さくて面倒だ。コンパクトデジカメは防水のものでさえ、操作系が小さすぎる。一眼レフタイプはそれに加え、重すぎ大きすぎる。記録メディアに数百枚は楽に保存出来るので、フィルム装填の面倒はなくなり、電池交換は、フィルム交換の頻度より少なくて済む。コンパクトタイプには防水タイプがいくらかもあるし、一眼レフタイプでも防滴性を持つものが多くなり食指が伸びるが、やはりまだ重いし、、、と躊躇の日々でここまで来てしまった。

07年から、リコーの500G Wide(本体400g/電池なし、2GBのSDカード2g、DB-43電池43g、06年発売)、DW-5ワイドコンバーター(56g)を使い続け、1万枚は写してプリントに

した。防水だから、電池と記録メディア交換以外はどんなに濡れても、レンズ前面の濡れを拭えば使用可能だ。-10 まで動作が保証され、衝撃にも強い。名機として有名な GR デジタルと同じ撮像素子を使っているから、GX-8と同じレンズを使っている、はるかに写りはいい。基本的な操作は、GX-8と同じく非常に使いやすい。大きくゆとりのある光学系を採用しているためか、画質は最周辺まで安定している。高感度に弱く、画面がざらつき気味なのはリコーの特徴だが、画像処理してぬっぺりとした画像、塗り絵のような感じは一切なく、他のコンパクトデジカメより嫌みはないことが今でも使い続けている大きな理由だ。手振れ防止機構もないが、デジカメとしては異例の大きさのためか(LXに薄型レンズを付けた状態よりやや小さいくらい)ホールドしやすく、数分の1まで手振れなしで写すことが出来る。工事用カメラだから、操作系が大きく、オーバー手をはめていても確実に操作可能だ。夏には電池3ヶ、冬は5ヶ持参して、500～600枚写せ、万が一の時は、単3電池2本で作動するのも安心だ。厳冬期は新品のリチウムイオン充電電池を入れてもすぐドロップすることがあるが、単3リチウム電池を入れて使うことも出来るので問題ない。後継機は、普通のアウトドア防水カメラのような屈折式光学系を持ち、レンズの出っ張りがなくなりフラット化、大きさが半減したが、操作系まで小さくなり、屈折光学系のため画質が非常に落ちた。画質には、今でも大いに不満だが、基本的には記録のためのカメラと割り切り、それからカメラ道楽はなりを潜めている。

この程度のカメラの大きさ、ボタンの大きさでやっと冬の手袋をはめたままでも操作出来る限界だ。これも使い続けている理由だ。現状全てのコンパクトデジカメは、小さすぎ、ボタンが小さく、ボタンを避けてホールドすることが難しいくらいだ。

それ以後は、非常にコンパクトで夜景に強いソニー DSC-WX1(電池込み 150g)を 09 年に、11 年にはコンパクトデジカメの割には大きい写りがいい(しかし、一部塗り絵のような部分がある)オリンパス XZ-1(電池込み 275g)を、12 年にマイクロフォーサーズのミラーレスカメラ、パナソニックの G3(電池込み本体 370g)、標準ズーム、望遠ズーム、薄型標準レンズ LUMIX GX VARIO PZ 14-42mm/F3.5-5.6 (95g)と超広角ズーム LUMIX G VARIO 7-14mm/F4.0 (300g)を買っただけだ。どれも、操作系が小さすぎ、防水性も一切ないので山用ではない。山向き、つまり防水性があり、操作系が大きく、軽量なカメラは開発されるのだろうか。どのデジカメも、フィルムカメラ時代より信頼性は落ちるが、ジャケットへも入れられるコンパクトさを生かして使えば、面白い写真が撮れるかもしれない。スマホの写真のように、これまで写せなかった場面や状況で写すことが出来る。

ところで、それら無駄使いで、日本のものづくりの劣化を感じさせる事を経験した。大きな赤

字を出し続けているパナソニックの製品で起こった事だ。初期不良が多くなったのは、どのメーカーもだが、案の定、レンズ 2 本に片ぼけがあった。普通はすぐ新品交換だが、修理するという。県内に一つしかないサービスステーションに連絡すると、元払いで送ってくれとのこと。返送は着払いだ。交渉を重ね、何とかサービス部門の人が巡回する日に回収してもらうことにしてホッとしたものの、いつまでたっても修理完了の連絡がない。痺れを切らし 4 ヶ月後に問い合わせると、改めて連絡するとのこと。連絡が来たのはその 3 ヶ月後だった。使いたいレンズは問題なかったので、催促しなかった。異常がなかったとして 1 週間後に戻ってきた。デジタル時代は、何枚も条件を変え撮影して等倍チェック出来る。ネット上にも、レンズの画質を詳細に調べて公表しているサイトが多くあるから、比較は簡単だ。しかし、指摘した点に関して、修理明細書には『症状未再現の為、ご返却させていただきます。』だけだ。このレンズは、これで規格内の性能ですとの説明なら理解出来るが、あまりに大会社になって身動きが取れなくなっているのか、まともに修理部門や消費者サービスが機能しない、昔の役所みたいな対応には憤りを感じた。そこでパナソニックに、以後このような事が起こらないようにと改善の申し入れをした。クレーマーと思われまいよう、内容には細心の注意を払った手紙を送った。1 週間後、サービス部門の最高責任者らしき人から、核心部には答えず一部についてのみ謝罪したような文書が届いた。再度、返事は不要だから、改善希望の文書を送ると、その方から直接、数度電話連絡があり、ななな何と、直接、事情説明に伺いたいとの事、断るのに困った。何も、情緒的に謝罪せよとは全く言ってない。今後、迅速な修理と、道理のある説明をするよう希望を出しただけだ。今の時代でも、筋道を立ててきちんと説明、対処出来ず、浪花節的に処理しようとする体質が、あの大会社に残っていたとは大発見だった。会社存亡の危機に陥るほどの赤字を出した、大きな原因の一つを垣間見た気がした。

さて話を戻し、一眼レフタイプでさえ、最初は、フルサイズの半分、ハーフサイズとほぼ同じ大きさのアドバンスドフォトシステム "APS" (Advanced Photo System) のサイズで作られ、現在でも中級デジタル一眼レフカメラの殆どが採用している。以前のパトローネ入りフィルムは、カメラにセットし、撮り終われば巻き戻す必要があったが、APS システムは、カメラにカセット式のカートリッジを入れるだけよい。装填のミスもなく、途中交換が出来る便利さが売りだ。フィルムにコーティングされた磁気面に、設定や日付、時間等を記録出来、フィルムカメラの利便性を高めている。初期のデジタル一眼レフカメラには、撮像素子の高価さ、モニターのような嵩張るものが多かったといった問題から、フィルム時代は傍流に過ぎなかった APS サイズが採用された。その後、撮像素子の価格も下がり、技術も進歩して、高級デジタル一眼レフカメラは、本来の 35mm サイズであるフルフォーマットに移る。12 年には一眼レフタイプではない、つまりコン

パケットデジカメにフルフォーマットの撮像素子を載せたカメラも発売された。

防滴性を持つデジタル一眼レフカメラが増えたのもいい傾向だ。電子部品が多く使われたカメラは、水濡れや湿気に弱い。山で使用する場合、標高により気圧が変わるため内部まで湿気が入りやすい。濡れていたら、レンズ、電池や記録メディア交換が出来ないのは、フィルムカメラ時代と同じだ。一歩前進だが、同様以上に注意して使う必要がある。たとえ防水カメラでも、中に乾燥剤を入れない限り内部結露が起こる事がある。

コンパクトデジカメとデジタル一眼レフカメラは、構造的に明らかな違いがある。そこに、新たにミラーレスカメラという分野が加わった。フォーサーズという規格は、初期の撮像素子が持っていた欠点を補おうと、素子サイズに対して巨大なレンズやマウントを採用したものだ。フォーサーズは高級コンパクトデジカメ程ではないが、一般により大きな撮像素子を持つカメラより画面周辺まで鮮明に写る大きな理由だ。しかし、フォーサーズ規格を採用するメーカーは少なく、撮像素子の性能も上がり、撮像素子の大きさの割に大きなカメラは競争力を失った。そこで、フォーサーズ陣営が巻き返しを図ったのが、08年発表されたマイクロフォーサーズシステムだ。レンズ交換式にもかかわらず、ミラーボックスを持たない構造(ミラーレス)にすることで、小型化を図ったものだ。コンパクトデジカメと構造は同じだが、レンズ交換式であることと、撮像素子の大きさが違うだけだ。撮像素子の大きさ、バックフランジの関係は、フルフォーマットデジタル一眼レフカメラと殆ど同じになった。フルフォーマット撮像素子の1/4の面積だから、理論的には大きさは1/2、重量は1/8に出来るが、性能にゆとりある大きなレンズを使っても十分**小型で**軽量に仕上げることが出来る。この新しい種類のカメラは、コンパクトさとコンパクトデジカメを越えた画質でブームになった。他社も、APSサイズ、やや小さなサイズの撮像素子を採用して一大勢力になっている。これは、フィルム時代の高級コンパクトカメラに相当するものだ。やはり、カメラの大きさは、その撮像素子サイズ相当のものになって当然だろう。レンズ固定式のものでもミラーレスと呼ぶことがあり、撮像素子の大きな一眼レフタイプ以外のコンパクトデジカメをミラーレスと呼ぶ事もある。

ペンタックスのレンズ資産があるので、フルフォーマットのいいものをと待ちに待ったが、APSサイズでも重すぎとも山に持参する気になれない。しかし、デジカメの性能が上がり、フォーサーズでも画質、重量と嵩的に許せる状態になり、購入を真剣に考えた。

12年9月に発売されたパナソニック GH-3(専用充電電池 77g、SD カード込み 550g、12-35mm レンズ 305g を加え計 855g)、13年10月発売されたオリンパス OM-D E-M1(専用充電電池 52g、SD カード込み 497g、12-40mm レンズ 382g を加え計 879g)、それに必要数

のスペア充電電池になる。どちらも防塵防滴だ。サンプルで見ると、これら的高级レンズで写した写真は普及クラスのレンズを付けた APS カメラより写りが良く、コンパクトで軽い。電子ビューファインダーを内蔵しているので明るい雪山でも、モニターが見えないようなことはない。

長い間使っていたパンタックス LX は、写りのいい 28mm レンズ(184g)込みで 879g、ニコノス V(35mm レンズ込みで 916g)、それにパトローネ入り 36 枚撮りフィルムの 27.5g/a を相当数持参することを考えれば十二分に魅力的だ。これらは単焦点だから LX の場合、小型の 20mm レンズ(234g)を合わせて携行するが多かった。

ところが、GH-3 の耐寒温度は 0、モニター面も強化ガラス製ではない、OM-D E-M1 は耐寒温度は -10 だが、モニターは強化ガラス製でなくバリアングルでもない上、あまりに電池寿命が短い。どちらもあと一歩なののがっかりする。

ミラーレスカメラは、コンパクトデジカメより大きな撮像素子を持ち、常に撮像素子とモニター画面が電子ビューファインダー表示のための電力を消費している。一眼デジカメのファインダーは光学式で、フォーカスも小さな専用素子で行われ、モニターは設定変更や撮影した写真を確認するだけに使われるのでずっと消費電力が小さい。撮影可能枚数が 1000 枚と表示されているものもあるくらいだ。これだけ十分な容量なら、厳冬期に低温特性のよいリチウム電池を使わなくても、十分持つだろう。手持ちの G-3 というミラーレスカメラも、公称撮影枚数より実際写すことの出来る枚数はずっと少ない。電源を入れたらどんどん写せばいいのだろうが、オンにしたままにしている時間が長いのでそうになってしまうだろう。GH-3 の公称 550 枚はまだしも、OM-D E-M1 の公称 350 枚は絶望的に持ちが悪い。本体電池スペース内に低温特性のいいリチウム電池を入れて使えば、厳冬期でもかるうじて使うことが出来るかもしれないが、専用リチウムイオン充電電池しか使えない。

電池の技術革新がないのに、機器の機能が上がり撮像素子やモニターが大きくなるから、電池の持ちが非常に悪くなる。携帯がスマホになり、電池の持ちが悪くなったのと同様だ。

しかし、リコー 500G Wide の画質には辟易とする。ISO64 でさえざらつき気味、白飛びは甚だしくダイナミックレンジも狭い。13 年春に、屈折光学系を持つリコー WG-3(専用充電電池、SD カード込みで 227g)、秋にはニコン Nikon1 AW1(専用充電電池、SD メモリーカード込みで 538g)、どちらも 10m 以上の防水性を持ち-10 対応、耐衝撃性があるので購入してみた。

WG-3 は、500G Wide 専用のワイドアダプターを使ったことと、珍しく手持ちの XZ-1 と同じ充電電池を使用出来たからだ。WG-3 の撮像素子は 1/2.3 型(4.6 × 6.2mm)だが、500G Wide より遙かに高感度特性が良くなっていて、技術の進歩は分かったが、画像の一部が塗

り絵的になるのが我慢出来ず、屈折式光学系の為か周辺の画質が少し落ちる。掴む場所がないほどボタンだらけで、爪の先でボタンを押す必要がある。電池の持ちも非常に悪い。

AW-1 の撮像素子はフォーサーズより小さな 1 型(8.8 × 13.2mm、フィルムカメラ時代の規格 110(ワフンテ)13 × 17mm の半分程度)だから、撮像素子相当に嫌味のない、高級コンパクトカメラを越えたゆとりのある画質だが、WG-3 と同様、爪の先でボタンを押す必要があり、カメラ任せのオートで撮る以外には好みの設定で写すことも非常に面倒だった。シャッターは半押し状態が分かりにくく、半押しから切れるまでのストロークが少なすぎ、一体いつシャッターが切れたかも非常に分かりにくい。本体前面はフラットなステンレス板で掴みにくく、ズームリングはローレット加工アルミ剥き出しだから夏の冷たい雨の時でも辛い。それだけはシリコンジャケット(26g)をかぶせて解決出来た。このカメラは、軽いダイビングで、設定を一切カメラ任せで使うか、毎秒 60 枚という連射能力を生かし瞬間を切り取る為のカメラで、山用ではなさそう。致命的欠点は、WG-3 より遙かに劣る電池寿命だ。公称 250 枚だが、普通でも 100 枚くらい、厳冬期なら 50 枚も写せそうにない。

どちらも、電子ビューファインダーや光学ファインダーを持たないので、特に雪山では液晶モニターを最大に明るく、コントラストを高くしても視認性は大変悪く、ファインダーの必要性を感じた。AW-1 は、アウトドア向けの皮をかぶった、ちょっと大き目の質感のよい高級コンパクトデジカメ、悪く例えれば防水性のない高級ダイバーズウォッチ、登山用としては無駄な買い物だった。なお、超広角ズームレンズ(換算 18-35mm、124g)は非常にコンパクトでよく写る。このような超広角レンズを持つコンパクトデジカメはないから、その点の魅力もあって購入してしまった。

最近、大きな撮像素子を持つデジカメは、フィルム時代では考えられないような高感度特性を持つようになり、ヒトの目では薄暗くはつきり見えないような暗さの時でも昼間のように明るく写すことが出来るようになってきている。フィルム時代は、ISO400 は高感度、ISO800 では超高感度と言われていた。人により許容出来る限度は異なるが、フォーサーズで ISO3200、APS では ISO6400 でも満足出来る写真が写せる。

画素数はますます増加し、コンパクトデジカメは 1000 万画素超が当たり前、APS サイズでも 1600 万、2400 万が一般化、フルフォーマット一眼レフ高級機では既に 07 年には 2000 万、12 年に 3600 万のものまで発売されている。12 年発売された、普及クラス・フルフォーマット一眼カメラも 2000 万画素以上だ。コンパクトデジカメでは、既に光学性能の限界のため、画素数競争はほぼ収束している。

デジタル時代になり、等倍鑑賞という写真の鑑賞法が生まれた。フィルム時代では、ピントルーペで確認する以外は、それほど細かな部分にこだわらず、1枚の写真全体として鑑賞した。しかし、簡単にPC上で拡大出来るデジタル写真を、画素1つがPCモニターの画素1つに対応するまで拡大して、細部まで詳細にチェックする鑑賞法は検査といった方がいいかもしれない。写真に対する評価は、周辺まで鮮明であるといった事が中心になった感さえるが、本末転倒の写真鑑賞ではなからうか。

フィルム時代は、画面周辺まで鮮明に写すには、いいレンズを使い、ピントをきちんと合わせ、絞りを絞って、シャッター速度を上げ、ミラーをアップして振動しないよう注意深くシャッターを切った。レンズの解像力は、双眼鏡と同じく、中心部だけなら中級品でも解像力は高級機と変わらないことが多い。『カメラ』項に数値を書いたように、2000万画素にもなればレンズの性能がよく分かるようになり、3600万画素では高級なレンズで注意深く写さなければ能力を十分生かすことにならない。結構、高画素を生かすのは難しい。特に、クイックリターンミラーやフォーカルプレーンシャッターのあるデジタル一眼は大変だ。フォーカルプレーンシャッターだけのミラーレスはそれよりましだろう。レンズシャッター式のミラーレスならはるかに振動が少なく、ブレの影響は減るだろう。もちろん、多くのカメラには手振れ防止装置がついているが、高画素の性能を生かすには慎重に使用する必要がある。APS一眼レフカメラは、基本的にフルフォーマット一眼カメラの撮像素子を小さくしただけだから、フィルムカメラ時代のレンズでは、画質のいい中心部分を使っている事になる。フォーサーズやコンパクトデジカメでも、撮像素子に対して大きなレンズ、つまり贅沢なレンズを使っている事になるので、撮像素子サイズの割に画質がいいのと同様だ。それでも、レンズの性能が鮮明に分かる画素数になっている。1画素まで簡単に拡大してチェック出来るデジタル写真の時代になり、レンズに求める性能が大幅に底上げされ、レンズの味といって許容するような悠長な事は言ってられなくなった。しかし、等倍鑑賞が目的でなくても、レンズの性能に関わらず、画素数は多いほどいいだろう。等倍で見た時の欠点は、フィルム時代のようにレンズの味として許容したり、利用してこそいい写真が撮れると思う。画素数が十分あれば、必要に応じて写りのよい高価で大きなレンズを使うことも出来る。

デジタルには、フィルム時代にはない問題がある。『カメラ』に記したように、フィルムが、3層に3原色それぞれを記録しているのに対し、デジタル撮像素子は、一般に1画素が1つの原色を記録するベイヤー配列だ。しかし、色の情報が不足しているため、それをデジタル処理して元の色を得るのだが、そのため本来の色と異なる色が生まれる偽色という現象が生じる。1つの画素で光の1/3しか利用していないのももったいない。また、撮像素子は、細かで規則

的な構造だから、そのパターンより(撮像素子上で)小さく規則的な模様を写すと、モアレと呼ばれる干渉模様が発生する。音の共振のように、周波数の倍数で生ずる共振と同様と考えればいい。撮像素子の画素数が光学眼限界を超えれば、モアレや偽色は出ないし、ランダムな配置にしても出ない。

それらの問題を解決するため、一般のデジタルカメラでは、撮像素子の上にローパスフィルターを重ねる事により、1つの光を4つに分け、色情報の欠落を避けたり、モアレの発生を押さえている。それは、結局ぼかしてごまかす事なので、せっかくの解像力を落としてしまう。画素数が限界まで来たコンパクトデジカメにはもはや不要になり、殆ど付いていないが、APSやフルフォーマットのものも画素数が多くなり、その解像力を生かすため、ローパスレスにしているものが発売されるようになった。自然のものでは、それほど規則的模様はないので問題ないことが殆どでも、例えば衣類を写したりすると生地にモアレが出やすいという。

ローパスフィルターは普通、3層構造になっている。自然光(非偏光)を、最初の複屈折板で**垂直方向**に2つに分け(直線偏光になる)、次に(直線偏光になった光を、さらにそれぞれ2つに分離するため)1/4波長板で円偏光にして、最後に複屈折板で**水平方向**に分離させ、4つに分離する。複屈折板の厚さが分離する距離を決めるので、撮像素子の画素ピッチに合わせて、モアレや偽色を軽減させる必要最小限のぼけ具合に設定している。

まだ、フィルム時代の遺物、メカニカルシャッターやクイックリターンミラーといった、高張り、振動の原因になる機構を持ち続けているデジタルカメラだが、近い内、それらアナログ時代の遺物はなくなり、デジタルビデオカメラのように(メカニカルシャッター不要の)グローバルシャッターが実用化されれば、真のデジタルカメラの完成だろう。しかし、レンズ以外のカメラ本体はコモディティー化してしまうかもしれない。その上、一画素分の部分で**3原色全ての色情報を得ることが出来る撮像素子の欠点が解消され、ベイヤータイプ撮像素子並みの性能になれば、デジカメの画質は格段に上がる**。電池の持ちも心配になる。レンズのデジタル化は物理的に可能だろうか。これまでのフィルムカメラの規格を踏襲したデジタルカメラだが、真に写真の必要性から求められたデジタルカメラの規格はどのようなものになるのだろう。大きさ、重さそれに写りが満足出来るもので、操作性がよく、堅牢性や防滴性が高い山専デジカメは一時期、工事用カメラにその萌芽を見たが、**ほぼ壊滅**している。フィルムカメラ時代は、プロ用カメラであれば、-20、-30まで動作を保証しているのが当たり前だったが、デジタルになって、-10まで動作を保証しているカメラさえ珍しくなった。モニターの画面は傷の付きにくい強化ガラス製、そのままザックに裸に入れても安心な、モニター画面を本体側に向けられるバリアングルは必要条件だ。十分な電池寿命と、明るい戸外でも見やすいファインダーを持ち、操作性がよく、ボタ

ン類に適度な大きさと間隔のあるカメラが、山向きだと思う。当然、軽量でかつ、そこそこの大きさでなければならない。

フィルムカメラ時代、小さなフィルムサイズのもは必ず画質が悪かった。同じフィルムを使用しているから、画質とフィルム面積は比例して当然だ。デジタル化は、同じ機能を小さく出来る事もその性能向上の一因であるように、極小撮像素子を使用したものでも画素数さえ同じなら、同じ解像力が得られる。今や A4 程度にプリントするなら、撮像素子サイズにかかわらず十二分な解像力を持つ。大きく異なるのは、ラチチュード、ダイナミックレンジ、明るい被写体から暗いものまで白飛びも黒潰れもなく記録出来る能力や、高感度特性とノイズだろう。しかし、小型デジカメでは、撮像素子の割に非常に贅沢なレンズを使っても先述したように割合的に遙かに小さなサイズで収まるので、撮像素子の性能を生かし切り、光量が十分ある限り大きな撮像素子のものに匹敵する画質を得ることが出来る。フィルム時代から同様だが、フルフォーマット用の高級レンズの大きさは驚くほどだ。計算的には、撮像素子面積が(APSの)2倍だから重量は2.8倍になり、撮像素子面積が(フォーサーズの)4倍だから重量は8倍になる。

過酷な状況での使用に相応しい(操作系を含めた)大きさを持ち、完全防水で適当なサイズの撮像素子を持ち、換算 20 ~ 80mm の画面全体で均質な高品質レンズを採用し、電子ビューファインダー、それに必要十分な電池寿命(リチウム単 3 併用が低温特長的には好ましい)を持つカメラが、本物の登山カメラだろう。

デジタルカメラの画質は、基本的に撮像素子の性能(ダイナミックレンジ、画素数等)、レンズの性能と画像処理エンジンの能力の総合力で決まる。必要な画質をどのような求めるかは、ほぼ同じサイズのフィルムを使用していた頃と比べ様々な解が考えられる。フィルム時代と、ビデオ撮像素子時代の規格に捕らわれず、撮像素子サイズにこだわらず、求める画質とカメラの大きさから、理想の登山カメラを逆算して創造して欲しいと思う。

時計等小物

とんでも価格で、日本語版 GPS が今だ販売されている。馬鹿にされたものだ。英語版で日本の地図データを利用出来るようにしたのも販売され始めているようだ。07年4月から発売の携帯は全てGPSを内蔵しているし、スマートフォンのアプリを使えば、目的によりGPSの必要もなくなっているのかもしれない。電池の心配、低温下で作動するかといった問題、猛吹雪でも受信するか、また画面に雪がこびりつき見えなくなるか。たとえそれらが全てクリアー

出来ても、山行の面白さが減ってしまいそうで今のところ使っていない。進歩した装備を使う事は、基本的にはより他に依存する事を意味するので、本質的には個人が得られる喜びをスポイルするものだ。どこまで許し利用するかは、社会的にも個人的にも、なかなか難しい問題を含んでいると思う。

GPS 画面を見ての山行は、現実ではなく地図上のバーチャル山行のようだ。観光地で、スマホの情報を見つつ現実をチェックして妙に納得している観光客みたいだ。まず、実際の地形を観察し感じて行動するのが、自然の中で行う登山という遊びの醍醐味ではなからうか。

残念ながら、高度計付き腕時計も、96 年モデルのカシオ、プロトレック PRF-30J(48g) をまだ使い続けている。それ以後は、第一に低温特性が悪くなり、**手動メモリー数がたった 24 になり、山の記録用として使いたい自動インターバルメモリーは、2 分毎記憶で 24 時間分、5 秒毎記憶では 1 時間分という実用性のないものになって興味を失った。**これなら 15 分インターバルで 48 ポイント記憶出来る PRF-30J の方がよい。このメモリー数で 5 分あるいは 10 分インターバルも設定出来るようにして欲しかった。**カタログ表示の薄さは近くなったが、実際のサイズは大きすぎる。**

高度メモリーは、インターバル間隔が 5 秒、1 分、2 分、5 分、10 分、15 分と選べ、オートでのメモリー数が一度で 2000 ポイント、合計 3000 ポイントなら十分だろう。2000 ポイントは 5 秒間隔なら約 2.7 時間、1 分間隔で約 33 時間、5 分間隔では約 167 時間、10 分間隔では約 333 時間分になる。それでも PC と連動しないと管理出来ないくらいだが、5 分間隔で一回の長期縦走、全ログを全て記憶出来て便利そうだ、楽しめる。

07 年発売の PRW-1300J は、以下のように多少精度が上がったようでも、大したことはないと思った。カタログ値でせいぜい 2 割程度の向上だから、たぶん実感出来ない。

温度一定の時、最大±(高度差×3.0%+30m)

そして、10 につき±80m 以内

09 年発売のプロトレック・マナスル PRX-2000 の精度は以下のように、初期の 2 倍くらいになり気持ちはそそられたが、余りに大きく、重く、その割に表示は小さく、低温特性も相変わらずで買う気にはなれなかった。言うまでもないが、精度はまだまだアナログの高度計、トーマン・エベレスト等に全く及ばない。価格も高級になった。切に小さくして欲しい。

温度一定の時、最大±(高度差×2.0%+15m)

そして、10 につき±50m 以内

全アナログ表示でチタン側のもは、プロ登山家と共同開発したもののだが、大きく重く、かつ高すぎ、一般登山者には向かないヒマラヤ専用になっている。

13年7月にはプロテック PRW-3000(63g)を購入した。実感的には PRF-30J より一回り以上大きいものの、これまでのようなガンダム風デザインではなく、山では角張って引っかかりうだが多少シンプルで薄く落ち着いたデザイン。高度表示は5mだったものが1mになり、手を上下させただけで敏感に反応する第3世代のセンサーになり、電力消費量も一桁くらい小さくなったということだ。表示はこれまでになくっきり見やすく、思わず入手した。

電波時計は時間を合わせる必要はない。しかし、標準電波は10万年に1秒の精度を持つかもしれないが、電波時計内の演算処理の為、表示が必ず1秒弱ズレている事までは想像が及ばなかった。気分の悪いズレ方だから、電波時計機能はオフにしてラジオの時報で合わせることにした。また、電波は結構受信しにくいらしく、1日最大6回まで自動受信を試みるので電力を消耗するようだ。直感的に登降、下降速度、気圧の変動が見られるグラフ表示は PRF-30J より小さく見にくいまま、オートメモリーも5秒間隔で1時間、2分間隔で12時間分と、前モデル同様、長期縦走時の実用性はない。これではPCが必要だ。押しやすいというボタンだから、知らぬ間にモードが変わってしまうことがある。低温特性がリチウム電池より落ちる、リチウムイオン充電電池を使用しているので低温特性も前モデルと同じく、厳冬期向きではない。

大きさの割に表示部が小さいのは、ベゼルの内側、風防ガラス内側の外周に太陽電池パネルがあるためだ。電波とか、ソーラーとかの絵になるスペックのため、多くの基本性能を犠牲にしている。デジタル表示の腕時計に、アナログ表示のような丸形を採用するのも、表示部を小さくするだけの不合理なデザインだ。

手持ちのフルサイズ・ダイバーズウォッチと並べてみると、大きさも厚みもどっこいどっこいなのに、これまでになく薄型と謳うとは、ピーク時にはどこまで巨大化していたのだろう。これが登山装備としたら、まだまだ大きすぎる。

これまでとは異なる仕様表示だが、精度は一桁上がったかのようにも見える。

温度一定の時、(高度差×0.3%)

温度変化を含んで考えると、概ね±75m以内

実際に山で使用すると、多少精度が上がったような気もする程度だった。

14年3月にセイコーが発売したプロスペック・アルピニストは、なめらかで引っかかりにくいデザインはさすがと思うが、消費カロリーは不要、登行スピード表示ではなくグラフ表示のほうが遙かに直感的に登行スピードを把握しやすい。高度グラフはもっと大きくし、横軸は14目盛り、縦軸が10目盛り。横軸一目盛りは2分あるいは2時間を示し、縦軸は1hpが10mを示すようにすれば直感的に変化を把握しやすい。

他の様々な装備と同様、登山用時計も、本物の道具として作られている訳ではなく、多くの人のアウトドア遊び心を満足させる為に開発されたものだから、様々な魅力的スペックは満載されても、本当に必要な機能がより良く改善され搭載されるとは限らない。今日の多くの商品(衣類は当然として、ザック、シュラフそしてテント等)は一部の好事家のためではなく、大量生産、消費を前提にしており、だからこそ品質の割に安価で入手できる。本物の登山用腕時計なら、キャッチフレーズに欠けても、電波時計より小型化、省電力化したクォーツ時計、ソーラー発電とリチウムイオン充電電池より低温特性のよいリチウム電池の採用が必要条件だが、そのようなものを必要とする人はこれから極少数に違いない。加藤文太郎は、先鋭的な登山をするために装備を自作していた。長谷川恒男も多くの装備を特注していた。昔の山岳誌を見ると、登山用品、装備の改造の工夫や自作の記事が非常に多い。今の時代は、装備がふんだんに市販され、質も良くなったので、以前より受け身的になっているようだが、より良き自らの登山の為に、何かしらの工夫点が見つけられなければ、道具や装備を使いこなした主体的登山をしているとは言えないと思う。逆に、本末転倒、脳内登山者が「ものづくり」に楽しさを見出すのは、空想登山を出汁にした工作の楽しみだ。もちろん、それはそれで楽しいし、誰でも思わずはまってしまうことがあるので、常に本来の目的からズレないように自制する必要がある。「ものづくり」の楽しさに目覚める事は結構なことだが、いくら日本の登山は多義的であると言っても、それはまた別の趣味と考えるのが素直だと思う。

電波時計は技術をスマートに利用していない。登山用としては、長期縦走でさえ月差10秒クラスのもので精度は十二分であるし、年差10秒なら申し分ないから、無駄に電気を消費するだけの代物だ。電力消費が多くなり、ソーラー発電を採用し、低温特性の悪い充電電池を使用しなければならない、売らんが為だけの無駄な技術の導入である。

GPSの小型化が進み、ランニング用、登山用として腕時計内蔵のGPSが発売されるよう

になった。それらも電池がボトルネック、今のところ 1 日の行動ならともかく、それ以上の活動には電池寿命の点で使えない。

最後に、最終版以後追加した、あるいは書き忘れた持参**修理道具**、**スベア小物等**のリストを記す。無印は夏冬共通、冬専用は W、夏専用は S を品名の前に付けた。引っかけ式ラダーロックは、分解式ラダーロックより遙かに簡単で安心感がありそうだが、それらはまだ山行中に用いたことはない。テントスベアインサートは、万が一インサート部が抜けた場合に使うために自作した。接着されたインサート部を抜き、中央に 2mm 強幅のメインチューブを接着したものだ。プラスチック製洗濯用ピンチ 10 ケは、フライシートに遮光用シート(強烈な日射しの日でも、テント内が灼熱地獄にならず快適なテント生活ができる)を固定するためや洗濯物を干すために使用する。謳い文句と異なり爪楊枝の先端は丸すぎるので、ペーパーで削り尖らせた。

チタン製爪楊枝 MARUTO-TR901 3g

チタン製耳掻き MARUTO-EP901 3g

25mm 幅引っかけ式ラダーロック

(アルミ製、メトリウス) 2 ケ 14g

テントスベアインサート部:

S.433 用中央耳付きインサート部 8g

S.333 用中央耳付きインサート部 4g

W.355 用中央耳付きインサート部 4g

W.355 用 FC8.88 コネクター部 2g

S テント遮光用エマーゼンシーシ

ート(3 枚連結、210 × 420cm) 190g

S プラ製洗濯用ピンチ 10 ケ 39g

パーク GP-2 パンク修理パッチ -

個人輸入、輸入代理店

07年5月14日にアメリカからの船便小包郵便が廃止された。日本国内と同様、郵便から宅配便への流れも大きいですが、重いものを安価に輸送する手段がなくなったのは痛かった。

国内の代理店は、現地価格の2倍もの価格をつけるところもあり、大きな店ではそれらの商品を日本に送らない事が多くなった。モチヅキ、A&Fやパタゴニア等が酷い感じた。転送サービスも馬鹿高だから嫌になる。インターネット社会になり、情報が増えたら、かえって輸入が不自由になってしまったとは皮肉だ。昔から、日本製の商品をアメリカから買うと安い事が多くあったが、今だ日本人が日本人を鴨にして平気なのは情けない限りだ。ノースフェイスの商標権を94年に買い取ったゴールドウィンも、昔(78年から)はとんでもない価格で販売し、アメリカの小売店からの直接購入を禁止させた先駆者だった(その頃も、小さな小売店からは購入出来た)。

おしゃれな山雑誌の誕生

男性向きとしては、09年5月創刊され、10年6月号から月刊化された"Peaks"、女性向きでは、09年6月創刊、10年8月号から月刊化された『ランドネ』がある。同じ出版社が発行しており、パブ記事とハイキングに毛が生えたレベルの緩い山行を主に扱っている。汗臭く、危険を伴うような登山を対象としないのが、旧来の登山雑誌と異なる。ビジュアルな誌面は、初心者には取っつきやすいのだろうか。『ランドネ』は、カメラ女子向けの雑誌と同様、ハイキーでファンシーな写真がふんだんにちりばめられたファッション誌かのような誌面になっている。おじさんが編集しているためだろうか、女子を甘く見て、内容自体は"Peaks"以上に極めて薄く、殆どファッションだけに絞った編集になっている。少々、女性を**甘く見すぎている**感じた。業界内の雑誌でないにもかかわらず、カタログ雑誌のようにパブ記事だらけなのにはちょっと辟易する。

山雑誌、登山の社会的評価からの乖離

81年創刊の"Be Pal"は、すっかりロハス雑誌になった。雑誌にも寿命があるようだ。カーキャンピングの専門誌が色々出てきたのが、凋落を早めた**主因**かもしれない。雑誌の中に何べ

ージもあったアウトドアショップの宣伝はすっかり消え、付録のロハス商品カタログ以外は、本文の薄さは限界的になっている。さすが、ライターの筆力は素人ライターばかりの山岳誌よりはるかに高く、それなりに楽しんで読めるものが多い。山岳誌の多くのライターは『市民ランナー的』な感じだ。

14年3月27日、『岳人』の商標権を無償でモンベルの子会社に移譲する契約がされた。発行元が9月号から変わるという。店頭でめっきり見なくなったが、新聞社が発行しているから体力があるのだらうと思っていたのに、そうではなかったようだ。一登山用品メーカーが『岳人』を出版すれば、一部小売店、山小屋、ツアー会社と関係が深く、多少色つきの感がする『山と渓谷』以上に宣伝誌と疑われかねない。業界メーカーが業界専門誌を発行しては、その内容の中立性が疑われる。そのようなことをするのは、メディアジャーナリズムとして失格ではないのだろうか。

なお、毎年『山と渓谷』の1月号にあった「年間総目次」は、「2009年総目次」を最後になくなっていく。簡単に羅列しただけの目次でも、少しは検索に役立った。編集費削減の為だろうが、これではバックナンバーがDVD化されても使い勝手が悪い。様々な検索機能を持つ120年分の「National Geographic」誌の全バックナンバーDVDが1万円以下で購入出来る。日本の雑誌では、バックナンバーがDVD化されても大切な検索機能が弱く、使い勝手が著しく悪そうだ。ハードな記録以外はヤマレコで十分だろうし、歴史の検証に耐えるような記事は少ないので、DVD化しても需要がないかもしれない。

山岳誌に殆ど取り上げられない登山家が、TVメディア等を通して有名になったのはこれまでにない現象だろう。

「アルピニスト野口健」とは比べものにならないほど山岳誌に無視されている。「冒険の共有」をテーマに、セブンサミットを単独無酸素登頂しようとする登山家、栗城史多だ。NHKでは10年1月4日にその挑戦ドキュメント、11年12月22日の教育TV「ようこそ先輩」に出演している他、民放でも多く取り上げられ、山を知らない一定の人たちから支持されている。ネット上に登山のライブ映像を流しているのが、多くの人々に自分も登山をしているという臨場感をもたらし、その「冒険の共有」感に胸躍る。山の知識がないなら、それが普通の反応だろう。

初期の近代登山は、誰が最初に(有名な、あるいは標高の高い山に)登頂したかだけで序列が決まり、誰でもはっきりその意味が分かり、社会的にも大きく取り上げられていた。初登競争時代なら、手段を選ばずただ人より早く登ればいいだけの半ばルールのない極めて分かりや

すいゲームだった。しかし、登頂自体が普通になると、物珍しさも得られる名誉も失せ、ニュースにも取り上げられなくなる。堀江謙一の、ヨットによる62年の太平洋単独横断はセンセーショナルな冒険だったが、近年はその程度ではニュースにもならないと同様だ。今では、難度の高い無名の山を登っても記事にさえならないが、有名な高山の一般ルートを登った時は、場合により取り上げられることがあるくらいだ。専門家と一般人の間の登山に対する意識、評価はすっかり乖離している。新聞の第一面に登山が取り上げられる事はなくなり、社会的関心もすっかり薄くなった。そして山は、山に全く素人の芸人が、冬の富士山、モンブラン、アコンカグア、マッターホルンやマナスルにまで挑戦するという、お笑いドキュメンタリー番組の舞台にさえなっている。

初登競争時代が過ぎると、力のある登山家は、ルートの困難さや登るスタイル(アルパインか極地法か、無酸素か否か等)に新たな価値を求め、序列を付けるようになり、一般市民の山に対する単純な思いからは理解不能になった。一般人にすれば、登山は、どんなルートからでも、いかなるスタイルでも登頂出来れば同じだ。まして、無名の山の高難度ルートを登る価値など想像も出来ない。今や、ヒマラヤ登山でも、ノウハウが確立し、ガイドシステムが整えられた一般ルートでは、登山者が列をなしている。先鋭的、冒険的な登山家は、名の知れた山の頂を目指す事から、より困難なルートを、美しいスタイルで登る事に価値観を転換したが、一般の人にはその意味はマニアックすぎて分からない。そのような状況に出てきたのが、登山を一般大衆にも分かるレベルのキャッチフレーズで実践している栗城史多だろう。

しかし、山岳誌では、セブンサミットで酸素補給が必要なのはエベレストだけという点、単独の定義が序列と名誉を重んじる旧来の登山常識から離れている事、また本当の山頂に登ったかという疑惑のため、揶揄の対象にもされず、ほぼ無視される。セブンサミット「無酸素」は、不正確かつ大げさかもしれないが、それほど目くじら立てる事でもない。「単独」は、普通の市民や登山者の素直な語法と考えれば理解出来る。真の山頂に登ったか否かは、多くのヒマラヤ登頂者にもある疑惑だろう。多額のお金を集め登るスタイルがよくないなら、他にも批判されてしかるべき人がいるが、その批判も山岳誌には一切出ない。

専門誌は、ハイカーでも理解出来るレベルの登山、夏の南アルプス単独縦走でいう「単独」といった使い方を、安易にヒマラヤ登山にまで適用させた事が特に許せないようだ。セブンサミットを登ったとしても、その記録が最年少だとして世間的にちやほやされたのは「アルピニスト野口健」までだ。以後、飽きられ殆ど一般の話題にも上らなくなっている。

しかし普通の登山では、結構安易に「単独」が使われている。山岳誌でも同様だ。有名登山

家でさえ、記憶に残っている、大げさで違和感さえ覚えた記録「高桑信一 56 歳 冬期八ヶ岳全山単独縦走(敗退)」を書いている。この時期を「冬期」と表現しているし、営業山小屋に泊まっても「単独」だ。05 年 3 月 19 日から 25 日、テント小屋各 2 泊、蓼科から赤岳のもの(高桑信一、『岳人』、06 年 1 月号、30 ~ 36 頁)だ。06 年 4 月 23 日から 28 日、避難小屋 2 泊、加治川ダムから川入までの記録(高桑信一、「高桑信一 春期飯豊連峰単独縦走」、『岳人』、07 年 4 月号、131 ~ 137 頁)でも、気楽に「単独」が使われている。どちらも、カラーページが多い特別待遇の記録であり、自分に酔ったような文章は典型的の山岳古典文体だった。そんな山行なら、登山の序列からも外れたお遊びだから問題にならなくても、今だ序列付けを重んじる登山の世界では厳密な用法が必要なのだろうか。そうならそうとはっきり書けばいいのに、「冒険の共有」登山家のバックにいるスポンサーに気を遣ってか、きちんと批判して評価しない。登山界は、今でも序列付け、順位付けに汲々としている欲界なのだろうか。序列のヒエラルキーに紛れ込んだ異物として無視する前に、こんな用法はちょっとおかしいと冷静に説明すればいいだけだ。多くの人が「2 ちゃんねる」でエネルギーを無駄にする事もない。山岳誌は、批判精神の欠如した嫉妬深いジャーナリズムではない筈。確かに、「単独」といいながらシェルパにルート工作させ、固定ロープやハシゴを使って登っているようだ。しかし、ヒマラヤ登山では「単独」や「ソロ」の明確な定義はない。しかし、まず明確な「ソロ」あるいは「単独」の定義を決めるべきだろう。残置されたロープを掴んだり、支点を使ったり、残っているトレースを使ったりする事はどうなのだろう。厳密に考えれば、未踏ルート以外「単独」は有り得ないほど、どこのルートも登り尽くされ、登山者が多い。登山をスポーツのようにきちんとした評価付けしたいのなら、条件の悪い時の登頂は特別加点、かけた費用に反比例した点数等を総合的に合算し、採点競技にすべきだ。

逆に、山岳誌の仲間内にさえいれば、一般人のイメージに阿った「サバイバル」という語を使っても問題なく、中堅有名出版社から本まで出し、一部熱狂的ファンさえいる「サバイバル登山家」も出てきた。もう十分、有料メルマガで生活出来るだろう。

本来、登山における「サバイバル」は、『ヒマラヤ・サバイバル』(原真、悠々社、94 年 7 月)のように、極限状態の登山を安全に成功させる為の生き方、生存術という意味で使われる。しかし、一般の「サバイバル」は、サバイバルゲームか、お笑い番組での原始時代の疑似漁労採集生活、サバイバルごっこを意味する。

始めて山岳誌に載った、一般用語的「サバイバル」の使われ方は、99 年 9 月 5 日から 11 日の記事(服部文祥、「ソロサバイバル 南アルプス 大井川・三峰川源流」、『岳人』、00

年 8 月号、50 ~ 53 頁) かもしれないが、「特集—日本源流紀行」の一つとして収められているように、殆ど内容は源流釣りだった。『最大 11 日間の山行に米 5 合、黒砂糖 300 グラム、お茶、塩、胡椒』(同、50 頁) 持参するという。源流釣りは一部マニアにしかアピールしなくても、より多くの人のアウトドア—冒険心を刺激する言葉「サバイバル」は一般受けしたようだ。「サバイバル登山」が「源流釣り登山」では、これほども受けなかつただろう。

「サバイバル山行 自然に近づく登山術」(『岳人』、01 年 10 月号、18 ~ 55 頁) という特集でも、「サバイバル山行」といいながら、源流釣りを重視した沢登りになっている。帝国陸軍のように、食糧を現地調達しようとする指向は、登山とは真逆の行為で矛盾しているが、語感的には物珍しかった。

さらに目新しくしたのは、ハンティングを加えてからだろう。釣りは多くの人がするが、ハンティングをする人は珍しい。猟銃をもった勇姿は、釣り竿を持った姿よりインパクトがあり格好いい。

最初に目にした記録は、七面山、身延山当たりで 08 年 2 月 1 日から 11 日に行った「安倍奥から南アルプス南部 単独冬のサバイバル登山」(服部文祥、『岳人』、08 年 5 月号、129 ~ 130 頁) だ。『夏におこなっているサバイバル登山を冬にも実践してみた。テント、コンロ、電気製品を持たずに山を長く歩くというもの。食料は米と調味料のみ。調達食料は鹿を期待する』(同、129 頁)、『猟銃と弾で 4 キロ強はあり、かつ鹿を仕留めてもすべて運べるわけではない。そのあたりの矛盾というか不合理はあるが、初めての試みとしては全体的に納得できた』(130 頁)。重量的にもメリットがなく、獲物の殆どを捨てなければ登山が出来ないと、自ら認めている。「サバイバル登山」は、狩猟としても登山としても、明らかにどちらの楽しみもスポイルする行為だ。狩猟のマナー違反だとも思う。

事実上の源流釣りである「サバイバル登山」でさえ、玄米 1 日 3 合程度、味噌、ごま塩、梅干しを持っていく(柏澄子、「山で食べる岳人流山ごはんのスヌメ」、『岳人』、08 年 11 月号、23 頁) とは、お笑い番組での疑似漁労採集生活、サバイバルごっこにさえ当たらない。それだけ持っていけば、サバイバルでも何でもない。わざわざ炊きにくい玄米を持参するのは、ひねくれたこだわりだ。

動画としては、10 年 10 月 31 日、TBS テレビの『情熱大陸』で「サバイバル登山家」としてそのドキュメンタリー番組が放映されメジャーになった。思わぬハプニング、最後の滑落後の姿がリアリティーを感じさせ、本物を感じさせたようだ。しかし、自身による滑落報告(服部文祥、「南アルプス聖沢上部、滑落報告」、『岳人』、10 年 12 月号、36 ~ 39 頁) の、強がり方は惨めさを感じさせるほどだった。まず、『今回のアクシデントでは、私は平出の存在もあって、生き

て帰ってくるのができた』(同、39頁)に、品性の卑しさが象徴されていた。『平出の存在もあって』とは、いなくても問題ないという事を言外に言っている。他の人が、小屋宿泊者しか乗れない送迎用『東海フォレストのバス』(同、37頁)へ特例的に乗せてもらい下山したら、アンフェアと批判するに違いない。自分より遙かに登山技術レベルが高く、年若いとはいえ命の恩人に対する物言いとしては、常識人では理解不能だ。「アルピニスト野口健」に対しては、年下だからあえて君付けにすると書いていたと記憶しているが、敬称を付けないのは、彼より格上と思いい君付けはしなかったのか、もっと目下と思ったのか聞いてみたい。それにしても身分意識、序列意識は度し難い。

しっかり肉声と主張を聞いたのは、11年11月1日、フジテレビの『ナダールの穴』だった。そして、「サバイバル登山家」の話しぶりに、まず納得出来たのは文章の生硬さの理由だ。まとまった事を書こうとした記事は、例外なく、始めてレポートを書いた学生のように、気張り、たどたどしく、しっかりした根拠を示す事も出来ず、分かりにくい内容だと感じていた。

よく通る美声ではあるが、妙に偉そうで自意識過剰な話しぶりは、流暢とはほど遠い。その上、「アルピニスト野口健」の素直で明晰な話し方、「冒険の共有」登山家の優しげな語り口とは全く異なる、イヤミやアクたっぷりの話し方だ。きちんとした事を書けるような頭の構造ではない事がよく分かった。

その発言の一部を取り上げると、『ある時、日本の山も自分の力で登った方がかっこいいよねって思って、必要のない道具をザックから取り、食料も出来るだけ取る』と語り、『なんか塩コショウなんか持ってくんですね』と問われ『米と塩、コショウ、現場でこういうのを調達して料理して、食べながら長く登山を続けていく』と答えていた。また、『例えば缶詰持ってくとか』と問われ『美しくないね』と答え、『実は10日以上会社休むと怒られちゃう』といえど『全然それサバイバルと違うやん』と突っ込まれ、『1日400g今は、だから4kg、結構持ってきますよね』と発言していた。そんなに食糧を持参すれば、それだけで十分な量、かつ10日程度が長いとは、全然「サバイバル」でも、美しくもないではないか。

『なぜ狩猟を始めたかっていうと、まあ、街で普通に肉を食べるでしょ。この肉を誰かが殺して解体して、で、まー売ってくれてるってことを考えた時に、この肉の値段に殺していうものが含まれているとしたら、俺は殺しを金で買っているなと思ったんだよね。それってというのは、まあ、さすががしくないよね、美しくない』、『それは思想に反するって』と尋ねられ『そっそっそう。それで、肉を食べるんだとしたら、いつか自分も哺乳類を殺すという体験をしなければならぬと思っていて、狩猟でもするかと思って始めたのが狩猟』、『あー理屈っぽい、美しさを重視するのに、全く美しくなく不純な理由だ。その論理を貫徹したいなら、是非、衣類も自作してみるべきだ。

我々のようにザックも自作したらどうだろう。せめて簡単に作れるタープぐらいは自作して欲しい。市販の散弾銃ではなく、法定猟具ではないが、ボウガンを使った方が美しいだろう。それなら、3D プリンターがなくても簡単に自作出来るし、アメリカでもボウハンティングというジャンルがあり、銃を使う猟よりずっと刺激的で美しい。

さらに俺様発言の一部を拾ってみると、『栗木君がもしここにいて、俺の方がずっと上だと言っても、栗木君は何も言わないと思うけどな』、『マラソンに例えると、栗木君や野口君は市民ランナー的な感じで、登山家としては、ちょっとまー 3.5 流』(エリートマラソン選手、川口優輝が神奈川県庁勤めの市民ランナーだということを知らないのだろうか)、ホストに「登山家でしょ栗木さん」と問われ『いや登山家じゃないって、登山家じゃないなーあれば、登山家としたら本当に登山を目指して登山家になろうと努力している人に失礼だと思うんだよね。…野口君とかもアルピニストって言うけど、本当にアルピニストになろうと努力している人がいるのに、そうじゃないのにアルピニストだって言うのは、俺その人達に対して侮辱していると思うんだよね。…ほんとのこと言っているだけなんだけどな』とは、自分中心の序列しか興味が無い。どの分野でも同じだろうが、「登山家」、「アルピニスト」にも、色々なレベルの人がいて当然だ。それらを権威ある称号とありがたがる心性は、真性の貧しい心性だ。今はハイキングしかしていない昔の有名登山家を、今でも「登山家」付けで呼ぶのは、「家」が権威を示すと思われる事の証明だろう。その場合、「家」は敬称として使われるが、厳密には「元」を付けて呼ぶべきだろう。登山の場合、「家」と付けると、「者」より格上の権威を表す感じになる。実質的に類似の生業を表す、もの書き、文筆家、作家でも、自称を「家」付けでいうのではなく、謙遜して「物書き」というのが日本の美学。反対に、妙に権威的な肩書きは思考を停止させ、判断を誤らせる。日本語は敬語が発達し、常に序列を無意識に意識させる言葉だから、肩書きの表記、つまり序列にこだわる。そして、封建的序列付けが言葉に堅く組み込まれているので、それが物事を根本から考える上で大きな障害になる。外国語の音訳であるカタカナ表記の言葉はそれら序列から自由な感がある。「ライター」はその一例だが、「ジャーナリスト」は、原語の "journalist" と多少異なった範囲に限定して使われるようになり、独自の権威性を示す。言葉は、潜在的に価値観を内在しているものが多いので、その限界を意識しながら表現しないと、既存の枠組みから抜けられない。

さて、呼称にこだわるのは、格付けに汲々として、自分より有名なものがシャクに障っている証拠だろう。『一応山岳ジャーナリストだからさ、そういう世界に一応生きているから』は、一瞬「邪悪ナルシスト」と聞きなし、なかなかユーモアのある人かと思ったが、本物の「邪悪ナルシスト」だったとは驚いた。恥ずかしげもない自慢たらたら連載は、その後も誌面に絶える事なく、それ

に耐える術を養成ギブスしてくれる『^{我輩人}岳人』だ。

番組最後でホスト役が「僕は栗木君が好きです」と色紙に書き、カメラに大写して終わるとは、お笑い芸人からも「サバイバル登山家」は胡散臭く『美しくない』と感じられたようだ。これを見る前は、現実生活の「サバイバル」のため、悪名は無名に勝るとばかり、名を上げ得る為、意識的に毒づいた文章を書いていると思っていたが、性格から滲み出たものだったとTVが教えてくれた。

NHK、BSの企画で、北極圏を取材した時の思い出話(服部文祥、「スーパー登山論」、『岳人』、14年1月号、68頁～74頁)が掲載され始め、今もその連載が続いている。相変わらずの硬い文章だ。そのドキュメンタリーが14年1月2日放映され、ノンフィクション作家、登山家、サバイバル登山家としてNHKデビューを果たした。トナカイ・チュクチのガイド(取材陣3人を伴い)北極圏にある珍しい魚が住むという湖まで歩いて旅するという内容だ。映像は、その時のことを自ら報告した連載と異なり、真の姿をあからさまに映し出してしまっていた。

またも、グチグチ、電気製品等を持参せず、食料も途中で確保しながら長い山行を続けるのがサバイバル登山とのこだわりを披露つつ、今回は米を5kg持って行くと語る。せいぜい10日の予定なのに、それだけの重量の食料を持っていけば十分な量だという根本的矛盾は相変わらずだ。逆にチュクチのガイドは、本を読まないと言えないと厚い本を持参、ソニー製携帯音楽プレーヤー、セッケンやカミソリまで持参する。ゴム長靴を履き、粗末な衣類とテントのガイドの歩き慣れた姿と、魚を原始的釣りで釣って、生で食べる様もカメラ目線の誰かと異なり自然で気取りがなく新鮮だった。それは、カメラ目線、カメラを意識する行動こそ、日本の「サバイバル」の本質だと気づかせてくれた。マッチ1本で簡単に薪に火を付けるのも手慣れている。本物を感じさせる。一方のサバイバル登山家は、100円ライターを使ってどんなに挑戦しても火がつかない。こんな時の為に持参したと言いながら、ガソリンを取り出し点火するのでは興ざめだった。その他、お粗末なサバイバル技術、彼我のレベル差を思い知らされてもお、張り合うような、いい訳のようなことばを繰り返し、強がる態度は惨めだ。明らかにレベルが違うと何度見せつけられても、その事実を素直に認める事の出来ない強がり方は、見ていられないほど。一体このドキュメンタリーの主人公は、2人の内どちらだったのだろうか。NHKの番組の主人公として出演して、サバイバル登山家の真の実力と性格がはっきりしてしまっただろう。そして、今回初めて、多少の怒りも憤りも起さず、かわいそうで惨めな人を助けてあげたいと心の底から思えた。苛立つのは、相手が自分と対等、あるいは対抗すべき相手であると認識している証拠だ。番組を見て、そんな無理をしなくていいのに、という優しい思いやりの気持ちだけが残った。

14年4月1日のエープリルフールが始まって1時間ほどたった深夜、NHKラジオで『現代人の失った大切なもの サバイバル登山家』というインタビューが放送された。その日はどんな冗談でも許されるのに、相変わらずしどろもどろの苦しい論理を重ねているので、思わず体に悪いから力まないでと声をかけたくなった。日本語の登山も多義的だが、サバイバルという日本語としてさらに目新しいがはっきりしないことばを加えて創作した「サバイバル登山」ということばの意味は、さらに輪をかけて分かりにくい。サバイバル英語 "survival English" は何とか通じて、サバイバル登山の "survival climbing" あるいは "survival mountaineering" は通じるのだろうか。登山 "climbing"、"mountaineering" は、狩猟採集民 "hunter-gatherer" の楽しみではなく、都市生活者だからこそその楽しみだ。

「単独」とか「アルピニスト」ということばの使い方に対して厳しく批判するのは、本人は意識してないだろうが、自らの「サバイバル」ということばの使い方、意味する内容に後ろめたさを持っている証左だと思う。「単独」や「アルピニスト」という人を批判するなら、同様に「サバイバル」の意味も自ら厳しく吟味すべきだ。彼らを同類と意識するからこそその憎悪に違いない。

食料を現地調達しても、帝国陸軍の現地調達のように原住民の反感をかうようなものではないが、そんなことうつつを抜かしていたら登山も戦も出来ないのではないのだろうか。サバイバル登山の場合、あれだけの重量の食料を持ち猟銃を持てばかえって重くなり、登山が目的なら登山、狩猟採取が目的なら狩猟採取に目的を絞らないと、どちらも中途半端になってしまうだけだ。『兵隊があちらでも、こちらでも飯盒食をたいていた。尾根には水がなく、また煙を出す、それを目あてに敵機がすぐ飛んでくるので、当番兵は毎日谷において一日分の飯盒食をたく』(丸山静夫、『インパール作戦従軍記』、岩波新書、84年、35～36頁)ような状況におかれてはまともに戦えないのと同じだ。

『餓死した英霊たち』(藤原彰、青木書店、01年)によれば、日本軍の戦死者の過半が餓死だったとのことだ。兵站 "logistics" を無視したのは、論理 "logicalness" を忘れているからだろう。兵站 "logistics" は英語からの翻訳語だ。原語では、"logistics" 兵站が "logistic" 記号論理学や "logic" 論理学と関連していることばということはすぐ分かるが、翻訳語である兵站には、記号論理学や論理と近いことばであるという手がかりが失われているから、精神主義に陥りやすい。このような例は数多いので、逐語訳は出来ても、一つ一つ原語の意味をしっかり掴んで理解しないと、ことばの意味の本質が掴めない。漢字の成り立ちや意味から、翻訳語の持っている意味をいくら考えても、その内容が**実感的には**はっきりとは理解できない。さらに、

"survival" は漢字訳ではなく「サバイバル」と音訳されてしまったので、しっかりしない、どうにでも使える言語明瞭意味不明なことばになっている。

「冒険の共有」を目的にした「セブンサミット無酸素単独登山」よりアクが強く、世間受けを狙った羊頭狗肉なのが「サバイバル登山」かもしれない。目くそ鼻くそを笑うか、近親憎悪かは分からない。そっくりなのは、自意識過剰、自己愛性パーソナリティーだろう。自分の顔にカメラを向け、ゼーゼー呼吸を荒げつつ間断なくお喋りしながら登る様は異様だが、コスプレ山行をしたり、ゲテモノ食いをポーズするのも同様な自己顕示欲のなせる技だろう。2 人とも寂しがり屋に違いない。それに攻撃性パーソナリティーを加えたのが「サバイバル登山家」だ。本心の、弱気で自信のなさを表すものだ。結構分かりやすく、愛すべきキャラクターだ。

もの書きでも登山家でも、自らの感情や行為の掛け値なしの表現にこそ、多くの人が感動を覚え、鼓舞されたり勇気づけられる。それは、自分が社会にとって必要にされている確かな証拠であり、結果的に本人の生きている満足感になる。純粹に無償の行為であればよい訳ではないだろうが、他者の目線に媚びる行為には腐臭があり、一時的流行として消費されるだけだ。表し方は逆方向に見えるが、両者は全くよく似た性向を持っている。

「サバイバル登山家」の、こんなに凄い事をやっていると声高に主張する表現は、本質的にはそれがまがい物だと理解している苛立ちからのもの。その自慢話とわざとらしさを不快に感じるの、心根の卑しさを想像しての嫌悪感だ。

また「冒険の共有」登山家は、最初から自らの目標を人々に「共有」してもらおう。しかし、それは直ちに本人にとっての満足感になっても、端から一緒に仲良く集うやり方は因果逆転だ。本来、まず本人の身を削るような行為や表現を、皆が「共有」して鼓舞されたり勇気づけられたりし、それが曲がり回って本人の充実感になる。この指止まれ式の冒険がウソっぽく感じられるのは、その自己責任回避的、目標と情報の発信だけ重視して成就の為の覚悟が足りない事に対する胡散臭さからだ。

その性格は、生得のものだろうか。『岳人』01年4月号(52～57頁、120～121頁)に特別待遇カラー6頁、白黒2頁で「世紀未登攀者、新世紀初登攀」という自分たちの記録が掲載された。しかし、その時、少なくとも同等の黒部横断の記録があった。執筆を依頼されて原稿を送った人が、「サバイバル登山家」とのやり取りの中で内容を1/3に削られ、写真は白黒1枚だけにされたのに憤り寄稿を止めている (http://www.ceres.dti.ne.jp/~noguring/bbs2/2001_1Q.htm)。その後、その記録は Rock & Snow 誌 01年冬号(野村勝美、「冬黒部十字峽を越えて、世紀を超えて」、109～115頁)に発表されたが、人となりをよく表しているエピソード

だった。その頃から、岳人は「サバイバル登山家」の記事を包む包装誌となってしまったようだ。そこまで部数が落ちてしまい、そんな記事を好むコアな読者に頼らざるを得ない証拠かもしれない。「はったりブンショウ」なき『岳人』は、もはやホップなしのビールだ。

昔の座談会における、『誰にもできないことを、やりたいなあ』（「大学のサークルは山と人の魅力の集合」、『岳人』、91年12月号、91頁）、『他人のやってないことをやってみたい』（同、94頁）との発言は、どの分野にも上には上がある事を身に染みて感じた為か、源流釣り重視の沢登り山行を、新たなジャンルかのようにお色直して「サバイバル登山」という言葉を発明し、斯界の開拓者になった事でやっと実現した。お笑い番組の一般的な「サバイバル」ごっこと登山を組み合わせた手法は、「セブンサミット単独無酸素登頂」と同様、ハンティングも登山も知らない一般人に受けるのがよく分かる、うまい名付け方だ。

なお「サバイバル登山家」は、日本山岳会青年部のK2南南東リブ遠征の記録が『従来の登山記とはかけ離れた文体、主張が盛り込まれていたので、反響は大きかった。圧倒的に好評』（永田秀樹、「編集室だより」、『岳人』、96年11月号、196頁）と評価され、それまで在籍した『山の本』から、岳人編集部入りを果たし『新人・村田ブンショウ(慎ましく)参上』（村田文祥、「編集室だより」、『岳人』、96年12月号、196頁）とデビューしている。

並の物書きは、自らの弱さや、欲望を素直にさらけ出して、やっと読者に自分も同じ気持ちを持っていると共感されると思う。「アルピニスト野口健」の著作（『落ちこぼれてエベレスト』、集英社、99年10月8日）も、だからこそ青春ドラマとして面白い。出自も、話の背景も国際的で、もちろん嫌らしさのかけらもない。それに反し「サバイバル登山家」のゲスの受け狙いでわざとらしい表現を、本書では『昭和軽薄体から口語文体、欲望のままの感情表現を少々借用』（392頁）と書いたが、遠慮して褒めすぎたのかもしれない。扇動家として、嫌らしさが鼻につく発言を重ねるのは、まさに危ない道、サバイバル文体に違いない。真に新たな地平を開く実践や発言をするのは困難だが、どんなにズレた極論や行動でも、それを面白おかしく料理して見せれば、何も知らない人たちの一部からは熱狂的支持が得られる。自分に求められるものが何か理解出来る人なら、それが本来の性格をさらに誇張するよう働き、行動と発言がますます増強されそれなりに洗練される。今のところ、それはうまく循環している。多くの人が、そんなの「サバイバル」じゃなくて狩猟採取ごっこだと気づくまでは、羊頭狗肉の「はったり」文章と行動を続ける他ないが、なかなか先のない危険な道だ。その生き方こそ、まさに「サバイバル」の実践だ。しかし、本来厳しい登山そのものがサバイバルの要素を含んでいるのに対し、「サバイバル登山」は、危険を克服して生き残り、登山を成功させるといった要素を殆ど持たない。「サバイバ

ルに「登山」という言葉を加えると、トートロジーみたいで収まりが悪く、実際の行動からは根本的形容矛盾になっている。

さて、『従来の登山記とはかけ離れた文体』(前掲書、196頁)の例を一つ挙げてみよう。

『話ながら、どうしても僕の視線はちらちらと岩の上に飛んでいた。岩の上には食パン2斤、ツナ缶6個、菓子パン6個、ラムネ、乾パン、リンゴ3個、そしてスナック菓子までもがあった。……あんまり見ちゃいけないとは思ったが、見ずにはいられなかった。「バリッ」とペットボトルを開封する音がして、人工的な甘い香りが漂ってきた。「午後の紅茶」ミルクティーである。ウソ臭い紅茶の匂いが鼻を突き、胃がグググッと動いた。普通の状態だったら、そこまで目を奪われるほどの食べ物ではなかったと思う。まだ、山行を始めて4日目だったが、初日からほとんど同じものを食べ続けてきた僕は、すでに加工食品に飢えていた。人間の食べ物の味を知ってしまったヒグマが、人を襲ってしまう気持ちがよくわかった。今にも、菓子パンの入った袋と食パン1斤を掴んで走り去る寸前だった。「どうぞ食べてください」と一番若い調査員が言ってくれた。「いいんですか。」と言い終わる前に菓子パンを1個手に持っていた。レンズ豆がちりばめられたパンだった。他の調査員は、食パンにマヨネーズを塗ってから、ツナをはさみ、もぐもぐしながら何か話してあった。会話を弾ませて、仲良くなればもっと食料がもらえるに違いなかった。』(服部文祥、「単独・日高全山縦走溯下降(前編)」、『岳人』、04年11月号、150頁)。

『行程が長いんで、変わったモノを食べておきたいんです、と僕は心の中で懇願した。…彼らが出発の準備をするのを眺めていた。いらない食料が出てくるのではないかと期待していたのだ。だがその気配はないようだった。「何か食べるもの余ってたりしないかなあ」とちょっとお茶らけて聞いてみた。冷めた笑いが起こった。なに言ってんのこのおっさん、という感じである。「お茶ならたくさん余ってますよ」といいながら若者は行動食をもりもり食べていた。』(服部文祥、「単独・日高全山縦走溯下降(後編)」、『岳人』、04年12月号、150頁)

これまでの気取った山行文ではないが、素直な感情の発露を通り越し、まるで餓鬼ではないか。受け狙いにしても品がなさ過ぎる。異様な食へのこだわりは、93年3月25日からの卒業山行(村田文祥、「知床半島全山積雪期単独縦走」、『山と渓谷』、94年3月号、207～211頁)で、キツネに食料を荒らされた事のトラウマが原因かもしれない。それにしても、幸運の星の下に生まれた方だ。その山行では、知床岬で漁船にピックアップされ帰っている他、極地法とはいえK2に12人も登頂出来るほどの条件に恵まれ、黒部でも案外好天だ。TV取材中の滑落がなかったら、そんなにインパクトのあるドキュメンタリーにはならなかったと思う。ハンターが目の敵にならない時代になったツキも味方している。運も実力の内かもしれない。

『生活そのものを山に持ち上げなくてはならないところが長期登山の難しさであり、おもしろ

さ』(服部文祥、「冬の長い山行における具体的食事とその重要性」、『岳人』、02年5月号、149頁)と記しているが、その想定する日数はせいぜい10日程度のもの。『充実した「食」が「実力」を発揮する』ほどの長さではないし、『長期山行での食の重要性にこだわる』(同、149頁)といえるほどのものでもない。『「山やである」ということが人生の一つの要素ならば、食に対するこだわりは当たり前ともいえる』(同、149頁)強い執着は、旧来の登山者の酒に対するそのままである。この程度の長さの山行でここまで言い切るとは、食欲が卑しさの源泉か、人を蹴落とし、ものともしないハングリー精神の持ち主なのか。

まともなきちんとした評論文が書けない例を一つ上げると、下手な擁護としか思えない記事(服部文祥、「その判断の先にあるもの「風の谷」パーティー遭難救助の顛末と検証」、『岳人』、10年5月号、155～158頁)も、むにゃむにゃするだけで要領を得ないものだった。いつも、仲間内、目上の人や権威者にはからきし弱い弱肉強食の野生の感情表現が持ち味なのに、登山界の先達を論理的に批判して評価しなければならないから腰砕けになる。対抗する山岳誌『山と溪谷』に載った、10年1月4日、寺地山でヘリによって救助されたガイドは、『今回、計画上の最終下山日は3日であり、みな翌日から仕事も控えていた。…救助要請以外、方法がなかった』(山田哲也、「黒部五郎岳遭難報告 豪雪にはばまれ山岳ガイド1名と顧客6名が自力下山できず」、10年3月号164頁)と書いている。携帯で救助を要請出来るなら、会社にも連絡出来る筈だから、切羽詰まった事情を説明して仕事を休ませてくれと頼んで拒否する雇用主はいない。明日から仕事があるからとヘリで救助された心境で、翌日まともな仕事が出来るとはとても思えない。もし、その日までに絶対帰らなければいけない前提の山行なら、その日以降の予備食も予備日も必要ないし、あったとしたら矛盾だ。それが、自ら作った登山のルールの手帳なのに、引き返すのに十分の日数を超えて行動した事自体が間違いだ。冬山へ入るのに十分な予備日を準備したらガイド登山は出来ないかもしれないが、『ガイド登山であればこそ、もっと早く撤退を決めるべきだっただろう。自力下山ができる範囲での早めの判断が重要である』(鈴木昇己、「すべての判断が遅かった」、同、164頁)で、当然だ。このように、的確、明確に書いていたのと対照的だった。

ヨーロッパアルプスのガイドは、客の安全を保証出来ないと思えるような天候や積雪状況の時は、直ちにガイドを中止し、その費用が既に払われていても、返金したり次の為に回してくれると聞いたことがある。万が一にでも予定日までに帰ることが出来ないような可能性のあるガイド登山を行うガイドは、ガイド失格だろう。

ガイド登山でなくても、予備日もほとんど持たず、仕事に間に合わないといって救助を要請出来るような計画なら、はるかに気楽な山行が可能だが、緊張感、登山の楽しさも激減すると思う。

もう予備日の相当日数を消化してしまったという理由で途中下山しないでいいなら、少なくともサポートを受けた登山になってしまう。

『岳人』は、プロであれば二重投稿も許すようだ。09年1月10日、塩見岳を超え、北俣岳を越えた当たりでテントを張り凍傷になったという記録(西田省三、「ドキュメント凍傷」、『山と渓谷』、09年12月号56～57頁)と、ほぼ同じ記事(西田省三、「塩見岳3052m 気がつけば凍傷。指を失った登山」、『岳人』、12年1月号、41～46頁)が、同じ写真まで使われて掲載された。馬鹿げた場所でのとんな事故だが、空元気、気取って、強がった文章は、「サバイバル登山家」似だ。自慢話と、カメラ目線のセルフポートレートが特徴の記事も時々掲載されている。『岳人』には、以後も彼の写真が使われ続けるのは、仲間だから以外、理由が考えられない。伝統ある、権威ある雑誌の命運も尽きて、サバイバルに邁進せざるを得ない状況なのだろうか。

最後に、山雑誌に載る思い出話には、思い込みや錯覚が多く書かれているので注意が必要だ。例えば、『北岳山頂から吊り尾根分岐までの下降、そこから岩稜伝い一五〇メートルの下りは、、、。…七十度を超えるつるつるの氷壁となって、、、。…一カ所岩稜の切れたところもあり…』(白旗史郎、「追憶の一葉、追懐の山 第25回 白根山稜上の彩雲」、『山と渓谷』、09年1月号、147頁)と書かれていたが、これまで厳冬の北岳に数十回登っているのに、その場所がどこかは想像出来るが、あまりに大げさすぎる表現だ。毎回のとんでも内容に度肝を抜かれ続けた連載だった。この有名写真家は、岩波から出版した本にまで、ホラ話としか考えられない事を面白おかしく書いているのが驚異である。本人も本当だと思い込んでいるのか、知らない人が本当だと信じてしまうのが心配だ。

北岳山荘で一番記憶に残っているのは、94年末、小屋内に5、6用ウインパーを張っていた大学山岳部パーティーだ。新人を含んでいたとはいえ、エベレスト遠征の為にトレーニング山行の人たちが、小屋の殆どを占拠しているとは、、、。もちろん、入り口の真っ暗闇のところで泊まらざるを得なかった恨みではない。

山小屋

一番大きな出来事は、09年6月30日に千枚小屋が全焼した事だろう。報道によると、6月29日、管理人3人が山開きの準備をしてから下山、30日戻ると小屋が全焼していたとい

う。台所当たりから出火したとの事だが、翌年、原因は低温着火とされた。東海フォレストのホームページ、09年7月4日付の「千枚小屋の焼失後の経緯のご報告」には「再建計画につきましては、原因と責任の特定が必要」と書かれていたが、「責任の特定」は未だない。

問題なのは、その小屋は、小屋締め翌日の93年9月25日焼失し、94年再建され95年から使用されていたものだという事だ。小屋締めの翌日、荷物の片付け中、30分くらい離れた林道の車まで荷物を運んで戻ってみると、出火していて手の付けようがなかったと、当時報じられた。

今回の火事と経緯があまりにも似ている。原因を「低温着火」であり不可抗力としてお咎め無しにするなら、なぜ他の類似構造の小屋が火事を起こした事がないのに、千枚小屋だけ十数年間に2度もの火事を出したか。実に不思議なことだ。「低温着火」としても、類似構造の小屋ではなく同じ小屋がまた同じような火災を起こすとは、少なくとも運営会社の管理責任は免れ得ないと思う。一般常識的に考えれば、どちらも明らかに小屋管理人の不注意による失火と考えるのが普通だ。それとも、千枚小屋にはプロメテウスの悪霊が憑いているのだろうか。二度ある事は三度あるということわざを思い出す。こんな事を町で起こしたら、刑事責任が問われる。公営の山小屋は燃やしても問題ないのだろうか。そして、失火で燃やしても何ら責任を問われることなく、新たな小屋を建てるほど静岡県は優しいようだ。常識的には、どちらの場合も管理運営会社が再建して当然としか考えられない。94年はまだ財政状況がよかったから許されかもしれないが、今はそんな甘い時代ではないと思うが。

12年7月21日には、1億3300万円かけた県産木造りの小屋が再建され、3年ぶりに営業を再開した。火災を起こした東海フォレストや小屋管理人の責任が問われたとは聞かないし、処罰された事もなさそうだ。しかし、再建された千枚小屋の運営は、火災の責任を明快に示してからにすべきではなかったのか。静岡県のホームページには今に至るまで何の報告もないようだ。熊の平小屋は80年の秋に焼失した。当時の事情をよく知る方によると、小屋番(個人運営)の失火が原因であり、81年に再建された小屋は東海フォレストの運営に代えられたという。刑事事件にしなくても、実質的にはきちんと責任を取らせる必要があったのに、何ら責任もとらせずそのまま運営を続けさせる様は、電力会社そっくりだ。行政との親密な関係を疑われるような事をすれば、企業イメージが悪くなるだけだ。

09年から、伊那市にある山小屋は全て第三セクターの伊那観光運営になった。塩見小屋、仙丈小屋、長衛荘、藪沢小屋だ。その年から伊那観光が黒字経営になったのは、山小屋の儲けが大きいからだという。

06年から指定管理者制度になっている、南アルプス市営の山小屋の会計報告も興味深

い。ホームページに掲載されていた 06 年、07 年の収支決算報告書による決算額(収入－支出)は、全ての小屋が数万円と揃っていた。それ以後ホームページ上から消えた理由は、情報公開法の対象との事だ。日本では法律の名称も、しばしば実体とは逆につけられる。08 年、09 年、10 年の収支決算書を見て驚く事がある。8000 万円以上の売り上げのあるところから 400 万円そこそこの小屋までであるが、市への納付金(いわゆる賃料)は、直営である北岳山荘は 0、半ば街の宿泊施設、広河原山荘の 150 万円を除き、40 万円から 10 万円くらいに収まっている。北岳山荘は市への納付金はなく、毎年、平均数十万円積み立てしている。しかし、どれも消費税以外の税金を殆ど払っていないように見えるのは特筆に値する。伊那市の例からすると十二分に利益が出ている筈だが、どうなっているのだろう。

指定管理者制度は 03 年の地方自治法改正で導入されたが、それは自治体を選んだ選考委員により選定されるから、公平性や透明性に疑問符がつく。何から何までの日本独自の民主主義である。

北杜市の七丈小屋にも、06 年から指定管理者制度が導入され、市納入金(いわゆる賃料)は 21 万円だ。塩見小屋以外、制度が変わってからの小屋の管理人も以前と同じだが、08 年から 10 年まではヘリによる荷揚げが出来ないと理由(明らかに嘘)で食事の提供を中止し、レトルトの販売だけにした(11 年、早川尾根小屋は、クマに小屋を荒らされ、食料の保存が出来ないと理由で、素泊まり 3500 円だけだったが、12 年からはレトルト食にしている。素泊まり 4000 円、2 食付き 5000 円、レトルト夕食、朝食、各 700 円。朝食はおでん、夕食は親子丼と味噌汁、ご飯は炊いている。宿泊料金、レトルト食価格も安価だ)。それには相当苦情があり、11 年からは食事付きに戻したが、朝食を街のホテル並みの 6 時からにした。山小屋なら、朝早くから朝食を作りたくないとは言えないから、体よく断る理由を考え出したと思えない。06 年には枯れやすい水場を町が整備して、以後殆ど枯れる事はなくなった。プロパンや灯油を使うようになる前の七丈小屋では、周辺のダケカンバ等の樹木を切って燃料にしていた。周囲の源流域は裸地化して、最後に残った樹林の中にあるのが今の水場だという。手入れのされない五合小屋の水場は埋まり、ほぼ水が出てない状態になっていたので有り難い。自然の水場だと思っているものの殆ども、人の手が入った里山のように自然な人工物かもしれない。五合小屋は 07 年シーズン前に撤去された。なお、08 年に甲斐駒ヶ岳の山頂と摩利支天の分岐から、それぞれの方向に 100m 程白いロープが張られた。長衛荘では、09 年に藪沢から何 km ものパイプを引き導水し始めた。ちょっとやりすぎではないのだろうか。特別保護地域に林道を通す事で大めめしたところに、バスはもちろん山小屋はまさに異物、それを

不思議にさえ感じない感覚の麻痺状態が、日本の環境保護の意識レベルだ。仙丈小屋に宿泊したという人から信じられない話を聞いた。08年の長衛祭の日だったか、ヘリコプターで環境省のナンバー2という高官が仙丈小屋を訪れ、大宴会をしていて一般登山者は小さくなっていったという話だ。信じたくないが、さもあんなと思う自分が怖い。

北沢駒仙山荘は11年の小屋閉め後解体され、12年は新築の為休業、12年年末から営業を開始している。13年シーズンからは、創立者の名にちなんだ長衛小屋に戻った。紛らわしい名前の長衛山荘は、13年12月から北沢峠こもれび荘に変えられ、暫くすればその2つの小屋を混同することはなくなるだろう。

ところで、芦安山岳館の42年生まれの館長が今だ変わらないとはどうなっているのだろうか。65年から夜叉神峠小屋に暫くみえ、85年からは広河原山荘、03年から現職だ。公的施設だから、そろそろ後進に道を譲るべきだろう。

ある公営山小屋の管理人の子息が、後継者として同じ公営山小屋の管理人に収まっている不思議を『山小屋、環境と登山』の「南アルプスの山小屋、サービスを中心として」に書いた。公営小屋を家業と考え公言してはばからないことを『うちは親父が山小屋をやっていたから、物心ついたときから自分も山小屋で働くだろうな、と思ってました。……学校を出たらすぐ小屋に入れてお達しが来たけど、正直イヤイヤやってました。』（小林百合子、「若手山小屋主人が語る 新しい南アルプス」、「Peaks」、13年8月号、樫出版社、114頁）との、広河原山荘管理人自身の発言から知った。公営、公共といいつつ、末端ではこのように地域のボスが実権握って家業化し、それを些かも特権と意識していないことを素直に表した座談会の記録だ。読んだ時、その違法といえることを平気で話している天真爛漫さに驚愕した。その山小屋は車横付け、バス停から数分の距離にあるのに、奥地の山小屋レベルサービスで、町のビジネスホテルの2倍くらいの料金だ。これは、末端、体と情念が封建時代のままで、古い情欲にまみれた頭に欧米民主主義の理性をメッキして体裁を整えただけの、日本のどこにでもある情景なのだろうか。

今では、テント料金が400円なのは、光小屋、仙水小屋と早川尾根小屋だけになった。

農鳥小屋の甲斐犬4匹は、相変わらず元気だ。環境保護の末端を担う人が、飼い主と仲間だから今後も変わらないだろう。小屋番は取扱注意の南アルプス名物だ。

鋸岳には 04 年、付け方が悪く振られてしまうが、鎖がつけられ、六合小屋は 06 年秋に 484 万円かけて改装された。

赤石岳をモニターするライブカメラが、09 年 10 月 6 日、牛首峠に設置された。北岳からの中継ライブカメラは 12 年には見られなくなり、夜叉神峠のものも不調の事がよくある。

廃墟同然だった兎岳避難小屋は、09 年 9 月 10 日と 11 日の 2 日で改装された。600 万円かかったという。外装も、ドアも廃墟状態のままだが、内部がプラスチック部材で床、壁、天井の全てが覆われて、一応雨露凌げるようになった。当然、一回り以上小さくなり、頭が着くほどの天井の高さだ。ドアさえ閉じる事が出来ず、石を置いて開き止めをしているだけなので、冬期はそれが凍り付いて開かない事もある。避難小屋を当てにしている利用出来ないなら大変だ。これだけは直ちに改良すべきだろう。トイレは埋められ物置にされ、携方便袋が置いてあるが、宿泊者が多くなって、かえって周辺にブツの跡が目立つようになった。

中高年の山ブーム以降の新しい現象に、登山道に鎮座する便とそれを覆う大量の白いティッシュペーパーの花がある。お花摘みをしてはいけないという環境教育の充実が、「お花摘み」に出て、穴を掘りブツを埋めてくるという登山常識をすっかり忘れさせたようだ。

山小屋のバイトも新世代になっている。半ば、トレラン趣味のような人が多くおり、小屋で賄いや接待等をする他は、歩荷をする(が出来る)訳でもなく、登山道を整備する(が出来る)訳でもなく、周辺の登山道をトレランして、仲間と速さを競って楽しんでいる。一般的山の知識がないし、興味もなく、涼しい山小屋に定着して実に楽しんでいる感じだ。日本の夏山なら、小屋で守られていればそれが出来て当然だろう。十分楽しめる。しかし、せっかくの山。環境保護を、自然に親しめと言うなら、まず森林限界以上の山小屋の避難小屋化し、山小屋の売店、食堂を禁止するのが先だ。クライミングルートと真反対、歩き登山ではますますポルトベタ打ちルートばかり作られる。出来るだけ、道具や人工的なものに頼らず、自分の力だけで挑戦する本来の登山に戻さないと、日本の山岳地帯はスポーツの対象ではなく、観光地の散策地になってしまう。本物の自然を感じられず、町の延長、山小屋という防弾ガラス内から見た綺麗なだけを自然と勘違いする。自然の厳しさに些かでも挑戦するからこそ、生きている事を実感し生きる意欲が喚起されるものだと思う。日本の夏山で、山小屋頼りの山行は登山ではない。

県営林道南アルプス線と県道南アルプス公園線では、05 年から一般車進入禁止になり、

タクシーとバスのみ広河原に入る事が出来るようになった。02年と03年の土砂崩落による林道崩壊の通行止めが続いた事から、安全性への配慮と渋滞解消のため導入された。08年からは、「協力金」制度が始まった。南アルプスの自然環境を維持するためのゲート管理や駐車場管理に当てられるという。片道1人100円の協力金を徴収し毎年600万円くらいになる。バスの切符には予め協力金分の領収書が付いているのでは、協力金ではなく強制金だ。あたかも強制か、運賃に含まれているように徴収するやり方は姑息としかいえない。きちんと協力金の趣旨を説明してからの任意支払いなら一理あるにしても、極めてグレーに近いブラックだ。協力金を徴収している「南アルプス山岳交通適正化協議会」が、知事と県警本部長に求めてこのような制度が出来たようだが、町内会を通して準強制的に回ってくる各種募金より強制的で悪質な感じだ。本当に必要なら、正式に通行料として100円を取ればいい。何もかもを曖昧にして、懇親会費に使われているのではないかと邪推されないようにすべきだろうが、客も客で、簡単に協力しないことが出来るのに、そのまま支払う人が99%とは、物凄し。奴隷根性が事なかれ主義か、付和雷同、大勢翼賛日本型民主主義か、いずれにしても自然保護に理解が深いことではない。

これは社会的公正、公平に多少の疑問はあっても、世間的には許されることと理解されている証拠かもしれない。

しかし、それでは"Society"という概念を翻訳するため、封建思想に拘泥された『世間』は相応しくないので、『社会』という言葉を創作した福沢諭吉の苦勞が台無しの『二重思考』だ。西欧で生まれた現代の民主主義は、日本に移植され非白人国で唯一、植民地化もされず19c中旬に近代化に成功したものの、その内部は封建意識が熱く残り、経済成長期を過ぎ斜陽期に入った綻びからマグマとなって吹き出し、表面の西欧的民主主義を飲み込もうとしている現れかもしれない。

ところで、科挙を採用しなかった日本は、古人の智慧、判断より現実の合理的解釈を優先する国柄だったはずだ。その本来日本人が持っていた精神により、西欧の近代思想をいち早く理解吸収、翻訳して自家籠中のもとし、植民地にもされなかった。150年も前の先人が苦心して本質を捉えた翻訳をしていたのに、近年は、連合UN "United Nations" を国際連合とか、あえて本質を見えないよう表現している内、自分の頭で考えることさえできなくなってしまったのだろうか。自らの頭で考え判断するという民主主義の基本的精神が、明治維新、王政復古前から根付いていた国だから、市民革命を経てなくても、日本で真っ当な民主主義が成立すると信じたい、希望したい。

母語でのみ物事が実感を持って捉えられ、その上に本質を語ることばを持って、始めて深い

思考が可能となる。明確な言語化はできなかったが、新たな概念を正しく理解し、表現することばを作り出した日本人、日本語と日本文化は、非西欧文化圏、漢字文化圏で唯一、科学革命の意味を理解できたが、残念ながら我々の血肉とまではならなかったのか。

神職者が國學院大學ではなく、仏教大學に学ぶのと同様、皇族の方々が英国の大學に留学するのも違和感がある。天皇家の葬儀は、明治になって仏式から神式に変更されたにもかかわらず、日本で最も高貴な血筋の人たちが、自分のことばで高等教育を受けないのは、彼らでさえ西欧文化の僕、英国植民地の王族並みとは情けない限りだ。日本文化の価値を心底から信じているとは思えない。

たとえ、国語に英語を採用しても、生活のことばと理念のことばが分離した、永世欧米文化属国に甘んじるだけだ。余談が過ぎたが、ことばを正確、明確に使うことからのみ、真実が見えてくる。明快であることは、真理であることの必要条件だ。

09年からは、井川観光協会運営の聖平小屋、横窪沢小屋と茶臼小屋の宿泊者に対し、バス送迎サービスが開始した。料金は、素泊まり3500円、寝具付き素泊まり4500円が、寝具付き素泊まり5000円だけになった。なお、茶臼小屋のトイレは05年秋に新築され、11年夏には増築された。エコット固体分離器3台、小便土壌処理1台だが、赤石小屋にも翌年作られたそう。横窪沢小屋の旧小屋は06年には撤去されており、10年増築された。11年にはウソッコ小屋が整備された。

しかし、たったバス1台での運行だから、乗れなかった等のトラブルを多く聞く。このような送迎バスの運用は、東海フォレストのそれと同様、本来の趣旨を逸脱しているように思う。12年4月29日、関越自動車道高速バス居眠り運転事故が起こり、乗客7人が死亡、乗客乗員39人が重軽傷を負った。高速ツアーバスと言いながら、実質的に高速路線バスの運用による過当競争の結果の悲劇だ。国交省は再発防止のため、13年7月末までに旅行業者が企画し、バス業者が運行する高速ツアーバス制度の廃止を決めた。南アルプスの送迎バスは、そのような過当競争を引き起こし安全性に問題があるものではないだろうが、高速ツアーバスとは逆に宿泊料金が上がった。高速ツアーバスも南アルプスの送迎バスも、実体はその名称と全く異なっている。ツアーでもないのにツアーとして運用することにより、高速路線バスのような責任と義務をうまく回避したのが高速ツアーバスだった。送迎バスは、本来、バス到着点にその施設があるか、そこから直ちにバスに乗れて駅まで送るためのものだ。東海フォレストでも、二軒小屋だけはそのように運営しており、それが本来の姿の筈だ。路線バスに課される責任と義務を回避するため、送迎バスとして運用するのは極めてグレーと言わざるを得ない。企業イメージにもよいとは思えない。

登山バスといわれるものは、スキーバスと比べ酷いものだ。荷物代を取りながらザックの収納スペースも用意されていない。荷物代を徴収するなら荷物スペースを用意して当然だ。また、送迎バスや南アルプス林道バスは、小学生の通学バスかお猿のバス並みのシートサイズにもかかわらず、やはりザック収納スペースが全くない。荷物収納分を含めて乗車人数を決めているならともかく、混んでいたら地獄だ。バスは新調されても、それら本質的な面には一切改善が見られない。いつまで現代の奴隷運搬船のような登山バスに、陰で文句を言いつつ乗っているのか、感じないのか、どちらにせよその忍耐力の強靱さは敬服に値する。

東海フォレストのホームページでは、10年から、始めて山小屋の前に「県営」「市営」を付けて表示するようになった。相変わらず、領収書には公営を思わせる何らの表記もない。

10年6月15日開所した環境省の野呂川広河原インフォメーションセンターは、とんでも箱物、歴史的愚行だ。それまでの新品同様に見えたアルペンプラザ広河原を07年一杯で撤去して、どこが変わったか分からないような建物を4億円もかけ新築するとは、環境省の体質を見事に具現化した歴史遺産として永久保存すべきだろう。これでは、山の中一面に杭打ち、ロープ張り、ペンキ印だらけにして当然だ。度し難い。アスファルト張りにしないだけでも有り難いと思わなければいけないほどの環境意識は、手が着けられない。

薬師小屋の伝統的トイレも、11年には牡蠣殻を利用したバイオトイレに変わった。冬期も使えるのは経営者にとっても、登山者にとっても嬉しい事だろう。近い将来、便座クリーナーも常識になるかのしれない。

荒川小屋横の水場、沢は枯れやすく、毎年お盆以降は枯れる事が多かったが、08年からは通年枯れない400m北にある沢から導水している。09年に旧小屋が撤去され、秋に新冬期小屋が作られた。夏には素泊まり小屋とされる。3重構造になっていても隙間だらけなのは、南の小屋の窓の特徴だ。問題は、入り口を埋められた時出入りする、肝心の窓のサイズ、幅が狭い事だ。50cmしかないので、大きなザックが通らない事だ。性懲りもなく、南アルプスの小屋は全く山という環境を知らない人たちによって造られているようだ。10年には半壊状態の旧トイレが撤去され、新たにタンク空輸式のトイレを新築、11年から自然放流式の水洗トイレが閉鎖され、代わりに使用され始めた(今でも、熊ノ平は自然放流式水洗トイレ)。それにしても小さなタンクだ。シーズン中何度も空輸する必要がありそうだ。この年に小屋番も変わっ

た。朗報がある。12年から発電機が Denyo DA5000 から YANMAR 製に変わり、非常に静かになった。爆音で気が狂いそうになっていた頃、ある登山者がざらりと『発電機の音以外は静かだった』と言っていたのを聞いて、のけぞったのが懐かしい。

光小屋では、08年から生ゴミを、10年からはプラごみもヘリで運び下ろすようになった。いつも先進的な試みをする山小屋だ。06年7月の大雨で、寸又林道の柴沢登山口から12km下りたところで大きな崩落があり、12年には通過するのが不可能に近づいている。それらの情報は光小屋のホームページに詳しい。80年シーズン(食事提供は83年より)から同じ管理人の方だというのが、これからも長く続けて頂きたいものだ。

多くの小屋では、寝具無し宿泊者は別棟の物置小屋のような建物に泊まられるのに対し、光小屋は、正規の小屋内に差別なく泊まる事が出来るのも珍しい。

それ以外でも、中央構造線と糸魚川静岡構造線に挟まれた南アルプスのアクセス林道は、しばしば不通になるので注意が必要だ。07年9月7日の台風9号により、横川岳から野呂川越の間が大倒木帯になり、一時フィールドアスレチック状態になったが、翌年大伐採され登山道が復活した。10年7月の三峰川林道の林道崩壊事故で、一般車は杉下ゲートから20kmくらい歩かなければ塩見新道登山口に辿り着けなくなっている。11年7月には、三伏峠への登山口、塩川の下流1.5kmくらいで林道崩落があり以後通行止め(何とか歩いて通過出来るが、歩行も禁止になっている)。11年7月、北俣渡上流0.5kmくらいで林道崩落で通行止めされていたが13年5月から復旧している。11年9月の台風12号、15号により、田代から伝付峠への登山道が崩壊し通行止めだったが、13年4月には全く別ルートになって復旧した。11年7月から林道崩落で運休していた南アルプス登山線が、13年7月から2年ぶりに運行された。13年9月7日の台風9号により、早川尾根の赤薙沢ノ頭と広河原峠の間の樹林帯が大崩落して通行不能。もろい地質だから、台風の大雨等でしばしば登山道も大崩落して通行止めになる。

こんなにもろい地形にもかかわらず、南アルプス直下に中央リニア新幹線のトンネルを通すという。二軒小屋付近で行われていた試掘調査も終了した。しかし、膨大に出る大量の残土の捨て場所と、大井川の水量が大幅に減るという問題であちこちから懸念の声が出ている。ユネスコエコパーク(生物圏保存地域)に認定されそうなのに、問題ないのだろうか。生物圏を保存するという地域で、特に森林限界以上に立つ山小屋での物品販売や食事の提供はそれに矛盾しないか不思議だ。

熊ノ平小屋で81年から96年まで勤めていた小屋番は、次に06年から11年までもみえたが、周辺が裸地化している事に驚かれていた。その後、登山者として驚く事は、12年から、また玄関がスタッフ専用出入り口に戻り、入り口靴箱は物品販売用棚にされ、登山者の出入りは2階になってしまった事だ。このような運用をする運営会社は、山小屋を小屋スタッフの利便さを考えこそすれ、登山者の快適な利用は眼中にないようだ。

中部森林管理局が07年と08年に、シカ被害報告書(http://www.rinya.maff.go.jp/chubu/policy/business/conservation/sika_higai_2007/pdf/h18minamiarupususika.pdf、 http://www.rinya.maff.go.jp/chubu/policy/business/conservation/sika_higai_2008/pdf/sika_higai_2008_1.pdf、 http://www.rinya.maff.go.jp/chubu/policy/business/conservation/sika_higai_2008/pdf/sika_higai_2008_2.pdf、 http://www.rinya.maff.go.jp/chubu/policy/business/conservation/sika_higai_2008/pdf/sika_higai_2008_3.pdf、 http://www.rinya.maff.go.jp/chubu/policy/business/conservation/sika_higai_2008/pdf/sika_higai_2008_4.pdf、 http://www.rinya.maff.go.jp/chubu/policy/business/conservation/sika_higai_2008/pdf/sika_higai_2008_5.pdf)を出した。それらを見ても、もはや手遅れかのような惨状がよく分かる。シカの食害を調べる為の金網柵(10m四方)が作られたのを初めて見たのは02年の聖平だったと思う。10年には北沢峠周辺に延々と続く柵が作られた。11年には荒川岳のお花畑にも、長大なシカ避け柵が設置され、通過するのに、4回も扉の開閉が必要だ。夏以外は、ボランティアが撤去する必要のある、維持に手間のかかるものを作っても、守れるのは極一部の所だけだ。11年3月31日に南アルプス高山植物等保全対策連絡会が発表した、『南アルプス国立公園ニホンジカ対策方針』(<http://www.rinya.maff.go.jp/chubu/sidou/other/pdf/nan1.pdf>、 <http://www.rinya.maff.go.jp/chubu/sidou/other/pdf/nan2.pdf>)も、のんびりしたものだ。超法規的に、狙撃兵のトレーニングとして自衛隊のヘリコプターからシカ狩りでもしないと手遅れだろう。それ以外は実効性、即効性がある方法は考えられない。20年前のシカは、人を恐れ、瞬間的に逃げ去る白いお尻の残像だけが印象的だった。最近では、ハンターなら大喜びだろうが、立派なシカが平気で近寄ってきて、毛並みの美しさを感じるとともに、そのうちあの大きな角で襲ってくるのではという予感と不安に震える。また、シカが生息域を広げる事により、ヤマビルが増えているようだ。山で生息域を増やしているばかりでなく、周辺山麓部まで拡大し、里山や農耕地から住宅地にまで出現して社会問題化している。シカ等の大型獣がヤマビルの宿主となり、それら生息域の拡大と共にヤマビルが広がるという。余りに野生動物の被害が多くなったので、いつの間にかハンターに対する意識が大きく変わってきている。以前のような、銃を持っている人は野蛮とか、反環境といったナイーブな反応は影を潜めた。

昔は、警察が猟銃所持希望者に対して嫌がらせ的な対応をして、その不快感にハンターになるのを諦める人がいた。それもハンター減少の一因だ。今でも銃を所持しようすると、この国が高度に管理された警察国家であることを思い知らされる。縦割り行政の常、警察の猟銃所持への対応は、犯罪人扱いと殆ど変わらない。警察署に保存されている銃所持者の管理ファイルを収めた棚を見ると、警察に個人情報丸ごと把握され丸裸にされている恐怖と、犯罪予備者としてリストアップされているような不快感を感じる。これが、美しい日本の伝統とは考えたくない。極度に銃の所持者が少ない国の自治体制服警察が、全員拳銃を持っているのも異常だ。そんなに治安が悪い野蛮な国なのだろうか。01年から発砲基準も緩和されているが、人口密度の高い日本で銃を使う為には高度な射撃トレーニングをする必要があるはずなのに、大してトレーニングをしないから新聞でも警察官の発砲による被害が報道されることがある。「やってまず行政」の典型、拳銃の使用が必要なら、所持する警官は高度の射撃トレーニングを受けさせるべきだろうが、何でも員数合わせの形式だけだ。環境省所管の大日本猟友会という天下り団体に入らなければ実質的に狩猟が出来ないとは、民主国家の末端は封建部族社会のままだ。市民、人民の自立を認めない刀狩りの伝統が何時までも残っていて、武器を一般市民に出来るだけ持たせたくないという思想は、アメリカの、市民の主体的自衛権を保証するものとして銃を所有する権利があるという考えと真反対だ。ハンターは激減して、今では地方の行政が、職員に狩猟免許を取らせ害鳥獣駆除しているほどだ。自然にうまく手を加えた里山を守っていた山間地の人のように、ハンターも自然のバランスを維持するのに必要な人だったと認識され始めたが、その一員に加わるのは封建的部族社会に入るかのようだ。

失われつつある文化への民俗学的関心としての猟師、狩猟ではなく、ハンター、狩猟を自然のサイクルの中に必要なものとして正当に位置づけ、評価するような記事を載せていた雑誌は“Be Pal” だけだったと記憶している。山岳2誌は、近年まで伝統のまたぎ猟を取り上げるだけだった。しかし、最近、野生動物による人や農作物に対する危害や被害が看過出来ないほど顕著になり、生態系のバランスを保つ為に必要な存在としてハンターやハンティングが見直されてきた。第二次世界大戦後の乱獲時代の反省から、狩猟に対する規制は強くなり、野生動物保護が徹底されその効果は十二分以上にあった。農山村の人口減少により、周辺の二次林が利用されなくなり野生動物のテリトリーに変わり、緩衝帯を失った彼らが農耕地に進出、栄養価の高い栽培食物の味を覚えてさらに繁殖した。NHKでも、13年2月4日「ハンターが絶滅する？～見直される“狩猟文化”」、14年5月15日「急増する野生動物被害～拡大の実態」と、時々その問題がクローズアップされる。

公共交通機関の減少が目につくようになり、入下山に不便を感じる事が多くなった。08年6月1日から、井川線が廃止され井川地区自主運営バスがスタートし、登山者は利用しにくくなった。10月1日からは遠山郷線が乗り合いタクシー化され、本数も減った。10年7月1日からは、山交タウンコーチ横手線がオンデマンドになる。12年4月1日から大鹿線も大鹿村の委託運営になっている。これらの例のように、人口減少と自家用車利用の増加による利用者減により、路線バス経営から民間業者が次々手を引く。行政が公共交通に関与すると料金は安くなるが、本数は減り、将来維持出来るか心配になる。それでも、利用者は恐ろしく少ない。JR飯田線も、10年4月1日からさらに便数が減り、12年4月1日からは無人駅やパートタイム有人の駅が増えた。自家用車でのアクセスが便利になれば、公共交通機関が衰退して当然だが、長期縦走には不便な時代になってきた。13年4月1日から芦安行きのバスは廃止され、途中の御勅使までになってしまった。シーズン外に登山をしようとする人も不便だが、登山シーズン以外にどうして高校に通学するのだろう。

05年くらいからツアーが少なくなっている気がする。しかし、8人亡くなった09年7月のトムラウシ事故を開催したアミューズトラベルが、以後も営業を続けられたのは不思議だった。政治力があつたのだろうか。しかし、またも同社は12年11月、万里の長城ツアーで3人の死亡者を出す遭難事故を起こし、12月20日廃業した。山岳ツアーは、新聞社系の会社も多いので、多少の事故は握りつぶされ社会的な問題にならないかもしれない。日本の山は、夏山といえ、時としてツアーを安全に行えるような気象状況でなくなるから、このような山岳大量遭難が繰り返し起こる。

トムラウシ事故では、避難小屋を予めスタッフが占拠して、そこでの宿泊を前提にした行程も問題にされた。それは、南アルプスの営業避難小屋の運営と、そこへの宿泊を前提にした行程を組む登山者と同じだ。本来の避難小屋に戻してこそ、安全な登山が守られる。避難小屋の宿泊料金が一般の小屋と同じでは、何の為の避難小屋なんだろう。いざという時でも、お金がなくて泊まれない。避難小屋だけに宿泊しても、送迎バスを利用出来る。このような避難小屋の運用は、遭難のリスクを増やすだけだ。

山奥の昔の伐採地では、朽ち果てた林道、落ちた橋、生活用品そのままの半壊飯場、太いワイヤーロープ、壊れた車等々が放置された凄まじい景観が見られる。林業とは、そんなに荒っぽいものなのだろうか。百日の自然保護説法、全てチャラではないかと、矛盾を感じる事がある。

06年にクマが大量捕殺され、絶滅を心配したくらいだが、今では増えすぎ、人里に出没して人に危害を加えると問題になっている。当てもシカの激増が問題になっていたのだから、冷静に考えればクマも多くなって当然だ。クマはシカの捕食動物でないから、クマが減少したからシカが増えた訳ではない。推定生息頭数1万数千頭が間違っていたのだろうか。動物写真家の宮崎学は『となりのツキノワグマ』（新樹社、10年7月）において、05年からの獣道定点カメラによる調査で、明らかに30年前より増えており、その推定値に対し一桁違うかもと疑問を呈している。これは、野生動物調査の難しさを示すのか、お粗末な日本の野生動物研究レベルを表しているのだろうか。少なくとも、自然保護や環境保護は、センチメンタリズムではなくきちんとした実証データから話を始めるべきだ。また、お花畑を守る為、高山地帯の辺り一面にシカ避け柵を作って嘆いている前に、まず即効性のある手段をとるのが急務だ。明らかに、本来生息していない動物がお花畑を壊滅状態にしたのだから、国立公園内だからとは言ってられない筈だ。南アルプスでは、問題が顕在化してから、お花畑の一部を柵で囲ってその変化を見るようなのんびりした調査が始められた。傷をして出血しているなら、まず止血しなければならないように、人里と同様、まず当該地域でシカの捕獲が必要だ。実証的な研究ののんびりさ、当事者意識の欠如は、誰も責任をとらない行政の無責任体質から来るものに違いない。高山植物を守る為といって、登山道をどんどんロープだらけにするのは、核心的かつ大局的問題には全く及び腰の対処に終始するだけで、細かな事には苛めのようにうるさい姑根性だ。問題の本質が分からず、今直ちにしなければならぬ事を忘れているのか、避けているのか。どんなに貧欲な盗掘者も、シカほど高山植物を根こそぎにしなかった。お花畑や高山植物の激滅を見ると、悲しくなってしまう。

最後に、本書では近年の鈴鹿の酷い荒れ具合を書いたが、08年9月2日の大雨、豪雨は、鈴鹿全域でさらに甚大な被害をもたらした。鈴鹿で一番大きな落差18mの銚子大滝が、土石流で埋まって跡形もなくなったほどだ。これほど変わってしまうとは信じられない。花で有名な藤原岳の平頂部は一時丸裸になっていたが、横の石灰採掘現場の道路から飛んできたのだろうか、平地の荒地に生息するはずの植物に覆われ始めている。シカの増加と共にヤマビルが非常に増え、山に行く気を失せさせるほど気分が萎える。(了)